

社 会 正 義

紀 要

1

上智大学社会正義研究所



目 次

<創刊の辞>

平和と正義の実現のために……………柳 瀬 睦 男	2
--------------------------	---

<論 文>

ヨハネ・パウロ2世の社会教説……………アンセルモ・マタイス	3
-------------------------------	---

人間の顔をもつ国際秩序……………高 野 雄 一	27
-------------------------	----

マス・メディアと社会正義

ーフィリピンを中心に<研究メモ>…武市 英 雄	43
-------------------------	----

所有についてのカトリック思想

……ブルクハルト・ヴェクハウス	55
-----------------	----

新回勅「労働」に基づく経営理念……………山 田 経 三	77
-----------------------------	----

Global Spirituality <特別寄稿>……………Patricia Mische	95
--	----

[論文要旨]……………	131
-------------	-----

<報 告>

上智大学社会正義研究所活動報告……………	141
----------------------	-----

〈創刊の辞〉

平和と正義の実現のために

上智大学長 柳 瀬 睦 男

平和が世界をおおうことは、古くからの人類の強い憧れであり、夢でした。平和は従来、戦争の対立概念として理解されてきましたが、最近では故ヨハネ23世の『地上に平和を』や故ケネディ大統領の国連での演説等にもみられるように、単なる戦争の対立概念としてではなく、正義が各時代の実現されるという、よりダイナミックな意味をもつものとして理解されるようになりました。

残念なことに、21世紀にもなろうとする今日でも、戦争は姿を消すどころか、その規模においても手段においても一段と悲しむべきものがあります。相互依存と連帯の必要性が叫ばれながらも、戦争のみならず不正もまたあらゆる姿をかりて世界に現存しているのが実情です。この不正は、個人の間だけでなく、諸国民の生活を支配する制度や、社会・経済・政治機構のなかにもあります。

このような不正の実態を調査し、その根元を明らかにし、それに挑戦し、平和を世界にもたらす努力を払うことは、人類にとり緊急かつ重大な課題です。本大学においても、平和と正義の実現のためにいささかなりとも寄与できることを願い、学問と実践の両面にわたる活動を積極的に推進するため、昨年（1981年）4月、「社会正義研究所」を設置しました。

このたび、その活動の一環として紀要『社会正義』を創刊することになりましたが、このささやかな出版物が日本、アジア、世界の社会正義実現へのインパクトになっていくことを心から期待いたします。

ヨハネ・パウロ 2 世の社会教説

アンセルモ・マタイス

この小論文は、しばらく前に『人間学紀要』に出した「現代の教会における社会問題に関する一考察」¹⁾の続編として読んでいただければありがたいと思う。前編では、ヨハネ・パウロ 2 世以前の現代の教会の考え方を紹介し、本続編において、従来の伝統的な思想を受けつぎながら、いかにしてヨハネ・パウロ 2 世は社会問題を構造的に位置づけているか論じてみようと思う。

前 置 き

1. 伝記的な記述

1978年8月6日、パウロ 6 世が亡くなり同年同月26日、その後継ぎとして選出されたヨハネ・パウロ 1 世は、33日後の9月28日、「やさしい、微笑む教皇」というイメージを残してあの世に去った。2か月間に続けて2回招集された111人の枢機卿の3回目の投票によって、クラクフのポイチワ枢機卿（前教皇の思い出を受けついで、ヨハネ・パウロ 2 世の名を選んだ）が選出された。10月16日であった。オランダのアドリアン 6 世（1522—1523）以来初めての非イタリア人であり、しかもソビエトの衛星国であるポーランドの出身として注目される。54歳で教皇になり、教会史上、いちばん長く聖職（1846—1878）についたピオ 9 世に次いで、教皇にしては、

1) 上智大学人間学会『人間学紀要』第11号、1981年、pp. 141—162参照。

ヨハネ・パウロ 2 世は若い58歳で最高の司牧を始めて、もしかすると21世紀までその活躍が期待されている。労働者階級の出身は、教皇史において初めてのケースだと思われる。

ソルベイという化学工場に働きながら、司祭になるための勉強を始め、1944年からナチスのポーランド占領が激しくなるにつれて、クラクフの司教座に潜伏しながら勉学を続け、1946年11月1日、司祭になってすぐ、ローマに赴き、2年間神学の研究を続ける。スターリン時代（1947—1956）という困難の状況において司祭として活躍しながら、得意なスポーツ（登山、カヌー、スキー）をやっていたと言われている。1958年、カヌーをやっていたときにクラクフの補佐司教に任命されたという知らせを受けた話是有名である。1964年クラクフの大司教になり、1967年枢機卿に任命された。大司教の身分で、もうすでに情熱的に「言論の自由」と「信教の自由」を訴えて「警察の権力による権威は欲しくない」と強調する。1962年以来、第2バチカン公会議が行われている間、しばらくローマに赴き、おもに「信教の自由」と「無神論」に関する洞察に満ちた考え方が注目される。枢機卿として1969年、カナダとアメリカを訪れ、1973年、オーストラリアに赴き（ニュージーランド、フィリピン、ニューギニアにも訪問する）、1976年、フィラデルフィアに行き、ハーバード大学とワシントンのカトリック大学に、それぞれ講演をし、1978年ヴィジンスキ枢機卿と一緒に西ドイツを訪れている。

1969年、フッサールの現象学を取り入れながら『行動的な人間』という人間学の書物をポーランド語で著わし、1979年、その英語訳 “Acting Person” を出版する。多くの演劇と詩のほかに哲学と神学に関するおよそ120の論文を書いている。

以上のような背景を持ったポイチワは、教会史上初めてのポーランド人として、1978年10月16日、ヨハネ・パウロ 2 世になったわけである。イタリア国内の旅行を別として、3カ月たつと1979年1月ドミニカを経由して、

メキシコを訪れ、同年6月母国ポーランド、9月アイルランド、10月アメリカ、12月トルコ、1980年5月アフリカ諸国、同年6月フランスとブラジル、11月西ドイツ、1981年2月フィリピンと日本（アンカレジとパキスタンのカラチに立ち寄る）を歴訪し、キリスト者と非キリスト者を問わず、世界中の人びとの精神的なリーダーの地位に申し上がった。クラクフの学生がいみじくも言っているように、「彼は我々の友であったが、今や世界全体の友になった」。同じく、アメリカのプロテスタントの演説家として知られているビリー・グラハムは、ヨハネ・パウロ2世を「世界の新しい精神的なリーダー」と呼んでいるのは当を得ていると思われる。

さらにつけくわえると、ヨハネ・パウロ2世は労働者階級の出身であるだけに、どこに行っても政治家や一般の人びとに話すばかりではなく、とりわけ労働者やスラムの人びとに語りかけていることは注目に値すると言わなければならない。メキシコのインディアンと労働者、グェダラハラの労働者、ポーランド、フランス、ブラジル、西ドイツの労働者、アメリカのハーレムの人びと、フィリピンのトンドのスラムの人びと、フィリピンのバコロドの砂糖プランテーション労働者などに対して話すなど、ヨハネ・パウロ2世の関心はどこにあるのか、おのずから理解していただけるのではないかと思う。

2. 教会と社会

本小論文のはじめに言及した記事の中に指摘したように、教会の使命は直接に政治に干渉することでもなければ、教会の内部にとじこもって、いわゆる“靈魂のみの救い”に限ることでもない。教会の説く救いというのは、人間全体の救いであるが故に、正義と人権が蹂躪されるときに声なき抑圧された人びとの声となって、その不正を批判し、人間尊重が認められる社会を訴える権限と義務があるのは言うまでもない。

ヨハネ・パウロ2世は、どこに行っても、以上のような姿勢を保ちながら、人間全体の救いを訴え続けている。メキシコを訪問する最初の旅行の

途中でサント・ドミンゴに立ち寄って、「福音を知らせるということと、人間的な促進を切り離すことができない。……人間性のエキスパートである教会は、今日において信仰の使命と人権保護の使命を継続させたいと思っている」と強調している。さらに、メキシコのプエブラの司教会議を始めるにあたって主張しているように、「教会の使命は社会—政治的よりも、宗教的な性格を帯びているが、人間というものを全体的な姿において考察せずにいられない」。ルカ福音書の10章のよきサマリア人のたとえ話に言及して、「教会の福音的な使命の中に、正義と人間性の促進という活動と課題が欠くべからざる必要な部分として含まれている」。換言すれば、「信仰の奉仕、そして正義の促進」は、切り離して考えることができないことにほかならない。

アフリカを訪れる前に、トリノにおいて正義と不公正と特権的な不平等のすべての原因を取り除くように訴えている。「教会は昔の預言者の力強さや福音の爆発的な言葉をもって、社会の不正を弾劾する」。ザイルに到着した教皇は次の言葉でアフリカの巡礼を始めている。「アフリカの友と一緒に、正義と安全と調和の環境の中に、この大陸の子供たちが、明日にもからだと精神の糧を見つけることができることを熱望する。私は希望の人としてここに来た」。未来に対する終末論的、破滅的な預言に対して、福音に根ざす希望の巡礼者として立つ教皇は、我々を積極的な行動へ促しているような気がする。

ガーナの大統領を訪問して明瞭な言葉で教会の課題と使命を打ちだしている。「教会は政治経済的な設計と計画を持ちあわせていない。国家の発展に対する教会の最も効果的で長期的な貢献は、正義と社会的な愛と兄弟的な協力の要請に関して、人びとに道德倫理的な自覚を呼び起こし、全人間の発展を強調し、その発展をただの唯物論的な意味のみに理解しないことを保証し、神から与えられた尊厳を自覚させることにある」。同じ趣旨の言葉をブラジルの大統領に投げかけている。「私の旅行は厳密に使徒的

な性格ならびに明白な司牧の目的を持っている。しかし、この宗教的な特質を持つとともに、人間の価値と尊厳、社会生活に関する明瞭なメッセージを含んでいる。私の考えている人間の概念は次のように言うのをはばからない。人間はこの世の中にしめる位置を放棄することができない。人間は、物、物質的な富、消費、経済的な組織、人間自身の作り出す生産物の奴隷になってはならない。人間は他の人間や、他の物によって隷属されてはならない。人間は全存在を不具にせず、超越的、終極的に神を無視することができない」。無神論を目標とする共産主義のポーランドを訪れたときに、「信教の自由」という人権を強調された教皇の言葉を思い出さずにはいられない。

上述したように、ヨハネ・パウロ 2 世は、常に労働者や貧しい人びとに語りかけることを諸国歴訪のひとつの目標にしていたようである。マニラの有名なスラム・トンドの人びとに向かって、はっきりと教会の使命を自覚して次のように主張された。「貧しい人びとの人間としての尊厳を、人間としての未来に対する彼らの希望を促進するのは、教会にとって余計なことでもなく、日和見主義の戦術でもなく、群衆のご機嫌をとる手段でもない。それは教会の義務である。なぜならすべての人びとが、神によって与えられた尊厳を自覚して生きることを望んでいるのは、神にほかならないからである」。

教皇がアメリカを訪れたときに、8 歳の男の子が父親に向かって、「パパさまはカーター大統領のように民主党？」と聞くと、「いや、パパさまは、どんな政党にも属さないよ」と父親は答えたそうである。「それでは彼はいったい何？」。当を得ている疑問だろうと思われる。教皇はいかなるイデオロギーも主張することなく、イデオロギーを超えて、正義と人間尊重を促す預言者として、人間の手にしている技術とエネルギーを破滅的な目的に使うことをいましめ、まさにすべての人間らしい社会建設に使用することを強調している。以下に、できるだけ教皇自身に語らせながら、

詳細にわたって彼の考え方を考察することにする。

I 人間尊重は社会の原点である

教会が宗教的、司牧的な使命を持ちながら、社会問題に発言するのは、まさに人間全体の救いをめざすからである、と見てきたとおりであるが、いかなる基礎の上に立って社会問題に対して発言しているであろうか。

ヨハネ・パウロ2世はメキシコのプエブラに集まったラテン・アメリカの司教たちに向かって、「人間は経済、政治に従属するものではなく、むしろそのような経済、政治は、人間に秩序づけられ従属している」と訴え、人間のすべての営みの目標が人間そのものにある、と確認している。

おそらく第二次大戦ほど人間の尊厳が踏みにじられたときはなかったと言っても過言ではないであろう。人権蹂躪の象徴ともいえるアウシュヴィッツ強制収容所を「狂気のイデオロギーの名において憎しみと人間蔑視と残忍さの上に作られた場所」と教皇は名づけている。若い頃からアウシュヴィッツを目撃した教皇は、人間の尊厳と、いとも簡単に蹂躪され絶滅させられる譲渡不可のはずの人権に、身を捧げる決意をしたようである。母国の100万人以上の労働者に、また次のように訴えている。「経済や技術やその他の専門分野は、人間尊厳のみにその存在理由を持っている。もし、人間労働の尊厳に言及せず形づくられるものであれば、それらは誤りであり、有害であり、人間そのものに反するものである」。

ヨハネ・パウロ2世はアメリカを訪れたとき国連を訪問したが、このことはパウロ6世に次いで教皇として2回目の画期的な出来事だと言わなければならない。「結局のところ、国内、国際を問わず、すべての政治的な活動は人間から生じ、人間によって実施され、人間のためのものである。……実際問題として、どのような政治活動でも、それが存在するのを正当化するのには、その政治活動が人間に奉仕しているからである。さらに、社会や社会の重大な出来事において、この世の存在者にとって、何が最も本

質的な問題であり、義務となるかについて、深く、責任をとまう関心を呼びおこしてくれるからである。そして、まさに、その関心を払うことに一人一人の人間の福利は基づいているのである」。同じ長い演説の中に続けて教皇は強調しているように、「社会、経済、政治の体系を比較する場合、基本的な基準はヘゲモニーでも帝国主義でもあってはならない。それは人間尊重を中心とする規準でありうるし、また、なければならない。すなわち、いかにしてそれぞれの体系は、人間を搾取する種々の形態を減少し、制止し、除去することができるか、また、いかにして労働を通して必要な物資の正当な分配ばかりではなく、生産のすべての過程においても、この過程をめぐって発生する社会生活においても、人間尊厳にふさわしい参加を保証することができるかということである」。教皇が説くのは一定のイデオロギーではなく、すべてのイデオロギーを抜きにして人間尊重に根ざす物資の正当な分配と参加であることは理解できると思う。

国連の訪問を終える前に国連の職員に会って同じ趣旨の言葉を残している。「みなさまの貢献は、ただ工業生産を増強するとか、効率を高めるとか、苦しみを除去するとかいうことにのみあるのではない。むしろ、すべての人間の尊重に対する自覚を深化させ、すべての人びとが精神的、文化的、人間的な完成を、できるかぎり促進する可能性を増進することにある」。場合によって工業発展、あるいはGNPの増強は、必ずしもすべての人びと、とりわけ底辺の人びとの人間的な成長につながらないのは、多くの発展途上国の例が示しているとおりである。

1947年にリオデジャネイロにおいて設立された米州機構のメンバーを前にして、人間を中心とする教皇の言葉が注目に値する。「人間！ 人間はみなさまの活動を支配し、指導するはずである。人間への奉仕は、新たなイニシャティブが常に要請されている生きた価値である。人間にとって最も意味深い言葉——正義、平和、発展、連帯性、人権——や、組織的な権利は、党派的、宗派的なイデオロギーの結果、蔑視される」。今や、社会、

経済に関する種々の考え方を越えてイデオロギーを抜きにして、すべての人間への奉仕を正面に出さなければならない歴史的な時期にさしかかっているわけである。

戦後多くの国々には政治的独立をなし遂げたにもかかわらず、アフリカほど、他の大陸にくらべて人間の権利が踏みじられている大陸はないであろう。ザイルでは、外交団に向かって教皇はまさにイデオロギーを越えて、人びとに訴えている。「私の言葉に耳を傾けている私の兄弟すべてに、そしてアフリカの兄弟に、尊敬と尊厳の心と呼びさまいたいと思う」。さらに、ケニアでも外交団に強調している。「すべての人間のユニークな尊厳と根本的な平等性は、本大陸の人びとのアイデンティティと熱望を正確に理解する場合、出発点として受け入れられなければならない。……政治的な独立と国家としての主権は、必然的な結果として経済的な独立とイデオロギー的な支配からの自由を要請する。ある国ぐにの状況は、他の権力——特に大国の権力——の決定によって条件づけられていることがしばしばである」。同じケニアの大統領に、真の発展はどこにあるのか明確に示している。「真の発展をなし遂げるために受け入れなければならない根本的な姿勢は、すべての人間——特に婦人と子ども——の尊厳に対する尊敬である。なぜなら、すべての人間の尊厳は他の人間によって付与されたのではなく、神によって与えられたからである」。

このような尊厳は、人間の才能や教育・道德水準によるものではなく、まさに人間であるが故に例外なくすべての人間が有する根本的な資質であることは、ブラジルの囚人への教皇の話で知ることができる。「みなさまの中に、人間を見いだすのである。どんな人間であっても、神の思いによしとされるものである。みなさまの中に真の兄弟を見いだすのである」。もしかすると、以上のような考え方をいちばん求められているのは先進国の我々であるかもしれない。ヨハネ・パウロ2世は、西ドイツで大学教授と学生に次のように話している。「世界の変革を目標とする技術と科学は、

人類に与える奉仕を土台として正当化される。多くの人びと、あるいは民族全体が人間にふさわしくない困窮の状況に依然として生きているかぎり——それは技術と科学の知識の助けによって改善されるうる——進歩が十分であるとは言えないであろう。回避することができない強大な課題が我々の前に横たわっている。その課題を果たすのは隣人に対する兄弟的な奉仕を示すことである」。皮肉なことには、貧しい国であればあるほど、国内における貧富の差が激しいという現象が、しばしば見られる。しかも、その国に限って、底辺の人びとが立ち上がるのを防ぐために、軍備化に基づく治安国家を作るのが常であるように思われる。その典型的な国のひとつには、フィリピンがある。フィリピンを訪れたときに、教皇が大統領に向かって語った言葉は勇気のいる言葉だと言えよう。「共通善によって要請されているように、ある国の安全に対する正当な配慮は、人間存在と、その尊厳と権利を国家に従属させる誘惑に導く可能性がある。安全の要請と国民の基本的な権利との間に生じる葛藤は、教会によって常に支持されている根本的な原則に沿って解決されなければならない。その原則とは、社会組織が人間への奉仕とその尊厳の保護のためにのみ存在し、人権が保障されていない場合は共通善に奉仕しているとは言えないというものである。……私の希望し、祈っていることはフィリピンのすべての人びととその指導者たちが全面的な人間の発展に身を捧げるのをやめずに、人間尊重の名において、不平等や不正や貧困の状況と構造を克服することである」。フィリピンにおいて、今度はアジアの人びとに向かって主張している。「社会の諸構造は確かに重要であるが、それは人びとを生かすこともできるし、破滅に追いこむこともできる。種々の構造は常に人間の奉仕に役立つようなものでなければならない。なぜなら、それらは人間のためにのみ存在するはずだからである。構造は人間的な発展に効果的に役立つように常に改革される必要がある」。

Ⅱ 正義と平和

さまざまな問題を思考する場合の教会の基本的な方向性は、国家形態、社会構造の存在理由を、人権と人間尊重に据えていることが、上述のことから言えよう。例えば平和について語るとすれば、それが重要な要素であると認めながらもそれは戦争の不在という消極的な側面ばかりではなく、すべての人びとの人権が名実ともに認められている世界という積極的な側面も追求するであろう。近代以後の人間の歴史を、人権の自覚の進化の歴史であると特徴づけることができるとすれば、現代は、大多数の人びとの人権が、まだ蹂躪されている時代であると言わなければならない。

メキシコなどは目覚ましい経済発展をなし遂げたが、それは必ずしも底辺の人びとの人権尊重に跳ね返って来ないということを、ヨハネ・パウロ2世は指摘している。「発展の否定的な結果を考えなければならない。すなわち、不衛生や貧困、慢性の栄養失調などがそれである」。もし、いちばん基本的な人権が命をささえる十分な食糧を有することであるとすれば、少なくとも8億の人びとの基本的な人権が無視されていることになる。

「多くの人びとが生存そのものを脅かされている。最低の必要な食べ物を、持たないが故に、多くの人びとは毎日死んでいく。しかも、残忍にも今日の経験が示しているように、世界の飢餓が、必ずしもみなさまが徐々に緩和しようとしている不運な地理的気候上の農業的な状況にのみ由来するものではないと認めざるをえない。それは人間そのものからも生じている。すなわち、個人のイニシアティブを妨げている社会組織の欠陥、また非人間的なイデオロギーと体系の、恐怖と抑圧は、その原因である」と、教皇は第20回FAO総会で訴えている。

アリストテレスまでさかのぼるまでもなく、正義は常に公正と関連して考えられてきた。仮に個人の努力と才能、能力などが分配のひとつの根拠であると認めるとしても、ブラジルのような国における、あまりにも極端

な分配の差は明らかに正義と人権に背く、とヨハネ・パウロ 2 世は述べている。「物資の分配の領域においてその焦点は成長と最大の利益という経済的な法則のみに縛られるとき、あるいは発展の結果が人口の多くの階級の人びとにあまり及ばない、もしくは全然及ばない場合、その社会は内部から脅かされている。一方において、持てる少数の人びと、他方において貧困に生きている大多数の人びとの間に、大きなギャップがある社会において、その脅威が存在している……すべての権力の正当性は共通善、すなわち正しい社会秩序のみに見いだされる。したがって、権力は、一方の利益を保護し、他の人びとの損害になるように用いられてはいけない」。

言うまでもなく、公平に基づく分配が国内の南北問題にかかわるばかりではなく、世界のレベルにも関連するのはアメリカにおける教皇の演説に明らかにされているとおりである。「世界における平和——それは自由と正義と愛と真理に基づく平和であるが——に向けていかなる行動も激励する。人びとと国と国との今日の関係は、経済的な分野においてもさらに密接な国際的な協力の建設を要請する。国は有力であればあるほど、その国際的な責任が増し、人間性そのものが貧困によって脅かされている状況の改善に、さらに身を捧げなければならない。私が強く熱望しているのは、世界のすべての大国が偉大な人類家族の内部において、人間の連帯性の原則の自覚を深めることである」。

アムネスティの摘発に待つまでもなく、人権を蹂躪するテロや拷問が依然としてはびこっている。メキシコにおいてヨハネ・パウロ 2 世は深い苦しみをもって「集団的な暴力」や「政治的な捕虜と反体制の人びとに対する物理的、心理的な拷問」を嘆いている。世界に向かって国連においても同じ正義の叫びが聞こえてくる。「いかなる政治形態に行われようとも、拷問と抑圧が——物理的であろうが精神的であろうが——内的な『治安』あるいは『見せかけの平和』を守る必要性という口実のもとに生じるときになおさら悲惨である」。

人権の抑圧に基づく『平和』は、やはり見せかけの平和でしかない。眞の平和は正義に根ざしてはじめて形づくられるものであると言わなければならない。

メキシコへの訪問をローマで枢機卿団に知らせたときに教皇が指摘しているように、「正義のない場合——これを知らない人はいるだろうか？——平和もありえない。なぜなら、不正はそれ自体、混乱を意味し預言者の言葉が——『正義のわざは平和である』（イザヤ書32章17節）——まことだからである。同様に人権への尊敬がないとすれば——私が意味するのは、本性上すべての人間に内在している譲渡不可能な人権であるが——平和もありえない。なぜならば、個人の尊厳のいかなる違背は、恨みと復しゅう心を助長するからである」。

平和はまた、統一と調和を意味するのである。しかし、「統一は正義に依存している。その正義は国の各々のメンバーのニーズを満たし、その権利と義務を保障し、ある人びとの一方的特権と、他の人びとに対する差別がもたらされるが故に、不調和と対立を避けることを要求する」（ポーランドにおいて）。

教皇が人権と正義をどれほど心にとめているかを雄弁に示しているのは、国連での以下の簡潔な言葉である。「平和を築く課題はいかに重要であるか、人権に対する脅威はいかに重大であるか明らかである。人権の抑圧は、いわゆる平和的な状況においてさえも人類に対する戦争行為の一形態である」。

フィリピンなどにおいて、土地の改革が行われたにもかかわらず、依然として大地主のもとに、大勢の小作人が低賃金で非人間的な労働を強いられているのはよく知られている。その典型的な現象を示しているのはバコロドにある砂糖プランテーションにほかならない。バコロドの労働者を前にして教皇は国内ばかりではなく、国際的な不正に言及しているのは注目に値すると思われる。「今日の世界においてあまりにも多くの不正の状況

がある。ある国々には富を蓄積し、ぜいたくに生きているのに対して、他の国々には多数の人びとに不可欠のものを提供することができない場合、不正が支配しているわけである。同じ社会に生活しながら、ある人びとが富と権力を多く握っているのに、人口の大多数は企業や畑で長時間にわたって骨の折れる労働をしても、家族の暮らしを十分に配慮することができない場合、不正が支配している。提供するものといえば、手の労働しか持たない人びとを貧困状態に残していながら、経済的成長と最大の利益という法則が社会を動かしている場合、不正が支配している。このような状態を自覚して、教会は貧しい人びとと手をむすび、彼らに慈悲ではなく正義を要請し、声をあげても聞いてもらえない人びとの声になることをはばからないであろう」。

このようにして、教皇は正義を自分の世界観の原点にしている人間尊重からみちびきだして、平和の具体的な中身として強調しているが、同時に福音の神髄をなす愛についても語っているのは言うまでもない。時々ヨハネ・パウロ 2 世が使う “SOCIAL LOVE” (社会的愛)²⁾ という言葉は、おそらく正義と愛を弁証法的な関係にしていることが注目値する。1980 年 2 月 9 日、「正義と平和委員会」に対して、社会的愛に言及して次のように説明している。「この社会的愛は利己主義と搾取と暴力に対立するものでなければならない。さらに、戦争や経済社会的な搾取や人権の蹂躪の脅威によって常に圧迫されている世界の “光” でなければならない。また、世界に正義と平和を促進しようとしているすべての人びとと、行動的に連帯する方向にみちびくものでなければならない」。

1981年に発布されたレオ13世の “Rerum Novarum” (労働者の境遇)

2) 教皇ヨハネ・パウロ 2 世回勅『レデンプトル・オミニス』カトリック中央協議会、1981年、p.60参照。“SOCIAL LOVE” は「人類愛」と邦訳されている。また教皇は1980年 5 月 8 日、ガーナにおいて大統領に向かっておなじく “SOCIAL LOVE” を訴えている。

からその90周年記念として1981年に出されたヨハネ・パウロ2世の“*Laborem Exercens*”（労働について）にいたるまで、教会の文献の中に一貫して使われる概念のひとつに「共通善」があるのはよく知られていることである。言ってみれば、福祉国家がめざす老人や障害者なども含めてすべての国民の“*basic needs*”（基本的なニーズ）——衣・食・住・（医）療・（教）育——をはじめとする福利を国家の最優先的な対策でなければならぬということになる。“*Mater et Magistra*”（社会問題）³⁾以来、共通善という概念を国際社会に適用しているのは、一歩前進した考え方であると評価すべきであろう。アフリカのガーナで外交団を前にしてヨハネ・パウロ2世が主張しているように、「みなさまのすばらしい課題は、増してくる相互依存と同時に、それぞれの国は自分のアイデンティティと尊厳を強く肯定する証しの時代において、国際的な平和と正義をつくりあげることにある。みなさまの課題は困難であろうが尊いものである。自分の国に奉仕しながら、全人類家族の共通善の燭光でもある。すなわち、ともどもに人類のために世界をとっておき、今や社会的な不正によって阻害されている我々の兄弟と姉妹も含めて、世界の富はすべての人びとに及ぶように保証する。……まことに人間的である世界のみが、平和にみたまされた健全な世界でありうる」。このようにして共通善は今や国際的な共通善になり、正義は国際正義になる⁴⁾。

Ⅲ 所有権と労働

正義に基づいて、持てる国一人も含めて一と持たざる国の貧富の差を是正しようと求める国際的な平等の考え方は“*laissez-faire*”（放任主義）をモ

3) 教皇ヨハネ23世回勅『マーテル・エト・マジストラ』中央出版社、1962年、p.54、及び、粕谷源蔵、アンセルモ・マタイス編著『世界の建設—パウロ6世の国際福祉論』勁草書房、1968年参照。

4) 拙稿「人間仲間と国際倫理」（『未来の人間学』理想社、1981年、pp.241—265）参照。

ットーとする古典的な資本主義に真っ向から対立するように思われる。教会は常に所有権を認めながらも、それは決して絶対的な権利ではなく、あくまでもすべての人びとに及ぶ共通善を優先させた上での所有権であることを忘れてはならない。すでに、教父聖クリソストモは、革命的な言葉を発している。「いくら公正に手に入れたにしろ、法的に受けついでにしろ、金持は貧しい人びとの物資を奪っている。……富者は山賊の一種である。……『私は自分のものを使っているにすぎない』と言わないでくれ。あなたは実際に他者のものを使っている。世界の富は太陽や空気や土地と同様に共同の財産としてあなたと他の人びとのものである」。聖アンブロシウスも同じく主張しているのは、教会の一貫した思想であることを物語っている。「食物はすべての人びとに共同なものとしてあり、世界はすべての人びとに共同の財産であるように神はすべてのものを秩序づけられた」。要するに、所有権が承認されるにしても、世界のものはすべての人びとのものであることを前提としているわけである⁵⁾。

以上のような考え方を国内的、国際的な現代の次元に、ヨハネ・パウロ 2 世はメキシコのインディアンと労働者に対してあてはめている。「教会はなるほど正当な所有権を支持している。しかし、同じく明瞭に物資は神が与えられた普遍的な目的に役立つには、すべての所有権にいわゆる社会的な担保がおかれていることも教えている。もし共通善がそれを要請するとすれば、適当に行われる収用にふみきることをはばからない。あまりにも多くの家庭に不足しているパンを生みだす土地を不毛にしている国の代表者や有力な階級のみなさまに、人間の良心や国民の良心や貧困者の叫びや、それに増して神の声や教会の声は私とともに繰り返して言う。明らかに不正な状況を継続させることは正しくもなく、人間的でもなければキリスト教的でもない。“Mater et Magistra”の回勅の線に沿って地域社会に

5) C. Haughey ed., *The Faith That Does Justice* (New York : Paulist Press, 1977) 参照。

においても、国内的、国際的なレベルにおいても、实际的、効果的な手段が設けられなければならない。その作業にいちばんよく貢献しなければならないのは、言うまでもなく、いちばん力のある者である」。前にも引用したように、フィリピンのパコロドの砂糖プランテーションの労働者に向かって、土地の改革に関して教皇は不正の状態を指摘している。「人間の尊厳は土地によって促進されなければならない。土地はすべての人びとの利益のために神からの賜物であるからして、大多数の人びとが土地が生みだす利得から疎外されているのに、土地の生みだす利益は少数の人びとにしかな役立たない仕方での賜物を使うことは許されない。国の一般的な発展の過程において、汗と労働をもって土地を生産的にし、自分の家庭をささえるには手の働きに頼るほかない農民たちに、人間にふさわしい発展の結果が及ばないような不正の存在を継続させてはならない。土地を耕す人びとが、よりよい未来へのいかなる希望もない状態で生活し続けなければならないことは許されない。人類に土地を与えられるにあたって、神は別な目的を持っておられた。神の賜物は人類への愛の賜物だったからである」。

労働については、本書においても詳細にわたって1981年9月14日に発布された“*Laborem Exercens*”を中心にして別個に論じられているので、簡単に“*Laborem Exercens*”以前のいくつかの演説の内容をまとめることにする。

労働は場合によっては苦痛であるということは、人間が毎日経験しているところであろう。しかし、ヨハネ・パウロ2世はどちらかといえば、労働の偉大さをメキシコにおいて説いている。「労働は呪いではない。人間が知性と人間的な努力をもって創造的、神的な作業を継続させることは、宇宙を支配し改造するように人間に呼びかける神の祝福である。心をこめて力強く言いたいと思う。労働が不足していることは私を苦しめている。不正や衝突や、現代の人類にあまりにも多くの傷を残している憎しみと暴力のイデオロギーは、福音的なものではなく、私を深く苦しめている」

(グアダハラにおいて)。

さらに、多くの国において認められていない参加への権利と組合を作る権利を説く教皇の姿勢を高く評価できるであろう。「労働者は自由な責任のある人間としてあつかわれ、自分たちの人生と未来に関する決定に参加することを望んでいる。自分の利益を促進し、共通善に責任のある仕方でも貢献できるには、組合を自由に作るということは労働者の基本的な権利である」(モンテレーにおいて)。治安国家を名目にして、結社の権利を否定してきたフィリピンにおいて、従来の教会の考え方を教皇は確認している。「自分たちの権利を保護し、共通善に責任のあるパートナーとして貢献する目的のために、労働者は自由な結社で一致する権利を持っていることは一貫した教会の教えである。それらの結社は彼らの活動を制限するどころか、すべての労働者が福利を自由に追求できることを保証する適切な法律によって保護されなければならない」。

西ドイツの労働者に対しては、その社会がある程度まで彼らの権利が認められている社会なので、むしろ国際的な人権と外国人労働者の権利を教皇は強調しているのは当を得ているように思われる。「国家、なかんずく裕福な国が、しばしば搾取されている恵まれない国々に対して必要なすべての形態における発展のために効果的な援助をするよう、一市民として労働者も政治的な環境をつくりあげる義務を持っている。各々の国民の権利をまもる権威のある原則が効果的に適用されることによって、人類の生活から、帝国主義、侵略、支配、搾取、植民地主義などが追放されることができるように!」「みなさまの国に働いている外国の人びとを評価する場合、経済的な尺度に沿ってではなく、尊厳と権利を持ち、家族に対して関心を持ち、自分の生活のすべての分野において真剣にあつかわれ、共通善の正当な分け前を得ることを主張をする人間仲間として見てほしい……各自はそばにいる外国人に対する自分の態度を反省しなければならない。当然のこととして我々が求める平和や自由や、安全や保障を彼らも同様に

熱望していることを、認めているかどうか良心的に反省しなければならない」。

Ⅳ 軍備化、暴力、意識化

今日の世界において米ソを中心にして約5千億ドルは軍備に投資されているが、発展途上国の援助金よりも20倍位と言われている。エスカレートしていく軍備化は平和を脅かし、正義の実現を妨げているのは論を待たないであろう。アメリカの「グローバル・エジュケーション・アソシエイツ」のミッシー教授の言葉を借りるとすれば、各国——発展途上国も含めて——軍事化という Straitjacket-拘束服を着せられて、国内的にも国際的にも人間尊重を優先する政策を設けることができないでいる⁶⁾。

ヨハネ・パウロ2世は国連において、14年前に同じ演説からパウロ6世が話された記念すべき言葉、「戦争を繰り返すな、二度と再び戦争を繰り返してはならない」に言及しながら語り続けている。「諸国において、常により多く、有力、精巧な兵器の生産によってすすめられている戦争への準備は、戦争に備えていることを示し、戦争に備えているということは、戦争を開始することができることを意味する。また、いつか、どこか、どうかして、だれかが人類破滅の恐ろしいメカニズムを動かす危険性をおびていることを意味する」。「平和を欲するとすれば戦争を準備しなさい」という古代の格言の現代的な意味を否定して、「我々の時代は兵器のあつと言わせるようならせんの増大が、世界の平和の奉仕にあるのだとまで信じていることができようか」と現代の軍事化に警告を発している。米州機構において、兵器に関するもっと総合的な理論を次のように述べている。「平和はみなさまが国民のために残しておきたい最も貴重な祝福である。この平和は兵器を蓄積することによって安定した形で保障することができないと

6) ジェラルド・ミッシー、パトリシア・ミッシー共著、松田義哲、松田和子共訳『人間的世界秩序をめざして』広島丸善出版サービスセンター、1981年参照。

みなさまも同感であろう。武器の増大は、生じる紛争を解決するのに武器に訴える危険性を実際に強めることは言うまでもなく、発展という偉大な平和的緊急課題から、無視できないほどの物質的、人間的な資源を奪いことになる。兵器に基づく秩序は各国における内的な平和を保つには十分であると考え誘惑にもなる。この大陸において、軍備競争を制止するのにできるかぎり協力するようみなさまに心から訴えたいと思う。軍備縮小という困難な事業は、ここにおいて現実的に、断固とした解決をみるとすれば、みなさまの国民にとって、どれほどの救済になるであろう。経済、社会、文化的な進歩にとって、どれほどの可能性を開くことであろう。世界に対して、どれほどの感化と手本を与えることであろう。

平和の巡礼者として、唯一の被爆国日本を訪れた教皇は当然ながら平和に焦点を合わせて人びとの感動を呼びおこさずにいられない記念すべき言葉をもって、広島で訴えている。「戦争は人間のしわざである。戦争は人間の生命の破滅である。戦争は死そのものである。……世界平和を築きあげるという人間の営みを打ち砕くのは戦争である。……核兵器は、力の均衡を保ち、恐怖の均衡を保つため、致し方ないものだとする人もいる。しかし、戦争と核兵器の脅威にさらされながら、それを防ぐための、各国家の果たすべき役割、個々人の役割を考えないで、済ますことは許されない。……各国の元首、政府首脳、政治・経済上の指導者に次のように申しあげる。正義のもとでの平和を誓おうではないか。……人間同胞に向かって軍備縮小とすべての核兵器の放棄とを約束しようではないか。……相対立する社会体制のもとで、人間性が犠牲になることが決してないようにしようではないか。……窮乏の中にある兄弟姉妹に手を差し伸べ、空腹に苦しむ者に食物を与え、家のない者に宿を与え、踏みにじられた者を自由に、不正の支配するところに正義をもたらし、武器の支配するところには平和をもたらそうではないか」⁷⁾。

7) カトリック広報委員会監修『教皇ヨハネ・パウロ2世訪日公式メッセージ』中

戦争否定の立場に立つ教会が非暴力を貫徹するのは言うまでもないであろう。しかし同時に、暴力への誘惑をそそる社会の不正を是正せずに、どうして力に訴えることを否定できよう。この10年のあいだ、テロや暴力がはびこっているアイルランドにおいて、ヨハネ・パウロ2世は自分の信念を明瞭に表明している。「キリストへの信仰への信念と、私の使命の自覚をもって、暴力は悪であり、暴力は問題の解決の方法として受け入れがたいものであり、暴力は人間にふさわしくないと宣言する。暴力は虚偽である。なぜなら、それは我々の信仰の真理に、我々の人間性に合わないからである。暴力は保護しようとする事柄を破滅する。すなわち、人間の尊厳、生命、自由。暴力は人類に対する犯罪である。なぜなら、社会の構造を破滅するからである。……みなさまは正義を追求していると主張するであろう。私も正義を信じ、正義を追求する。しかし、暴力は正義が訪れる日を遅らせるだけである。暴力は正義のわざを破滅する。……しかし、人間に暴力の口実を与える不正の状況を生みだしたり、黙認したりしてはいけない。暴力に訴える人びとは暴力のみが変化をもたらすと常に主張する。彼らは、政治的な行動は正義をなし遂げることができないと信じている。政治家のみなさまは、彼らがまちがっていると証明しなければならぬ。みなさまは正義へみちびく平和的・政治的な道があるのだと示さなければならぬ。みなさまは平和が正義に達成し、暴力が達成しないと示さなければならぬ」。

教会は数年前から元日を「平和の日」に設定したが、1980年のメッセージの中に教皇は次のように指摘している。「暴力の代わりに、正義の根本

央出版社、1981年、pp.68—76（ただし、文体は「である」体になっている）。

また、1981年12月13日教皇メッセージで次のように述べている。「核戦争の結果（それは科学的予測ができる）を考えると、道徳的にも人間的にも我々の唯一の有効な選択は、核兵器廃絶に向けての核兵器縮小にあると、私は確信している。それは双方から同時に、協定に基づいて、そして効果的な監視を受け入れながら、行わなければならない」。

に対決して、平和への脅威を全滅することをめざす勇気のある政治的なイニシアティブに対する相当な努力をせずに、暴力に訴えることを正直に断罪することができない。暴力に訴える場合も、不正に対して何の手もうたない場合も、政治の深い真理は否認されることになる」。

中南米において、暴力への誘惑は、不正の状態を黙認している諸国において多く存在すると、最近の歴史は示しているとおりである。紙数の関係上、ブラジルにおける教皇のひとつの文章を伝えることにとどめる。「正義が欠けている場合、社会は内部から脅かされている。それは、より完全な正義をもたらすのに必要な変革が、暴力や革命や流血によってもたらされるべきだとは意味しない。なぜなら、暴力は暴力の社会を用意し、我々はそれに同意することができないからである。むしろ、平和的な変革によって、絶えず徐々に効果的、現実的に、深いところまで及ぶ社会的な変革が存在するのである」。

このようにして、教皇は暴力の哲学を否定すると同時に、その暴力を生み出す不正を是正しなければ、いずれ暴力の発生する状況になりかねない、と警告している。

最近の開発理論では、いくら外部からの援助導入が必要であろうとも、開発の主人公はあくまでもその担い手であるはずの「草の根」の人びとの自覚と自立心がなければ、開発はおそらく成功しなでいであろうと言われている。時として第3世界の底辺の人びとは、幾世紀にもわたる種々の抑圧的な要因によって、自尊心と人格の尊厳の自覚が去勢され、人間的な成長を妨げられているように思われる。したがって学校教育を促進するほかに、自分たちの尊厳と人権を自覚する、いわゆる“意識化教育”が緊急の課題になっているのは、治安国家をはじめとする第3世界であろう。

ヨハネ・パウロ 2 世は、メキシコ訪問のときに立ち寄ったサント・ドミンゴの貧乏な地域の人びとに向かって次のように語っている。「人間として、神の子としてのみなさまの尊厳のことを考えてほしい。同時に、人間

的、キリスト教的な、より立派な尊厳性を生かす可能性を開発するように勇気づけたいと思う。現状を克服できるように力のある人に援助してもらいたい。そうすれば、よりよい教育を受けて、心と精神を高め、生活の向上と社会への参加の主人公になるであろう」。

さらにアフリカのザイールの大聖堂で、“意識化”を勧めている。「みなさまは人生と労働の尊厳を自覚してくると、キリスト者の寛大な愛をもって、みなさまにとっても、他の人びとにとっても、それをより尊いものにするように努力するであろう。農民は、いわゆる“二流の人間”としてあつかわれることを認めないであろう。ある人びとは貧困に押しつぶされ、不正の犠牲者になることに甘んじないであろう。力のある人、幸運な人が他者を搾取することは正当なことでもなければ、キリストの福音に合うものでもない」。

教皇は、意識化教育が始まったといわれるブラジルのスラム生活を強いられている人びとに向かって、多少、挑発的な言葉で呼びかけている。「みなさまは自分の生活のために戦わなければならない。みなさまの生活環境を改良するように努力しなさい。これは聖なる義務である。なぜなら、神のみ旨でもあるからである。……それはみなさまの努力のみによることではないとよく知っている。しかし、すべての分野にわたってみなさまの生活が、より立派なものになるためには、みなさまがまず努力しなければならない」。

フィリピンは外国の企業を誘致して、経済の発展と開発に力を入れながら、底辺の人びとを貧困のどん底に追いやっている、典型的なひとつのケースだと思われる。教皇は、トンドのスラムの人びとに、自分たちの発展と進歩の主人公になることを呼びかけ、またレガスピの労働者に対して次のように話している。「みなさまは、人間の尊厳に沿って生活し、それにふさわしい待遇をうける権利を持っている。同時に、他の人びとを同じようにあつかう義務がある」。

V 結 び

以上のように、マスコミの言葉を借りれば“空を飛ぶ”教皇として、先進国と開発途上国の人びとに向かつてのヨハネ・パウロ2世の語録を、不完全ながらまとめてみたが、最後にあたって、いくつかの課題を提供してこの小論文を終えたいと思う。

オルテガ・イ・ガセットがすでに40年位前に警告しているように、ぜいたくは国民の墮落をもたらすものである。心を失った先進国の多くの人びとの無関心と逃避の姿勢は、オルテガの言葉の信憑性を物語っているような気がする。日本武道館での「ヤング・アンド・ホープ」大集会における教皇の青年へのメッセージは、まだ耳新しいであろう。「国境を越えて、すべての人びとに心を開きなさい！ 世界中の若者たちは、みんな世界的連帯性を持つように招かれている。だから、若者として、貧しい人、飢えている人、身体の不自由な人、病気の人、苦しんでいる人、社会からはじき出されている人に、関心を持つべきである」⁸⁾。

ニューヨークのヤンキー・スタジアムにおいて、同じように裕福な人びとに対して教皇は呼びかけている。「新たなチャンスを手に入れようとする貧困者が、人生の困難な競争において、彼らが必要とする状況を何度も作り出すのに要求される姿勢と構造の抜本的変革を前にして、みなさまはしり込みしないで。アメリカと世界の貧しい人びとは、キリストにおけるみなさまの兄弟姉妹である。彼らにごちそうの“くず”しか残すことをしないでくれ。ぜいたくからばかりではなく、みなさまのものから彼らを助けるためにあげなければならない。彼らを家庭の食卓のゲストとして見ていただきたいと思う」。そのために場合によって、生活様式を変える必要が生じてくるかもしれない。「質素な生活様式を見つけ出さなければ

8) 前掲書『教皇ヨハネ・パウロ2世訪日公式メッセージ』p.54（ただし、文体は「である」体になっている）。

ばならない。全人類に役立つはずのエネルギーと資源の大部分を消費しながら、富国の生活水準を維持しようとするのは正しくないからである。諸国民の間に、より深い平等な連帯性を創り出すことは、平和の第1の条件であるからである」。

結局のところは、国際社会のレベルにおいても、国家と個人のレベルにおいても、ものごとを決定する新たな価値観が求められているような気がする。それは、「最極貧に追いやられている人びとに対する特別な感覚であり」（ヤンキー・スタジアムにおいて）、「貧しい人びとに奉仕する選択であり」（メキシコにおいて）、「語れない、沈黙を余儀なくされている人びとの声となる」（メキシコにおいて）ことを意味するのである。

希望と平和の巡礼者として、世界中を歩きまわったヨハネ・パウロ2世の考察の結びとして、ジロドゥの戯曲「エレクトル」⁹⁾の1文を引用することにする。

ナルセスのかみさん……たしかに何かがおこっているのは分るのですけれど、でも、どうもよくのみこめません。今日のように、日がのぼり、何もかもが台なしになり、何もかも荒れ放題、それなのに空気はすがすがしい、何もかもが失われ、町は燃えさかっている、罪のない人たちは殺し合い、一方では、罪人たちがのぼっていく太陽の片隅で、死の苦しみに喘いでいる、一体これは何といったらよいのでしょうか？

エレクトル……乞食に聞いてごらんなさい。この人なら知っているわ。

乞食……それにはとても美しい名がついているのだ、ナルセスのかみさん。その名は黎明というのだ。

（筆者は上智大学社会正義研究所長、文学部人間学研究室教授）

9) 鬼頭哲人訳「エレクトル」(『ジロドゥ戯曲全集4』白水社、1967年、p.303)。

人間の顔をもつ国際秩序

高 野 雄 一

1981年10月30日から11月1日まで、上智大学において、上智大学社会正義研究所、グローバル・エジュケーション・アソシエイツ、国際基督教大学、日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウスの共催で、「国際相互依存時代における人間尊重」と題するシンポジウムが開かれた。本稿は、その中の「国際秩序のあるべき姿」のパネルで担当した私の報告に手を加えたものである。

1. 168 の国，43 億の人間の地球社会

今日、世界には168の国があり、地球上には43億の人間が生活している。科学技術や経済の飛躍的發展により、これらの多くの国ぐに、これらの多くの人びとの、国家関係・生活関係は、極度に緊密になっている。これらの国ぐにとこれらの人びとが協力するならば、世界と人類の将来にはますます大きな希望と可能性が期待できる。これらの国ぐにと人びとがもし争い、三たび戦争するならば、世界と人類はいまや滅亡を免れないところに来ている。

168の国ぐにには大小強弱さまざまの国がある。共産主義陣営の国があり、自由主義陣営の国があり、また第3世界の国がある。北の先進工業国があり、南の後進農業国がある。それ以上に基本的なこととして、43億もの実にさまざまな人びとがこの地球上に存在する。

白いはだ、黒いはだ、黄色いはだの人びとがいる。日本語を話す人びと、英語を話す人びと、アラビア語を話す人びと、キリスト教を信ずる人びと、

イスラム教を信ずる人びと、仏教を信じ、儒教を信じ、ヒンズー教を信ずる人びとがおり、さまざまな文化に属する人びとがいる。

中国語を話す人が10億、英語を話す人が4億4,000万、ヒンズー語を話す人が3億、ロシア語が2億5,000万、スペイン語が2億3,000万、フランス語が1億5,000万、ポルトガル語が1億3,000万、アラビア語が1億2,000万、そして日本語を話す人が1億1,000万、この地球上にいる。

また、キリスト教を信ずる人が9億7,000万、イスラム教を信ずる人が5億5,000万、ヒンズー教徒が4億7,000万、仏教徒が2億6,000万、その他儒教、神道、道教、ユダヤ教を信ずる人がある。世界には、こうして、さまざまな文化に属する人が43億いるわけである。

今日から明日にかけての現代の国際秩序は、これらの人びとが自由を、またその多くの国ぐにが独立を、差別なく平等に享受し、共に共存協力して、世界と人類の存在の意義と価値を高めるものでなくてはならない。世界と人類の存在の意義と価値を高めるということは、国連総会が1970年の25周年記念決議でもあきらかにしたように、平和と正義と福祉の追求、すなわち、国際の平和、人類の福祉、世界の正義の追求と実現にある。

2. 近代民主主義と現代の国際民主主義

近代の国際社会は、約400年前に、ヨーロッパに民族国家が次々と成立したときに始まる。その後、いまから約200年前に、これらの欧州民族国家は、イギリス、フランス、アメリカをはじめとして、次々と市民革命を成就し、民主主義を樹立した。また、産業革命を遂行し、経済を飛躍的に発展させた。自由と平等の基本的な人権を中核として、国民主権、議会政治、法治主義、司法権の独立など、民主主義の輝かしい成果を生み出した。ヨーロッパに生まれたこれらの成果は、その後、ヨーロッパ以外の国ぐににもしだいに及ばされた。日本など、その代表的な国の一つである。ところが第二次世界大戦となり、ドイツにナチズム、イタリアにファシズム、日

本に軍国主義がおこり、民主主義を守ろうとする国ぐにがこれに対して連合して戦った。

こうして、第二次大戦後の世界の国ぐにには民主主義の思想と制度が一段と普及した。日本の民主主義の思想と制度も、戦前にくらべて、はるかに徹底した。第二次大戦後の現代国際社会は、国際民主主義の時代を迎えたといえることができる。

ヨーロッパに生まれた民族国家から成る国際社会では、お互いの国家が主権国家として平等の関係を築いた。主権平等の国際秩序といえる。この主権平等の国際秩序は、その後近代国家が市民の自由と平等に基づく市民革命を成就した後にも、そのまま続いた。現代国際社会の基礎にも、諸国家のこの主権平等の関係がある。そのことは、国連憲章にも明記されている。

国際社会を貫くこの主権平等の原則は、これをあまりに形式的に適用すると、今日、要求される国際協力が、十分効果的に遂行できないことにもなる。しかし、一面でこの主権平等の原則は、大小・強弱どんな民族、どんな国であっても、この国際社会において、その大きさや強さによって区別され差別されることはなく、共存し協力し得るのだというイデオロギーとして力をもっている。その意味では、主権平等の原則は、今日でもなお積極的な意義をもち、国際民主主義の一要素であると言わなくてはならない。

ただ、ヨーロッパに始まった近代国際社会を貫くこの主権平等の原則と民主主義の制度には、さきにふれたような輝かしい数々の成果だけでなく、この成果の影に大きな矛盾をかかえていた。国際の平和、人類の福祉、そして世界の正義の追求と実現を現代国際社会に求めるためには、これらの成果を継承し発展させることと同時に、その反面で、このような矛盾を自覚し克服することが不可欠である。

3. 近代欧州民主主義の光と影

それでは、ヨーロッパに始まる近代国際社会がかかえこんだ矛盾、近代ヨーロッパ文明の輝かしい成果の影の闇とは何であったであろうか。それは、ひとことでいえば、外に向けて、すなわち非ヨーロッパ世界に対して植民地支配を拡大強化したことであり、内において、奴隷制度を温存し肥大させたことである。

ヨーロッパ人は、アラビア人、イスラム教徒に挑戦して、海外に進出し、近代世界をきり開いた。実際、アラビア人、イスラム教徒は、中世8世紀頃から近世初期にかけて、経済でも文化でも、また政治でも軍事でも、世界で優位に立っていた。北アフリカからイベリア半島に進出してピレネー山脈までを制圧し、バルカン半島に進入してウィーンをしばしば脅かし、また南イタリアも制圧していた。こうして、アラブ、イスラム教社会が、ヨーロッパ、キリスト教社会を圧迫していた。文芸復興や宗教改革や商業革命によって力をたくわえたヨーロッパ人は、このアラブ人、イスラム教徒に挑戦して、その勢力を押しかえし、自ら海外各地へ進出してこれを撃破するにいたった。最初に海外に進出したのはポルトガル人、スペイン人であった。なかでも、アフリカからアジア、インド洋、マラッカ海峡にはポルトガル人が進出して、アラブ人、イスラム教徒の支配勢力と戦い、これを破った。続いてこのポルトガル人、スペイン人と競争し抗争しながら、オランダ人、イギリス人、フランス人などが非欧州世界に進出した。オランダやイギリスやフランスの国策会社である東インド会社などは、あまりにも有名である。

こうして、南北アメリカ大陸において、またアフリカとアジアの沿岸、次にその内陸において、ヨーロッパ人による植民地の征服、併合、支配が、全世界的な規模で遂行された。ヨーロッパ外の土地と人、それは非白人、非キリスト教の土地と人びとであるが、それらは、こうしてヨーロッパ人

の征服、併合支配の対象となった。そして、20世紀にいたったわけである。

また、アラビア商人は、西アフリカその他で奴隷取引に従事していたが、アラブ商人を駆逐して海外に進出したポルトガル人その他のヨーロッパ人は、このアラブ人に代わって奴隷取引を手に収め、かつこれを拡大した。永年にわたり、実に数千万のアフリカの黒人が、奴隷狩り、奴隷貿易、奴隷労働の対象とされた。ヨーロッパの本国の他、アメリカ大陸のヨーロッパ人植民地に奴隷制度が根をおろし、拡大強化された。とくに、それは、建国前後の時期にわたるアメリカ合衆国で顕著であった*。

このアメリカの奴隷制度は、南北戦争（1861—65年）の結果、はじめて憲法上廃止された。それは、日本の明治維新（1868年）の直前の時期であった。この頃、ヨーロッパ諸国でも次々に奴隷制度が廃止された。

しかしながら、15世紀末以来始まったヨーロッパ人の植民地支配拡大の活動は、19世紀後半にいたっても続き、この頃、ドイツやロシアも加わって、アフリカやアジアで植民地競争が一段と激しくなっていた。その勢いは、この頃、極東にまで及び、中国は、イギリスやフランスによるアヘン戦争（1840—43年）、アロー号戦争（1858年）に敗れ、その後ヨーロッパ各国が争って中国から植民地利権を獲得し、中国はなかば独立を失いかけ

* 1788年のアメリカ合衆国憲法には、黒人奴隷に関して次の条項（第1条第2節第3項）が規定された。

「下院議員および直接税は、連邦に加入する各州の人口に比例して、各州の間に配分される。各州の人口とは、自由人の総数を取り、この中には年期限役者を含ませ、納税の義務のないインディアンを除外し、それに自由人以外のすべての5分の3を加えたものとする。……」

この奴隷条項は、合衆国憲法修正条項第13条（1865年）第1節および第14条（1868年—日本の明治維新の年）第2節によって廃止された。

修正第13条第1節「奴隷および本人の意に反する労役は、犯罪に対する刑罰として当事者が適法に宣告を受けた場合をのぞき、合衆国内またはその管轄に属するいずれの地にも存在してはならない」

修正第14条第2節「下院議員は、各州の人口に比例して、各州の間に配分される。納税の義務のないインディアンをのぞいた総人口を各州の人口とする。……」

ていた。続いて、日本にもアメリカのペルリ提督が訪れ（1853年）、それに続いてヨーロッパ各国が日本に押し寄せて開国と通商を迫った。日本は1868年に開国し海外通商を認めたが、中国の場合と同じく、欧米諸国との間には、領事裁判権の設定、関税自主権の否認など、いわゆる治外法権に基づく不平等条約関係が築かれた。これは、主権平等に立脚するヨーロッパ諸国同志の国際関係にはみられないことである。

4. 奴隷制度、植民地体制にみる差別と支配

ヨーロッパ諸国の近代的発展過程におけるこのような奴隷制度の隆盛と植民地支配の拡大強化が、アメリカの独立宣言やフランスの革命宣言以後の歴史に刻みこまれた。このことは、何といたっても歴史の大きな矛盾である。言うまでもなく、アメリカの独立宣言（1776年）は「人は生まれながらに平等」ということをうたっている。フランスの革命（1789年）は「自由、平等、友愛」の精神を鼓吹した。そして近代の世界をきり開いた。それだけに、奴隷制度と植民地支配を大きく内に宿したヨーロッパ的近代世界がかかえた歴史的社会的矛盾は大きかった、と言わなくてはならない。

ヨーロッパの近代国家は、ヨーロッパ・キリスト教社会の内に、人間の自由平等に立脚する立派な民主主義の体制を築いた。しかし、外に向かって、すなわち異なる人種、異なる宗教、異なる文化の人間との間には、自由と平等を確立することができなかった。そこに人間に対する差別と不平等の根が植えられた。また、ヨーロッパに始まった近代国際社会は、風俗や文化や宗教を異にするヨーロッパ外の民族と国家に接して、これらの民族や国家に自分たちと同じ地位を認め、これらとの間に主権平等の関係を築くことができなかった。そこに他民族に対する支配と不平等の関係が生まれた。近代の国際法秩序は、主権平等の国家関係を基礎にしているが、それはこのように非ヨーロッパ的民族に対する差別と支配を構造的に内に

かかえこんだ欧州植民国家相互の間の主権平等関係であったのである。その意味では、近代国際社会（国際法秩序）は、欧州的な性格と制約を構造的に備えていた。

神でもない悪魔でもない人間に、理性と愛と信仰が残るかぎり、このような人間的社会的矛盾は、いつかは、歴史と社会を内から動かし変革させずにはおかない。奴隷制度は、19世紀に制度的に克服された。植民地支配の方は、欧州植民国家によってその後も維持され、のみならず拡大強化された。そして、20世紀の現在にいたり、克服されつつある。しかし、世界と人類は、その後遺症として、南北問題という大きな問題を、いま国際的に、また国内的にも、かかえている。

5. 現代国際社会における人間価値の復権

国連を中心とする第二次大戦後の国際秩序は、その基本目標として、第一の平和の維持と並べて、第二に人民の同権と自決の原則、第三にあらゆる人間に対する差別のない人権の尊重を掲げた。国連の25周年記念決議が「平和、正義、進歩（福祉）」とうたったのは、まさにそれに対応する。

今日から明日にかけての国際秩序は、この国連を手がかりとしている。この国際秩序には、歴史的また社会的に二つの特徴が見いだされる。その一つは、もっぱらあるいは主として国家を中心としてとらえられた国際秩序における人間価値の復権である。その二は、人民についても人間個人についても、すべての支配と差別と不平等を除去して平等な共存と協力の秩序を築こうということである。そして、このような基礎の構築の上に、永続する真の国際平和が獲得できるという認識である。

国連を中心としてこのような新しい国際秩序が戦後に実現したが、このような国際秩序がもたらされた要因として、三つのことが考えられる。

一つは、200年前、ヨーロッパに成就した市民革命、民主主義の影響である。それは、確かにそれまでの君主主権を国民主権に変えたが、主権国

家の固いカラを変えることはなかった。国際社会ではその後も主権平等の関係が支配した。しかし、各国の民主政治の下に解放され主体化された人間個人の活動は、政治に経済に、社会に文化に、いままでと違って活発な展開をみせるようになった。それが、徐々にかつ確実に、19世紀を通じて、国境を越えた人間的接触、民間の交流を国際社会に盛り上げてきた。

第二は、植民地支配に対する疑問と反省である。植民地支配の拡大強化は二つの大きなマイナスをもたらし、それを人類に自覚させるようになった。一つは、植民地の拡大強化の競争はヨーロッパ列国を対立、衝突、そして戦争に導き、平和を破壊したこと、二つは、ヨーロッパ外の各地の住民と人民の生活と人権を差別し抑圧したこと。世界的な植民地支配体制はまさしく平和と人権の敵であることが、これで証明されたわけである。第二次大戦の直後には、欧州植民国家の中には、このマイナス点の自覚と反省についてまだ不十分な国もあった。しかし国連の憲章とその後の国連の活動のなかに、この自覚と反省は力強く展開した。

第三は、第二次世界大戦の経験と教訓である。第二次大戦は、ナチズム、ファシズム、軍国主義の国によって起こされ、民主主義を防衛する戦争となった。経済・社会・文化にわたる国民の生活を軽視し、人間個人の権利と尊厳を無視する政権から、戦争は起こった。ここで認識されたことは、平和を確立し第三次大戦を防止するためには、人間の生活と権利をかえりみないような政権の出現を抑えることが必要だということである。伝統的な国際法秩序では、人間の経済・社会・文化の生活、人間の自由と人権の問題は、国際法が関知しない問題であった。それらは、国際法の上ではっきりと「国内問題」とされ、他国が口を出してはいけない事項、国際的に不干渉の義務の対象とされていた。人間の生活と権利は、各国がその主権、国内政治、国内法で自由に扱う事項であった。これに対して、いまや国際法秩序の対象、国際機構の任務として、伝統的な国家の権利や義務だけでなく、人間個人の生活や権利がはっきり登場してきた。

こうして、われわれは、いまそこに生きている現代の国際社会に導かれかつそれを獲得した。

6. 「人種・性・言語・宗教」について差別のない 世界社会

すでに述べたように、戦後の新しい国際秩序は、平和の維持ということ、人間の経済社会文化生活の解決、人間の自由と権利の尊重と並べて、基本目標としている。国連は、「人種・性・言語または宗教」について差別することのないあらゆる人のための人権の尊重を、繰返し規定し、そのための活動をしている。人権委員会が設けられ、世界人権宣言が採択（1948年）され、最近は、国際条約として二つの人権規約が、締結（1966年）され、発効（1976年）した。これらのことは、国家についての権利や義務を定めてきたこれまでの国際法、国際条約のことを思うと、国際社会における画期的な動きである。

一方、国際関係は緊密になり、今日の国際社会では組織化がめざましく進んでいる。国連ばかりではない。ユネスコ、ILO、食糧農業機関、世界保健機関など、「専門機関」とよばれる専門的国際組織が、人間生活の各分野に成立している。これらを取り囲んで、民間の人びとの無数の団体（非政府団体：NGO）が、各分野で協力関係に入っている。

国家はいまでも主権国家といわれるが、国際法はいまや、以上のようにして人間個人の生活や権利を保障するために、国家の主権に規律や制限を加えるようになった。また、人間個人の生活や権利を保障する国際機構の樹立と充実に努め、そのなかに国家をとらえて、その主権に規律や制限を加え始めている。これが、明日をめざす現代の国際秩序の姿である。

しかし、なお難しい問題がある。地球上に43億の人間が生きているが、そのうち8億近い人びとは、毎日飢えに脅かされ、食べ物で苦しんでいる。かつての植民地から独立した十数億の人びとは、政治的に独立は得た

ものの、経済生活・社会生活・文化生活の歪みと貧しさに苦しんでいる。これらはみな長い年月、植民地支配の下で抑圧され差別されてきた人たちである。ゴムやコーヒー、バナナやアヘンばかり作られて、植民本国の利益に奉仕させられてきた人たちである。このような人たちの他に、すでに160年前に独立したものの、なお立ち遅れている人びとがラテン・アメリカに数多くいる。また、文化大国であるが経済的には後進の中国の人たちがいる。

これらの人びとを合わせて実に約30億の人たちは、発展途上国、「南」の国ぐにの人たちである。ピカピカの自家用車を3台4台ともっている家族のとなりには、さびかけた自転車が1台という家族がいる。このような社会はどうなるであろう。心理的なあつれきが生ずるであろう。経済的な摩擦が生ずる。社会的な不満が高まり、政治的な動揺にもなる。騒動や革命も生ずるであろう。このようなことは国内においても、国際的な場においても同じである。今日ほど、生活関係・国際関係が緊密になった世界社会で、南北問題のもつ意味はまさにここにある。

7. 南北問題と軍縮

この大きな南北問題に立ち向かうために、なおもう一つ、乗り越えなくてはならない大きな問題がある。南北問題に立ち向かうためには、言うまでもなく人間の英知、地球の資源、そして資金・お金を限りなく必要とする。多くの人、多くの国、多くの国際機関が、いまそのために努力をしている。ところがどうだろう。南北問題に注がれる人間の英知、資源、お金の一方で、それに十数倍する英知、資源、お金が、軍備の増強に投ぜられている。平和と安全を名として殺戮と破壊の手段の増強に、米ソをはじめとしてほとんどすべての国が狂奔している。平和憲法の日本までそれにならいつつある。互いに対抗して、一人でも多く殺せる武器を求め、少しでも大きく破壊できる凶器を求めて、知恵と資源とお金を、日夜湯水のように

に使っている。これは個別国家の立場に立つて平和と安全を求める、勢力均衡の考えである。どの国も、紙一重でも相手国にまさる軍備を備えて、安全感（個別国家の立場に立つ勢力均衡感）をもとうと努める。この当然の論理的結果として、対立する国ぐにの間に軍備増強は無限に続く。しかも、それによって各国は絶えず安全感の飢えに責められつつ、しかも安全感を充足しそれに安住することがない。論理的にも経験的（実感的）にも、国際平和は各国のこの軍備競争によって得ることはできないし、それによって確実にもならない。そこに得られるのは破局への接近であり、増大する危機感ばかりである。

平和は、各国の勢力均衡を考慮に入れた軍備削減によってしか、それに近づくことはできない。人びとも、国際機関も、国ぐにも、いまや軍縮への転機を求め始めている。東西問題にかかわるこの軍縮問題に立ち向かうことなしには、南北問題の解決は望めない。他方、国内的国際的に人間の生活と権利の擁護と尊重（南北問題の基礎）を求める力を高め強めること、それこそ軍拡へ政権がのめり込むことを阻止し、軍縮への転機を真剣に政権に求めさせることにつながる。人間の知恵、資源、お金だけの問題ではない。軍備増強、軍拡競争の進むところ、必ずや国家主義・軍国主義が生まれる。それが、人間の生活と権利の敵であることは、第二次大戦を経て理論的にも経験的にも証明済みである。平和が人権とこのように構造的に不可分の関係でとらえられることが、近代と異なる現代の国際社会、国際法秩序の基本的特徴をなしている。

8. 国際平和・人類福祉・世界正義の秩序

ヨーロッパに端を発し、近代数世紀にわたる世界を支配した植民地体制のもつ矛盾は、20世紀に入って植民地が次々と独立したことによって終わるものではない。それは構造的にまさしく南北問題として、現代国際秩序のまっただなかに存在している。人間の生活と基本的権利は、北の国の内

部の人びとについてだけの問題ではない。植民地に生まれ、いま独立を得て南の国に生きる人びとに、ひとしく認められなくてはならないものである。

しかし、南の人びとに生活と人権が約束されるとしても、植民地体制の下に自治や独立が彼らから奪われたままであったなら、それはまことの生活でも人権でもありえない。こうして、^①「自決の権利」がすべての人民にひとしく認められることになり、植民地の人民に政治的自治と独立への基本的権利が認められた。

こうして、南を含む地球上43億の人間は、一人一人、人間的な生活と人権を差別なく享受し得ることになる。国連を中心とする現代の国際秩序は、いまはじめてそこに到達した。その中味が実現するかどうか、それは南北問題の現実を前にして、われわれすべてにとってまだまだ難しい実践的課題であり、しかも取り組んで格闘するに値する課題である。

そこには、皮膚の黒い人も黄色い人も白い人もいる。キリスト教徒、イスラム教徒、ヒンズー、仏教徒がいる。彼ら一人一人がひとしく共存し協力して、人類共通の価値を高める秩序を確実に築かななくてはならない。欧州キリスト教社会は、人権と民主主義の輝かしい光を近代世界に拡げた。しかし同時に、その影にはなお支配と差別の大きな闇をかかえていた。現代の国際社会も近代と同じく、原則として主権平等の秩序といえる。しかしいま、われわれ43億の人間と168の国々には、近代を越え、それとは構造を異にする現代の国際秩序に到達した。どんな人種に属する人も、また国も、どんな宗教を奉ずる人も、また国も、そこでは共存と協力の秩序のなかで、国際の平和と、人類の福祉と、世界の正義に向けて前進することが、自覚され保障されなくてはならない。近代の主権平等の国際秩序はそれを実現しえなかった。現代の国際秩序にはそれが明示的に意識され、かつ求められている。南北問題、東西問題を前に、これを実現しうるか否か。未曾有の危機と背中合わせする大きな希望の時代に、われわれすべて

が足を踏み入れている。

付章 日本および日本人の課題

——明治維新から第二次大戦まで——

1

日本は、約100年前に開国し、急速に国の近代化を遂げ、近代国際社会の仲間入りをした。400年前頃から、西欧に近代民族国家が出現し、それらの民族国家が非欧州世界に対して、植民地支配を樹立し拡大していった（大航海時代）。ちょうどその頃、日本はきびしい鎖国体制に入った（1612年）のである。また、約200年前、西欧近代国家が市民革命の洗礼を受けて民主主義体制を確立していった頃にも、日本は鎖国の中に超然として伝統を固持していた。

ヨーロッパ人は、この近代国際社会を代表しその体制派としてリードしていった。日本人は、彼らとは「人種、言語または宗教」のいずれをも異にしており、文化を異にする民族である。非欧州世界に属し、近代国際社会の非体制派に属する人びとであり民族である。この日本人は、19世紀後半、極東にまで押し寄せた欧州植民国家の圧力に苦しめられると共に、明治維新（1868年）を機会に鎖国から開国に転じた。それと同時に、「脱亜入欧」の精神の下自らをむなしくして、一路西欧的近代化の途に邁進した。

日本は、こうして、富国強兵、殖産興業、国民皆教育に力を傾注し、近代国家の建設に努力した。それは、国内的には、幕藩体制を統一・中央集権の近代国家にするために、また同時に、対外的には、欧州植民主義列国の圧力に対抗しかつ彼らとの間に主権平等の地位を獲得するために、ぜひとも必要なことであつた。軍事・政治・経済・技術・社会・文化、あらゆる面でひたすら先進の欧米諸国にならつた。当時、ドイツは諸邦分立の状

態からプロシヤを中心とする強力な統一へ向かいつつあったが、日本がこれにすくなくならなかったことはうなずける。このような状況で、日本の場合、軍事や政治などを中心に上（権力の側）からの近代化の傾向が強かった。憲法、人権、議会制度など、近代民主制度も取り入れられたが、基本的人権を中核とする西欧の市民革命的民主主義の吸収と定着は、表象的に終わっていた。

こうしたなかで、日本の近代化が着々と進んだが、それと同時に、軍国主義・国家（権力）主義の傾向が現れてきた。日清（1895年）、日露（1905年）の戦争に勝利をおさめた頃から、朝鮮の保護国化（1905年）、朝鮮の併合（1910年）、対支21ヵ条（植民地利権）要求（1915年）と、今度は日本自らが植民地支配の傾向を極東の近隣諸国に対してあらわにした。開国を強要し、治外法権を課し、植民地権益を要求した。かつて欧州列国による植民地主義の圧力に苦しんだ日本は、中国等を舞台に、これらの欧州勢力と植民地支配を争うにいたり、ついには彼らを押しのけて自らの植民地的覇権の樹立をはかるにいたった。日本国内は未曾有の軍国主義・国家主義の勢力に支配され、弱体だった民主主義は影をひそめ、国民の生活と人権は圧迫され窒息せしめられた。こうして、満州事変（1931年）、支那事変（1937年）となり、太平洋戦争（1941年）に突入して、敗戦の破局を迎えた。

2

第二次大戦後の日本は、人権と民主主義の基盤の確立をはかると共に、平和主義と国際主義をもって、戦後の国際社会に臨んだ。そして、破壊と荒廃のなかから立ち上がった国民の努力によって、未曾有の経済力を身につけ、れっきとした先進工業国となるにいたった。政治的・軍事的には西側の陣営に籍をおくことになったが、世界の南北問題には多分の理解を示し、必ずしも東西の垣根にとらわれず、その解決に努める姿勢を示してきた。

しかしながら、その急激な経済的進出の故に、欧米先進国との間に政治的経済的摩擦を生じ、他方、アジア諸国、とくにその民衆との間に社会的文化的摩擦を生じている。とくに、欧州植民国家の長い支配を脱したばかりのアジア諸国には、彼らの弱体な国家の国造りのために、日本と日本人に目をむける者がすくなくない。日本人が、彼らと同じ非欧米（有色）民族であり、程度の差はあれ欧米植民勢力に苦しめられた後進国だったのであり、しかも第二次大戦の廃墟からスタートして欧米諸国に比肩する非欧米唯一の先進工業国となった民族だからである。それだけに、日本人・日本企業が、近隣のアジア諸国にかつて植民地侵略をおかしたことについての歴史的社会的自覚を欠いて、儲け主義・享楽主義に傾斜してこれらの国で摩擦をおこすことは大いに問題である。

かつて、明治期の日本の近代化の過程でも、中国では、強引に侵入する欧州植民勢力に対抗するために、明治維新以後の日本に目を注いで、自国の改革を考える人たちが育っていた。しかし、これらの革新的な人びとは中国でその政権に必ずしも容れられず、また、彼らが日本に留学し日本に援助を求めようとしても、中国の政権当局との提携（癒着？）に走る日本の政府には冷遇された。そして、中国に対する日本の植民主義的圧力が高まり始める頃、欧米植民勢力に対し自国の近代的改革を志す中国民衆の心は、その政権と共に、日本をはなれて欧米に向くことになった。日貨排斥、排日運動を背景に、欧米と組んで、まず正面の敵、日本の軍国主義・侵略主義と戦うことになってしまった。

明治維新後の近代化の路線の逸脱を、多大の犠牲をはらって克服し、戦後の平和と民主主義の体制を獲得した日本と日本人が、よもやこの過ちを繰り返すことはないと思う。しかし、同じ過ちへと向かう兆しが絶無とはいえない現実の事態がある。これについては、いくら戒心を加えても加え過ぎることではない。

（筆者は上智大学社会正義研究所員、法学部国際関係法学科教授）

＜研究メモ＞

マス・メディアと社会正義 ——フィリピンの場合を中心に——

武 市 英 雄

I 言論と正義について

世界の諸国の中で、真に言論の自由が生きている国はわずかである。言論の自由がある国の方が少数派といえよう。アジアでは、自由に何でも言える国は1, 2の国を除いてほとんどないといっても過言でない。

本来、マス・メディアは社会の発展のために大いに役立つものである。とくに第二次世界大戦後はマス・コミュニケーションが社会の発展につくすものであるとの思想が世界的に広がった。大戦の終わった1945年の11月にロンドンで発表されたユネスコ憲章の中に、「マス・コミュニケーションのあらゆる手段、方法によって、諸国の間の相互の理解を増進する仕事に協力する」という文章がみられ、それ以来、このマス・コミュニケーションという言葉が世界的に広く使われるようになったという¹⁾。

日本でもとくに戦後、新聞を中心としたマス・メディアが民主化への大きな担い手にみなされるようになった。とくにGHQの支配下でアメリカからの指導がきっかけになったわけだが、日本人の間に、マス・メディアの社会的な役割への意識が強まってきた。

例えば、日本ではじめて新聞倫理綱領が昭和21年7月に制定されているが、その前文は次のように述べている。

1) 清水幾太郎編『マス・コミュニケーション講座』(1), 河出書房, 1955年, p.9。

「日本を民主的平和国家として再建するに当たり、新聞に課せられた使命はまことに重大である。これをもっともすみやかに、かつ効果的に達成するためには、新聞は高い倫理水準を保ち、職業の権威を高め、その機能を完全に発揮しなければならない」²⁾。

新聞が戦後の復興のために努力していこうという意気込みがよく表れている文章だと思う。

このようにマス・メディアが社会の発展のためにつくすには、大前提として言論の自由がなければならない。マス・メディアは政治に直接たずさわる者と一般市民との間に公平に立って、両者の間の情報の流れを円滑にする使命をもっている。アメリカのコミュニケーション研究者ウィルバー・シュラムによると、マス・メディアには「見張り」(watcher), 「討論」(forum), 「教師」(teacher) の三つの機能があるという³⁾。

マス・メディアが世の中のでき事を幅広く報道したり解説したりすることはとくに政府をはじめ権力をもった人びとに対する見張りの役になる。マス・メディアは受け手からの意見を吸い上げたり、論評したりして討論の場を提供する。さらに「ぜひこのことは読者や、視聴者に教えておかなければ」と教師としての役割もはたす。

このような機能が発揮されるほど、その社会は風通しがよくなる。開かれた社会になってくる。しかし、このような社会になるには言論の自由が確保されていなければならない。ところが現実には、マス・メディアが社会における正義の実現をめざして活動したくとも、はばまれているケースが多い。

日本の付近にもそのような国はたくさんある。そのような国では、言論の自由を獲得すること自体が社会正義実現への闘いである。本来、言論の

2) 新聞倫理綱領は日本新聞協会が1946年7月23日に制定、1955年5月15日に補正した。

3) 清水英夫ほか『マス・コミュニケーション概論』〈新版〉、学陽書房、1982年、p. 28。

自由は他人から自動的に与えられるものではなく、一人一人のジャーナリストの自覚の高まりによって、はじめて獲得されるものである。

言論の自由が十分保障されていない国ではマス・メディアは体制化してしまい、もはや政府と市民との間に公平な立場に位置していない。もっぱら政府の代弁機関になりさがってしまう。しかし、その中にありながらも、ひとにぎりのジャーナリストたちが本来のマス・メディアの機能を取りもどそうと努力していることを無視するわけにもいかない。その実例をフィリピンに焦点を合わせてみてみよう。

Ⅱ パノラマ事件の発生

1981年7月フィリピンでマス・メディアに関係した一つのでき事が起きた。これは、その後「パノラマ事件」とか「マグサノック事件」と呼ばれるようになった。マニラの代表紙の一つ「ブルトゥン・トゥデー」(Bulletin Today) 紙の別刷り日曜版雑誌「パノラマ」(Panorama) の女性編集長レティ・ヒメネス・マグサノック (Mrs. Letty Jimenez Magasanoc) が自ら書いたマルコス大統領に関する記事が「反政府的である」とクレームがつき、辞職に追い込まれた、というのが事件の概要である。

問題になった「パノラマ」は1981年7月12日号である。6月の大統領選でマルコスが当選したわけで、それにちなんだ特集記事であった。内容はマルコスの過去の仕事をふりかえり、今後を展望するものだが、出だしから皮肉をこめた筆致であった。つまりこういった調子である。

「あしたのお昼ごはんをどうしますか。とれませぬね。大統領就任式が終わってから食べに行きましょう。先生、痛みがはげしいんですけど、いつ手術していただけるでしょうか。就任式が終わったらすぐやりましょう。週末に一緒に出かけないかい。だめよ、就任式が終わのを待ちましょ。学校はいつ始まるの。これも就任式が終わってから……」⁴⁾。

4) *Panorama* (July 12, 1981) p. 6.

市民たちのやや自虐的な気分の会話をはじめにちらした、おもわず読者をニヤリと笑わすタッチで書き始めているこの特集記事は大統領の過去16年間の独裁的な政治を批判し、最後に「権力をもったマルコスが汚職や腐敗者の前では力がないことこそ問題である」⁵⁾と述べている。

マグサノックの書いた記事が問題になったのは実はこれが最初ではなかった。彼女は1974年、イメルダ大統領夫人の訪中を同行取材しているが、その記事が掲載されたのは予定をかなりおくらせてからであった。

「パノラマ」編集長になってからも問題が起きている。例えば1979年11月26日号が社長の命令によって回収させられた。また、1980年10月12日号でも彼女自身の執筆になるコラムがひっこめられてしまった。このため、コラムの掲載される予定だった3ページ目が欠けている「パノラマ」が一部地域に出回ってしまった。

しかし、いずれの場合もジャーナリストとしての職を失うまでには至らなかったが、1981年7月の事件では、とうとう彼女は辞職に追い込まれてしまう事態になったのである。

「ブルトゥン・トゥデー」のハンス・メンズィ (Hans Menzi) 社長自身が政府に呼び出しを受け責められるに至り、彼女も責任を取らざるを得なくなったわけである。

Ⅲ フィリピンのプレスの背景

なぜこのような事態になってしまったのか。これは日本の現代社会の尺度で考えると不思議におもえるにちがいない。このくらいの政府批判の記事は日本ではほぼ日常茶飯事のように見うけられる。ましてフィリピンでは8年余り続いた戒厳令も1981年1月に解除されており、事件は解除後の同年7月に発生しているのである。

このような事件が起きた背景として少なくとも二つのことを考えること

5) 前掲書 p. 35.

ができれば。一つはフィリピンが戒厳令中も解除後も本質的には同じ状態であるということ。つまり言論の自由はあいかわらず実現されていないことである。同じ大統領の下での強権政治が続いているわけである。もう一つはフィリピンのマス・メディアがすっかり体制化してしまっていることである。つまりマス・メディアの経営者自身が親政府の立場の人びとであるので、たとえ従業員に勇気ある者がいて、反政府的な批判をしてもからだを張って支援するような状態でない。

マルコスが1972年9月に戒厳令を発令したが、これによって当時のマス・メディアは大幅に変化させられた。戒厳令によって閉鎖させられたマス・メディアは都会の主要英字紙が8紙、タガログ語やスペイン語の新聞が4紙、地方の英字紙が14紙、週刊の地域紙が60紙、都市部のテレビ局が66局、同じくラジオ局が20局、地方のラジオ局が292局といわれている⁶⁾。例えば、アジアでも高級な新聞として有名であったロセス家所有の「マニラ・タイムズ」やロベス家所有の「マニラ・クロニクル」などが没収された。

再編成されたあとに、でき上がった現在のフィリピンのマス・メディアはすっかり政府寄りのものになった。例えば、現在マニラには代表的な日刊紙が3紙あるが、どれもその経営者は現政権とゆかりのある人がおさまっている。つまり「ブルトゥン・トゥデー」のメンズィー社長は大統領の元の補佐官であり、「タイムズ・ジャーナル」(Times Journal)のベンジャミン・ロムアルデス(Benjamin Romualdez)はイメルダ大統領夫人の弟でレイテ州知事である。「デイリー・エクスプレス」(Daily Express)のロベルト・ベネディクト(Roberto S. Benedicto)はマルコス大統領とはフィリピン国立大学時代の同窓生で親友。元駐日大使もつとめたことがある。

6) Marcelo B. Soriano *The Quiet Revolt of the Philippine Press* (Manila: We Forum Publication, 1981), p. 15.

つまり日本のように、マス・メディアの経営者が政府からまったくかけ離れた人びとであるのとはちがひ、フィリピンの場合はメディアのトップが現政権と深くかかわりのある人たちである。

このためプレス全体に現政権への迎合的な姿勢がにじみでている。フィリピンに長年住んでいるある日本人にいわすと「フィリピンの新聞は官報と家庭新聞という印象だ」という。官報というのは、どの新聞でも第一面に大統領関係のニュースが出ない日はほとんどないというわけである。それも写真入りで大きく載るので、まるで政府発行の新聞を読んでいるような気分になるという。

家庭新聞という印象は、政府以外のニュースで庶民レベルの記事が少なく、政治に関係のない家具調度などさしさわりのない記事が多いというわけである。

たしかに紙面づくりで日本のジャーナリズムの常識から見ると驚くような場合がある。例えば1980年8月マニラで国際大学連盟の総会が開かれ、世界各地から多くの学長が参集した。今日における大学の役割とか使命について話し合いが展開された。

ところが地元の新聞が報道した内容はその討論内容よりも別の方に重きがあった。つまり、その総会に招待された大統領夫妻のようすなどがあくまでも中心なのである。「デイリー・エクスプレス」（1980年8月26日）はマルコス大統領の開会でのあいさつの全文を2ページにわたって掲載した。来賓者がいつの間にかニュースの主役に仕立て上げられているのである。

この場合、日本のジャーナリズムの手法では、あくまでもこの総会で何が討論されたかがニュースの焦点であり、あいさつに來た人のことはふれてもごく簡単に扱う程度だが、フィリピンのジャーナリズムでは主客が転倒している。

別の例をあげると、1980年8月にマニラ市内に、英国文化振興会の新し

い図書館がオープンした。これを記事に扱うさい、日本ならば新しい施設の特徴などを紹介するのが常識だが「デイリー・エクスプレス」(1980年9月19日号)によると、イメルダ夫人が訪問している写真が載っており、記事は、夫人が訪問して、この施設がフィリピンとイギリスとの文化理解の橋になるようにとあいさつしたと、記されている。

つまり記事の主体は、センターの紹介よりも大統領夫人が訪問したことにアクセントがある。つまりいろいろな催しものが大統領夫妻のイメージづくりの道具に利用されているのが現実である。

このようなふんい気がフィリピンのプレス全体におおっており、たまたま勇気あるジャーナリストが政府を批判する記事を書いて問題になっても、経営者自身が積極的に記者を支援することはほとんど期待することができない。新聞社が一丸となって政府と対立する場面など想像することもできないわけである。

Ⅳ 一部ジャーナリストのめざめ

たしかにフィリピンのプレスは政府の御用新聞的な色彩が強いが、本来のジャーナリズムの精神を取りもどそうとの動きもわずかながら芽ばえはじめている。

さきに「パノラマ」事件(マグサノック事件)を紹介したわけだが、実はジャーナリストたちへの弾圧は何も珍しいことではなく、従来しばしば起きている。ジャーナリストが逮捕されたり、傷害をうけたり、行方不明になったりするケースは戒厳令中はしばしばあった。それなのになぜパノラマ事件が注目すべきでき事とみなすべきかは、この事件が発生して一部のジャーナリストたちが政府に対して抗議に立ち上がったことである。いままでは泣き寝入りで終わったケースが多かったが、こんどはジャーナリスト側の対応が少し違っていた。

マニラにナショナル・プレス・クラブというフィリピン人記者の親ぼく

団体があるが、ここで抗議総会が事件発生後まもなく開かれた。同クラブの言論の自由委員会委員長のホセ・ブルゴス (Jose Burgos) が中心になって開催にもちこんだこの総会で、司会役になったブルゴスがまず次のようにあいさつした。

「マグサノック事件はまさに私たちが、自分たちの良心をよみがえらせ、記者としての権利と義務を再び主張しようとした矢先に起きたのです。これはたんに、レティ・マグサノックさんや彼女の社主だけの私的な問題ではありません。むしろフィリピンのジャーナリストにかけられている重圧に対抗するわが国すべてのジャーナリストの問題なのです」⁷⁾

これに続いて参加したジャーナリストからいろいろな意見の表明が行われた。例えばある記者は一人一人の記者の立場は弱い状態だから組合をつくって対抗する必要がある、と主張した。「ブルトゥン・トゥデー」のある記者は、以前社長によって検閲を受けたことがあると体験を報告する一方、すべての言論抑圧の事例を記録に残しておこう、との提案をした。またある地方の記者からは、首都の記者だけでなく地方の記者たちも言論の抑圧を受けていることを忘れないでほしい、との訴えが聞かれた。

ナショナル・プレス・クラブ内にできた言論の自由委員会の地方支部をつくらうとの提案も聞かれた。さらに、このマグサノック事件を海外の世論に訴えるために国際新聞編集者協会 (IPI) へ働きかけようと提案する記者もいた。クラブの機関紙を充実させて、活用せよ、との意見も出た。

結局、総会としては次のような主旨の声明文を採択して終わった。

「プレスの役割は統治する者と統治される者との間の情報の導管となること。さらに自由な言論活動によって啓発された世論をつくり上げていくのを手伝うことである。政府は検閲などをせず、ダイナミックな社会の発展のために、自由な言論を擁護すべきである」⁸⁾

7) 前掲書 p. 37。

8) 同上 p. 66。

声明文には権力当局への抗議だけでなく、まずプレス経営者の姿勢をただすよう呼びかけられてもいるわけである。いままでのプレスは統治する者とされる者との間に公平な立場に位置していなかった。

しかし、このような声明文は、一般の新聞にはほとんど載せられなかった。「デイリー・エクスプレス」は1ページ目に載せて印刷を始めたが一万部だけで打ち切ってしまった。地方へいく版だけで都市部の版ではその記事は削られてしまったといわれている。

結局パノラマ事件を真正面から本格的に取り上げたメディアはマニラの代表的な新聞にはどこにもなかった。それではフィリピンではいかなるメディアも完全に無視したかということ、かならずしもそうではない。「ウィー・フォーラム」(We Forum) とか「フィリピン・タイムズ」(Philippine Times) という週刊新聞がマニラで発行されているが、ここでは多少記事に扱われている。さきのプレス・クラブ総会の司会者のブルゴスは「ウィー・フォーラム」の発行人兼編集長であり、以前より政府批判の記事を載せていた。さらに「フィリピン・カレジアン」(Philippine Collegian) という大学新聞などでもパノラマ事件が報道された。

要するに今日のフィリピンでは本来のジャーナリズムの姿勢を残しているのは、いわゆるマニラの代表的な一般紙ではなく、むしろミニコミ紙に近い小新聞においてである。とはいっても、このような小新聞では言論の自由が大いに認められているわけではない。ブルゴス自身、過去に何回も情報局から警告を受けている。ただ「ブルトゥン・トゥデー」や「デイリー・エクスプレス」のような一般紙が10万から30万の発行部数をもっているのに対して、小新聞の発行部数はおそらく数千ないしせいぜい1万部くらいであろう。このため政府の取り締まりも多少大目にみているところがあるのかもしれない。

さらにこれらの小新聞経営者自身の苦心もみのがせない。例えば紙面に反政府的な知識人の記事を書いた時は、次の号では当局寄りの人の記事を

載せるなど、できるだけバランスをはかろうとしているわけである。

V ま と め

人が自分の考えを自由に述べることができる状態は本来、人間のごく基本的な権利である。この権利を実現させることは社会的な正義をめざすことであるといってもよいであろう。しかし、フィリピンではその社会的な正義が行われていない。フィリピンが特別な国ではなく、多くの発展途上国や社会主義国でも同じような現象がみられる。ほとんどの国ぐにの憲法では言論の自由が認められていても、現実の運用面ではかならずしも理想通りになっていない。

なぜ言論の自由がせばめられるかという、為政者にとってはまず国づくりが第一、国の安定発展が第一で、そのために人権とか言論の自由がある程度せばめられても、それは仕方のないことであると考えられているからである。かつてインドのガンジー女史は第一次の政権の時、国内のプレスをかなり弾圧したことがある。国内にいる外国特派員の活動もかなり圧迫した。

その時反発する外国の記者たちに対してガンジー女史は「アジアではアジア流の民主主義がある」という主旨の発言をしたことがある。つまり次のように述べている。

「問題は民主主義とは一体、何なのかということです。西欧諸国は、自国の体制こそ最も民主的と考えています。しかし、おかねが大きな役割を果たすような体制は、貧しい人びとに機会を均等に与えませんから、本当の民主主義とは思いません。民主主義とは、選挙の問題ではありません。最も大事なことは、全国民に手を差し伸べて、現状を理解してもらい、国づくりに参加してもらうことです。反対を唱えるのは自由ですが、実行を妨害すべきではありません。インドのような貧しい国が深刻な経済難を抱えている時、政治ストを打たれては、とても耐えられるも

のではありません。インドには独自のパーソナリティがあります。私たちはこれを注意深く、断固として守り抜きたいと思います。外国のパターンに従うつもりは毛頭ありません」⁹⁾

たしかに発展途上国の政治責任者としての言葉として説得力はあるが、次のような心配も頭をもたげるのである。目さきの国づくりのためにしばらく国民の人権とか言論の自由がせばめられるのも耐えしのぶとしても、いつの段階になったらゆるやかにしてくれるのであろうかという心配である。国民がだまっていっても善政を施してくれる政治家もいるが、権力の座にあぐらをかいて公約をはたしてくれない政治家も多いのである。

とくに目にみえない人権とか言論の自由とかについては、たえず国民の側から権利を主張していないと無視されがちである。

現在のフィリピンのマス・メディアがいつ本来のジャーナリズムの姿勢を取ることができるのであろうか。これは決してたやすくはないであろう。なぜならばマス・メディア自身が体制化してしまっているからである。むしろ期待できるのは、既存のプレスよりも、「ウィー・フォーラム」などの小型メディアなどである。このようなメディアが今後も力を増していくと、フィリピンのジャーナリズム界に何らかのインパクトを与えていくことになる。早急で過大な期待は無理であるにしても、このような良心あるジャーナリストの地道な努力こそがいまのフィリピンにおいても最も大切なのではないだろうか。

(筆者は上智大学社会正義研究所員、文学部新聞学科教授)

9) 佐藤公一「インディラの改革——非常事態宣言下のインド」(『放送文化』1976年10月号), p. 49.

2. Explain the following:

- (a) Why is the study of the history of the English language important?
The study of the history of the English language is important for several reasons. First, it helps us understand the development of the language over time, from its roots in Old English to the modern English we speak today. This knowledge is essential for linguists and language scholars who study the structure and evolution of languages. Second, it provides a deeper understanding of the cultural and historical context in which the language has been used. For example, the influence of Latin and French on English vocabulary reflects the historical interactions between these cultures. Third, it is important for educators and students of English as a second language, as it helps them understand the nuances and variations of the language. Finally, it is a valuable tool for researchers in fields such as literature, history, and anthropology, as it provides a window into the past and the lives of people who spoke the language.
- (b) What is the difference between a dialect and a language?
A dialect is a variety of a language that is spoken in a particular region or by a particular group of people. It is characterized by specific pronunciation, vocabulary, and grammar. A language, on the other hand, is a system of communication that is used by a community of people. It is characterized by a shared set of rules and conventions for using the language. The difference between a dialect and a language is often a matter of degree, with some dialects being considered as separate languages.
- (c) What is the significance of the Great Vowel Shift?
The Great Vowel Shift was a series of changes in the pronunciation of the vowels in English that took place between the 15th and 18th centuries. It is significant because it represents a major turning point in the history of the English language. The shift involved the raising of the vowels, with the long vowels moving one step higher in the vowel chart. For example, the long vowel /e:/ moved to the position of /i:/, and the long vowel /i:/ moved to the position of /u:/. This shift had a profound impact on the English language, as it changed the way words were pronounced and the way they were written. It also led to the development of new words and the loss of old ones.
- (d) What is the role of the English language in the world today?
The English language plays a central role in the world today. It is the most widely spoken language in the world, with over 350 million people speaking it as a first or second language. It is also the most common language of international communication, used in business, science, and the arts. The English language is a key factor in the globalization of the world, as it allows people from different cultures and countries to communicate and understand each other. It is also a major source of cultural and intellectual exchange, with many of the world's most important works of literature and science written in English.

Write a short paragraph on the following topic: The influence of the English language on the world today.

所有についてのカトリック思想

ブルクハルト・ヴェクハウス

序 文

所有権という問題は、社会秩序を保持する上で重要だと考えられる。唯一の倫理的局面ではない。また、おそらく、最も重要な倫理的問題でもない。しかし、所有は、大部分の社会問題の中心点であるのは確かである。人びとの社会生活に影響を及ぼす力にはいろいろある。しかし、こうした力の中でも、経済的要素が、きわだって重要である。というのは、人間は、自分の必要や欲求を充足するのに、物質に依存している。そして、もし、これらの物が与えられなければ、彼の存在は、直接的な危険に陥るであろう。

この論文で我々はまず、所有の哲学的、経済的意味を明らかにし、それから、所有に関してのカトリック教会の伝統的立場を示す。その後、国の工業化に伴って現れる新しい所有形態、財産を国内的ばかりでなく、国際的に管理する必要性と、その方法について、カトリック教会の教えの面から考察する。

1. 問題についての詳説

我々が所有のことを言う場合には、心の奥で、何が私のもので、何があなたのものであるかを考える。財産は、物質を使用し、別の人とは違った領域で支配する権利を、所有者に与えるものであると考えられる。このよ

うに、財産は、自由行動とは明らかに別の領域の基礎となる。

財産の主体は、個人である場合もあるし、また、一グループの人たちである場合もある。たとえば、社会、夫婦、あるいは、会社や協会といった法人や、国家全体のこともある。具体的な財産そのものの形態は、さらに多種多様である。そしてさらに、これらの形態は、ほとんどたえず変化する。非常に多様なので、それらを「所有物」という一つの概念の下に包括するのは難しい。物質ばかりが所有となりうるのではなく、著作権と特許権のような非物質的権利、あるいは担保の所有、会員権のような義務権、株の所有、老齢年金を受ける権利さえも、みな何らかの財産形態である。

こうした財産形態の多様性から、「不変の財産形態」¹⁾はなく、従って、天与の、あるいは、不変の現存する財産の配分はないことが、容易に理解される。しかし、もしそうであれば、財産の過程、形成、あるいは、所得配分の過程をも考慮に入れなければならない。というのは、財産は、自分のものとして、自分がすでに所有しているものであり、財産は、さらに獲得するか、あるいは、喪失するかによって、変化が可能になるだけである。財産所有の不公平に注目するならば、それを変えようとするなら、所得配分に影響を及ぼさなければならない。

どんな人間社会でも、財産の変化は、法律や慣習で規制される。そして規則違反が発覚した場合には処罰される。たとえば、最も広く認められている所得に対しての権利、人がする仕事である²⁾。J. S. ミル、また後にK. マルクスは、労働をすることによってのみ、人間は財産を所有する資格を持つとさえ強調した。しかし、ミルやマルクスでも、贈り物を受け取るのは、法律的にも道徳的にも認められた財産を増やす方法であることを

1) ピオ11世 “Quadragesimo Anno” No. 49。

2) 財産に関して認められている権利と認められていない権利について、もっと詳しい説明は、E. Welty, *Die Ordnung des Wirtschaftslebens* (Freiburg: Herder, 1958), pp. 48-61, chap. 3 を参照せよ。

否定しないであろう。しかしながら、「贈り物」さえも、法律や習慣の管理下にある。もし贈り物が比較的大きければ、ほとんどすべての近代国家では、その贈り物に対して課税される。また、もし「贈り物」が、重要な決定を左右しようとの意図の下に贈られたことが明白であれば、贈り主は賄賂の疑いで起訴されるかも知れない。

法律や習慣で認められている他の財産を受ける権利は、相続、売却、有利な生産、お金の有利な運用、また賭や賭博などである。これら五つの権利はみな、時には鋭く批判されたが、人間の経済活動に深く根をおろしているので、実際には姿を消すことは決してなかった。相続は共産主義国ではほとんど認められていない。民主主義国でも、遺産相続による巨大な利得に対しては、重税が課されることが多い。生産活動による妥当な利得は、普通正しいと考えられているが、不当利得をあさること、すなわち、生産品に不当に高い価格をつけることは、批判された。多くの国では、歴史上長い間、商人は嫌われた。というのは、商人は、付加価値を生産しない（と考えられた）で金もうけをしたからである。

それと同じ理由で、中世ヨーロッパの多くの地域では、利子をとることが禁止されていた。その昔、アリストテレスが述べたように、「お金は不毛」だからである。従って、お金は、お金を産まないから、お金を貸した時の金額以上のお金を返してもらってはならない。しかしながら、歴史をもっと深くみてみると、利子の禁止は、財産を持たない人びとを保護する一つの形式であったことがわかる。借金しなければならない人は、金貸しに対して保護されなければならなかった。

違った時代、違った場所で、どのように、またどの程度まで、法律や慣習が管理し、規制してきたかを、ここで詳説することはできない。しかし、どうしてこのような管理が行われたかという主な理由は、明らかである。それは、個人や、家族、一門といった第一次集団の自由行動の領域を保存しようと努めたからである。事実、もしそれが保証されれば、人びとは、

自分や社会全体のために、自分の能力を最大限活用するために、エネルギーを貯え、使うことができるであろう。

近代国家では、「自由行動の領域」ということよりも、所得の「公平」の方に力点がおかれている。こうした力点の違いは、財産所有の拡大は、財産所有者に社会、経済的、また政治的権力を与えるという、社会学や心理学の新しい洞察から来ている。そして、この権力を、権力を持たない人に、社会的または政治的圧力をかけるのに使える（そしてきっと使われるであろう）。また、この権力は利益の拡大にも役立つ。従って、公平に力点をおくことによって、自由行動の領域を与えるのみならず、この領域を保証して、個人が成長し、社会の発展に寄与する機会を平等に与えようとしている。

さらに、カトリック教会は、財産を所有する権利があるという事実をふまえて、財産所有者は、道徳法に従って、自分の財産を使う義務を負わされるべきであると主張している³⁾。このことは、次のように説明できるだろう。人間は、神の似姿として創られている。すなわち、理性と自由という、何かの道具ではなく、それ自体が意味と目標を持ったものを与えられた人として創られている。「神の似姿」の意味は次のようなものである。人間は、神によって、道徳的存在として創られている。そして人間は、自由の中で、善良なるものであることを証明しなければならない。こうした創造主の意図の下に、人間は権利の所有者となる能力を与えられた。というのは、権利は人間に自由な場を与え、そこで、人間は創造主によって与えられた方向へと、自分の個性を発展させられるからである。従って、権利の本当の意味は、人間が、人間社会で道徳的存在として証明できるように、外的条件を創造することである。

以上が、今日カトリック教会が所有権についてとっている見解である。

3) Fr. Klüber, *Katholische Eigentumslehre* (Osnabrück : A. Fromm, 1968), p. 15.

こうした教義の歴史的発達について、簡単にみてみよう。

2. 教会の伝統の中での所有権

主として金持の方が、キリストの教えを受けいれにくかったので、キリストは、貧しい者たちに語りかけられた、「愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国の相続者とされたではないか」⁴⁾。

しかし、教えはすべての人に対してのものであった。キリストは、人間は財産にしがみつき、その奴隷になる危険にいつもいと指摘している。従って、神の支配を認め、神のために自由になるために、この世の中の物質から心を解くよう、キリストは求めている。「自分の持ち物を売って、施しなさい」⁵⁾。「自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」⁶⁾。キリストの教えを受けいれ、天国を期待する者は、「自分のものではないかのように財産を所有」するであろう⁷⁾。信仰する者は富めるであろう。なぜなら、永遠の生命が彼に与えられるからである。彼は、間断なく、同胞へ善をなすために、自分の財産を使うために、地上の財産から解放されなければならないだろう。心を開き、困っている人を見たらいつでも、援助の手をさしのべるとというのが、信仰者が神への愛を本当に表わす道である。

最初のキリスト者の共同体は、こうした神の基本的要求を実生活で実行しようと大いに努力した。彼らは新しい社会秩序を生みはしなかったが、主のみ言葉を実現しようとの決意が、彼らの経済行動に影響した。E. トレルチュが「宗教的愛の共産主義」と呼ぶ共産主義の一形態が生まれた。

4) ヤコブの手紙、第2章5節 (日本聖書協会訳)。

5) ルカによる福音書、第12章33節 (同)。

6) ルカによる福音書、第14章33節 (同)。

7) コリント人への第1の手紙、第7章30節 (同) 参照。

これは慈善と犠牲に対する宗教的意味の証しとして、物質を共有することを考える共産主義である。しかし、この共産主義は、消費の共産主義というだけであって、寄贈や犠牲を前提とした私的利益活動は認めている」⁸⁾。

信者たちは、社会計画を立案することはなかったから、これは実際には、当時の社会・経済秩序の改革ではなかった。しかし、神への愛と、隣人への愛を説いたキリストの教えに従う姿勢を示すものである。この意味において、愛の共産主義は、社会に非常に重要な意味を持った⁹⁾。というのは、元来は“否定的”共産主義であったけれども、歴史的影響をうけて、再三再四、“積極的”共産主義への傾向を示した。

最初のキリスト教の黄金時代には、新約聖書の考え方と同様に、法的見地からというよりは、キリストは、信仰者がどのように財産を使うことを望んだかという見地から、財産の規則を考えた。キリストは、地上の財産に心を縛られないよう教えているが、教会の教父たちの中には、信仰者が財産を所有する正当性さえ否定する人がある。これは、明らかにストア哲学派の影響である。ストア哲学派は、財産は、生まれながらにして与えられる権利ではなく、それを善用できることが明らかにされてはじめて、社会から与えられる権利とむしろ考えている¹⁰⁾。クリソストモスは、物質を共有する方がもっと妥当な自然の所有形態である、としている。すなわち、すべての人は、共同体のことを気にするので、私有財産はもはや必要とされないであろう。アンブロシウスもまたこのような思想をいっている。そして、彼は、私有財産は強奪によってのみ獲得できるものであるという意見である。

所有権を、キリスト教的見地から、あるいは、哲学的見地から証明しよ

8) E. Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, Ges. W. I, 1912, p. 49.

9) Fr. Klüber, *op. cit.*, p. 128.

10) A. Hertz et al., *Handbuch der christlichen Ethik*, II (Freiburg : Herder, 1978), p. 373 の W. Kerber の言葉より。

うとの最初の試みは、中世に行われた。トマス・アクィナスの議論は、重要性を増し続けた。彼は、共有というキリスト教の伝統を倫理的財産の正当化と結びつけ、私有財産は道徳的に正当化できると明白に述べている。

トマス・アクィナスは、もし物質を規律正しく使うことが保証されるならば、私有財産を認めた社会秩序の方が、共有財産よりも好ましいことを示すために、次のような三つの理由を挙げている。a) 人は誰でも、自分自身のものを気にかける。共産主義的社会秩序の下では、労働に対する刺激がない。b) 私有財産制度の下では、責任領域に、もっと明白な区別がある。c) 共有財産は、摩擦やけんかの原因となる¹¹⁾。トマスは、私有財産を、人間の生得の権利の面からではなく、社会秩序の局面から主唱していることに注目しなければならない。そして実際にトマスは、私有財産権は、人間が生まれながらにして与えられる権利ではなく、理論に由来する第二次的な権利であると確信している。

トマス・アクィナスの三つの主張は大いに議論され、繰り返し解釈された¹²⁾。そして、他の論議が加えられたのは、ヨーロッパ諸国で急速な工業化が体験された後であった。1. 将来に対する不安 2. 家族の安全 3. 労働者が無産階級化するのを守る道 4. 国家に対して、人間の自由を保護する、という四つの論点である。しかし、こうした議論は、いかなる財産所有者も、自分の財産を使用するに際して、共通善を尊重し、隣人の要求に目を開いていなくてはならないというカトリック教会の要求を弱めるものではなかった。従って、今日「財産の社会的義務」として知られているものに、疑問が投げかけられることはなかった。たいていその意味は、狭義で理解されていた。すなわち、利潤を蓄積するために、経済力を容赦

11) S. Thomas de Aquino, *Summa Theologica*, II-II, q. 66, a. 2.

12) イタリアの Gaetanus とスペイン黄金時代(16世紀)のサラマンカ神学派のドミンゴ・デ・ソトは有益な解釈をした。拙稿「ドミンゴ・デ・ソトとサラマンカ学派の思想」(『社会福祉研究』上智大学社会福祉学科1978年)参照。

なく行使してはならないし、所得の一部は、困っている人への慈善的援助として、さし出されるべきである。

19世紀における工業化は、多数の労働者に物質的困窮をきたした。それが直接の原因となって、カトリック教会は、所有問題に関して、包括的な思想体系を展開することになった。

3. 工業社会における所有権

19世紀末に展開されたカトリックの社会教義は、マルクス主義の増長に直面して、私有財産制度の重要性を特に強調した¹³⁾。二つの面において、この教義はトマス・アキナスの議論よりもさらに進んだものであった。

1. 所有権は、生得権として強調された。すなわち、人間の理論に由来するので、撤廃されるかもしれない権利として考えられたのではなく、人間の本質そのものに基づく権利として考えられた。2. 共産主義的秩序の下では、個人は、経済的自立を失うのみならず、社会的、道徳的自立をも失うとの確信が強かったので、人間の尊厳と自由を保証する必要性が強調された。

これらの議論は、すべての私有財産を共有財産に変えることによって、社会的緊張をとこうとする社会主義に、主として向けられている。カトリック教義は、種々の財産形態をまだ区別しなかった。むしろ、所有者が直接財産を使用する中小の農場や、職人工場における生産の手段と、消費物資を個人的に所有することに関して、自らの態度を明らかにしたのであった。もし、この種の財産が平等に配分されるならば、あるいは、少なくともある程度まで手に入るならば、それは個人の自由な発展や正当な社会秩序の確固たる基礎となる。換言すれば、私有財産制度を保護することは、財産配分の改革を要求することを意味していたのである。というのは、こ

13) A. Hertz et al., *op. cit.*, p. 376.

うることによって、社会を二つの階級——生産手段の所有者と財産のない労働者——に分けることが回避できると考えられたからである。

こうした考えを最もよく表わしているローマ教皇の回勅は、ローマ教皇レオ13世が発表した“*Rerum Novarum*”（労働者の境遇、1891年）と、“*Rerum Novarum*” 40周年記念に、ローマ教皇ピオ11世が発表した“*Quadragesimo Anno*”（社会秩序の再建、1931年）である。——1891年には、どのような状況であったのであろうか¹⁴⁾——教皇の目には、労働者の状況は、財産を持たない大衆に、少数の金持が課す新しい形の奴隷制度のように見えた。そして教皇は、どうしたらこのような耐えがたい不均衡を是正できるかという疑問に答えようとした。その当時の社会主義は、私有財産、少なくとも、すべての生産手段の私有を廃止することによって、不均衡を是正することを提示した。今日の民主国家における社会主義は、もはやそのような目的を掲げていない。今日の社会主義は、経済のいくつかの分野を国有化することには賛成しているが、私有財産、そして、生産手段をも保持することを望んでおり、私有財産を、より多くの人へと拡大していこうと努めている。

レオ13世は、その当時の社会主義に対処しなければならなかった。それは、今日の大部分の社会主義の形態と似ていた。従って、教皇は、社会主義が提唱する解決は、解決しなければならない問題よりも悪いとの見解にいたった。教皇が、そのような社会主義を相手にしなければならないというのは、不幸なことであった。教皇は、小農場、あるいは小工場所有者の自立を保証するために、私有財産の必要性を強調した。しかし、私有財産を保護しようとの教皇の努力は、その当時、多くを所有していた人を守るための戦いであると解釈された。そして、この種の悪い状況が、長い間——おそらく今日まで——、カトリック教会の社会教義に残った。

14) O. V. Nell-Breuning, *Die Sozialenzykliken : Wirtschaft und Gesellschaft heute II* (Freiburg : Herder, 1957)。

しかしながら、レオ13世は、金持の特権として財産を強調したのではなかった。何も、あるいは、ほんの少ししか持たない人の正当な要求を支持するために、私有財産の必要性を提示したのであった。「すべての人に財産を」という提唱の下に、教皇は、無産階級——財産を持たず、生計をたてるために、毎日自分の労働力を、雇用者の決めた条件の下で売ることを余儀なくされている人びと——の状況克服に努める。このプログラムは、後にピオ11世によって、「財産形成による非無産階級化」と呼ばれた。

“Quadragesimo Anno”の中で、ピオ11世は、私有財産についてのレオ13世の言葉の誤解を何とかと努力している。多くの人びとは、レオ13世の言葉を、あたかも財産は所有者のみのためのものであって、この財産（たとえばピストル）が、人びとに直接危険を及ぼす場合にのみ、国家が干渉できるかのように解釈した。ピオ11世は、「財産には二面性がある」という表現を作り出した¹⁵⁾。教皇は、財産はまず第一に、所有者のためにならなければならないということを認めている。しかし同時に、財産は、財産所有者が生活し、働いている地域社会に向けられなければならない。財産に関するこうした社会義務が、今日では大いに議論されている。事実、近代国家の法律や、日常の発言に多大に影響を及ぼした。

ピオ11世によれば、国家は、財産の危険な使用のみを止める必要はない。国家は、財産を配分し、その時代の要請に答えて、市民の必要に応じて、この配分を変えなければならない。人間の生活の重荷を軽くするために、神が私有財産制度を作られたのであるから、人びとにさらに負担をかけるために、私有財産を使ってはならない¹⁶⁾。

この考えには、“Quadragesimo Anno”ではまだいたっていない重要な結論が含まれている。それは、資本形成の問題である。資本所有者が、働く場所の数を維持し、拡大するのに必要な資本形成に心をくばる限り、

15) *Ibid.*, p. 366.

16) *Ibid.*, p. 366.

彼らは、国民総生産のより大きな割合を、正当に要求できる。しかしながら、もし労働者が、この資本形成に寄与する用意があるならば、彼らは、国民総生産の彼らの割合を拡大できる。つまり、もし労働者が、自分自身と家族の生活維持費を得ることだけが、自分の責任であると考えているならば、適当な生活水準に必要である以上には要求できない。しかし、もし彼が、国の資本形成という経済体制に貢献する用意があるならば、人並みの生活に必要な以上に所有できる。この“以上”というのは、消費物資に対してではなく、耐久財、生産手段に対してである。

私有財産制度がここでは明らかに容認されているのがわかる。しかし、近代経済生活においては、大企業が影響力を増し、法人が生産手段の所有者である。そして、資本を供給する人は、間接的にその資本を処分する権利を有するのみである。従って、複雑な株式会社のこみ入った財産に、古い財産の概念をあてはめるのは難しい。その概念を直さなければならない。そうすると、財産に賛成している古典的な論議の妥当性は、ほんのわずかに限定されてくる。今日では、決定的な要素は、権力である。大企業が、労働者や大衆全体の生活に対して権力をふるう。生産手段の大部分は、人口のほんの一握りのグループによって所有されている。そして権力は、生産手段を有する人びとの掌中にはたいていなく、所有者によって、雇われ企業家に委任されている。こうした現況の下では、広範囲な財産の形成と、労働者の共同決議という社会政治学の二つの目標が、ますます重要になる。

4. 財産の形成と共同決議

生産手段の不平等な配分が、財産関係を批判する出発点になっている。というのは、財産配分の不平等が、所得の不平等な配分の基礎となっているからである。また同時に、企業の資本に強い影響力を持つ人は、政治的合法もなく、多くの人びとの生活に、強い影響力を及ぼすことができるだ

ろう。

このようにして生まれた社会的緊張と、社会的機会の差異を解決する道は、二つの方向から考えられる。一つは、すべての会社を完全に国有化することであり、もう一つは、生産手段という財産を獲得する機会を、万人に平等に与える手段、つまり、財産の再配分を行う社会政策を立案することである。多くの国でのさまざまな経験から、生産手段の国有化は、権力や自由に関して、新しい問題を引き起こすことが知られている。従って、現存する財産所有の極端な差異を、民主主義的に減少させる唯一の方法は、再配分という社会・政治的手段であるように思われる。再配分によって、財産が完全に平等に配分されることは期待できない。そのような配分は、望ましくもない。なぜならば個人の自発性を生む多くの社会的に有用な刺激が、消滅してしまうであろうからである。従って、カトリック教会は（プロテスタント教会も）、財産形成に対する政治的手段を 勧告し続けている。しかしながら、このような勧告は、まだ本当に決定的な成果を生むにいたっていない。

所有の問題は、労働者の共同決議を論ずるにあたっても、重要な役割を果たす¹⁷⁾。なぜなら、資本財の所有者と労働者という、大企業の経営に影響を及ぼす二つのグループの間には、ある種の均衡が見られなければならない。多くの人は、労働者の共同決議に対する衡平の権利は、資本家の所有権を侵害するものであると力説する。というのは、非所有者が、誰か他の人の財産の使用に、影響力を及ぼす権利を得るからである¹⁸⁾。しかしながら他方では、どんな所有権も、自分達に関係する会社のすべての決定に参加する自由を有する労働者によって、限定されるであろうと正しく指摘

17) A. Hertz et al., *op. cit.*, p. 379, A. Mitchell, *Human Needs and the Changing Goals of Life: The Future of Work* (London: Fr. Best ed. Prentice-Hall, 1973), pp. 32-43.

18) M. Poole, *Workers' Participation in Industry* (London: Routledge & Kegan Paul, 1978), pp. 49-56.

する人もいる。

実際、これは、生産手段の所有者が行使する社会権力の制限である。財産という概念だけからは、このような制限がどの程度行われるべきかという問題に対する解答は得られないだろう。というのは、前に見たように、財産という概念は歴史条件に依る。これと同じ理由で、教会の新しい文書に見られるカトリックの社会教義は、財産所有者よりも、労働者の権利により重点をおいている。しかし今のところ、両者の間の望ましい均衡について、はっきりした解決のめどはついていない¹⁹⁾。

今日、我々が財産の重要性を考える場合、安全要素、あるいは、自由に処分できる機能を持つものとしての財産の役割は、何十年か前と今日を比較すると、個人や家族にとっては、いくらか減少している。しかしそれでも財産は、主として家族にとって、安定の強い要素である²⁰⁾。従って、所有権は、秩序を維持し、作り出す力であると言えることができる。

しかしながら、会社、少なくとも大企業の所有権は、社会秩序を作り出し、維持もしない。社会秩序を保持するのに、大企業の所有権は必要ないというのではなく、正当な社会秩序を確保するためには、財産のみではなく、何かそれ以上の力の働きがなくてはならない。マルクスは、すべての生産手段の財産を国有化すれば、正当な社会秩序が保持されるであろうと確信していた。しかし、このような手段は問題の解決にならないことを我々は承知している。このような手段は、一般市民の自由の分野を確保するほとんどすべての可能性を取り去ってしまうことを、経験は物語っている²¹⁾。従って、経済力と政治力の完全な分離（＝自由資本主義）も、両方の力を完全に同一のものとして扱うこと（＝共産主義）も、人びとの自

19) 回勅 “Mater et Magistra” No. 91, 司牧の憲章 “Gaudium et Spes” No. 67, No. 68。

20) O. V. Nell-Breuning, *op. cit.*, p. 281。

21) *Ibid.*, p. 289。

由を侵害することになろう。

分離の場合には、社会の管理されていない不明の権力が、人間の自由を悩ますであろうし、同一化の場合には、自由が、猛悪な政治権力のえじきになるだろう。ここから政府の仕事が生まれてくる。社会で本当の自由が守られるように、政治的決定で、財産の経済力と、国家の政治権力とを結合しなくてはならない。それが正当な社会的民主主義であろうし、国家の社会的状態であろう。さて、これと同じ考え方は、正当な国際社会にも敷衍される。

5. 所有の国際的問題

財産配分の国際的局面が焦点になったのは、ほんの数年前のことである。そして今でも、それは20世紀のおもな“社会問題”であると考えられている。主要問題は、国家間、大陸間の極めて不平等な物の配分である。世界の飢えを救済し、発展途上国に、もっと人間的な経済状態を作り出す本当の機会を与える必要性を訴える理由がいくつかある。第一の理由は、発展途上国の貧困は、そう遠くない将来に政治的緊張の原因となり、先進国にとって危険になると考えられることである。第二の理由は、発展途上国の生活状態が向上し、生産関係が改善されれば、世界貿易に、従って間接的には先進国にも、好影響を及ぼすと考えられることである。こうした二つの理由の裏には、恐れと利益という動機づけがあり、倫理的には疑わしい。

キリスト教信者に関しては、開発という問題は、主として正義の面から考えられなければならない。人類の団結は、信者たちに、すべての人間が、たとえ遠く離れて、また他の国に住んでいても、キリスト教で言うところの人間の尊厳にふさわしい状態で生活する権利を有することを認めることを求める。それは、たとえば、植民地政府による搾取といったような、以前犯した不正行為に対する償いの問題ではない。また、単なる豊かさから

の慈善的贈り物でもない。それはむしろ、正義に対する義務である。つまり、それは、すべての人が必要な物を手に入れられるような国際的条件を作り出す義務である。

諸キリスト教会では、財産にはこうした道徳的義務が含まれるという意識を、信者に呼びさます努力が行われている。「ミゼレオール」や「世界にパンを」といった多くの組織が、これらの思想を基礎として、世界中に作られ、開発援助の慣例と、また同時に、問題の緊急性をもっと幅広く認識させるのに、直接貢献している²²⁾。所有についてのカトリック教会の教義は、第二バチカン公会議の司教の憲章 “*Gaudium et Spes*” (現代世界憲章、1965年) の中で再開された。そしてまた、ローマ教皇パウロ6世は、“*Populorum Progressio*” (諸民族の進歩推進について、1967年) という回勅の中で、主として現代の世界状況に重点をおいて、教えを説いた。この回勅は、発展の問題を広く取り扱っているので、あとの6章でもっと深く考察することにする。ローマ教皇は、連帯性に基づいた開発の必要性を力説する。しかし、キリスト教徒も含めて、西欧社会の多くの人は、所有権の理解に関して個人主義や自由主義の影響を強く受けていることは疑いない。そして、それは、カトリック教会の教えに合わない。

経済関係の公正な国際秩序をうちたてる必要性が、非常に明白に述べられている。というのは、それだけが、貧しい国々における開発の可能性を開くであろうからである。しかし、問題は複雑であり、カトリック教義にも、またその他どこにも、明瞭な解決への指針はない。発展途上国での積極的援助に直接貢献できないキリスト教の信者は誰でも、利己主義、自分の個人的利己主義と、自分が住む国家の利己主義を減らす助けをすることが、少なくとも期待されている。というのは、人類の連帯性についてはっきりした意識がなくて、あるいは、実際に生きたキリスト教徒らし

22) A. Hertz et al., *op. cit.*, p. 380.

い慈善がなくては、意義ある発展に向けての有効な政治的手段はないであろうからである。

所有権に関連して、もう二つの問題領域を考察しなければならない。両方とも、ごく最近になって、広く意識されるようになった。一つは、将来の世代が資源を使うことができるように現在の人びとが地球の資源を使う必要性である。第二は、貧困と文盲の関係である。

これら二つの問題は、今日ではよく知られているが、きびしい現実には、誰もほとんど想像がつかない。第一の問題を見てみよう。「もし今日の地球の各人が、平均的アメリカ人の生活水準を享受するならば、世界人口は、おそらく7億以下に保たれなければならないだろう。しかし、今日の世界人口は、40億以上である。アメリカの生活水準よりもずっと低い生活をしている人の中には、1万4千人のインドの子供たちがいる。彼らは、たんぱく質の不足から、毎年盲目になっている。それと同時に、アメリカ人は、1億2千2百万人の一日の必要量に匹敵するたんぱく質を、猫や犬に与えている」²³⁾。こうした不平等な物の使い方、そしてその足かせのない継続は、「誰が支払えるか」ということのみを問題にした配分方法に主として起因している。

哲学者は次のような疑問を投げかける。「どちらかといえば、このような不平等に対して、我々は道徳的に何をする義務があるのだろうか。外国で飢えている人びとに援助を与える義務があるのだろうか。もしあるとすれば、どの程度まで将来の世代のために、天然資源を保存する義務があるのだろうか」。哲学上の答えは多くあるが、できる限り広範囲な援助を与えることに、必ずしも賛成していない。しかし、カトリック教会には、原理は一つしかない。使用される物は、すべての人に平等に役立たなければならない。これが人類の連帯性の意味である。そしてこの連帯性は、将来

23) Th. A. Mappes & Z. E. Zembaty, *Social Ethics* (New York: McGraw Hill, 1977), p. 297.

のために天然資源を保存する義務を与えている。

第二の問題は、把握するのがもっと難しい。ユネスコの統計年鑑には、次のような統計が掲載されている。「文盲は貧困の鏡である。最も貧しい20か国における文盲は、80パーセント以上である」。「世界中で最も豊かな国を上から4分の1をとってみると、住民一人当りの教育費は、最も貧しい国を下から4分の1をとった場合の75倍である。それは、25対1という経済不均衡の3倍の割合になっている」。「1965年には、7億の文盲がいた。1975年には、8億になり、1980年には8億2千万に増加すると試算されている」²⁴⁾。

これらの数字は、いわゆる発展途上国が、どの方向に発展するのか、我々に疑問を抱かせる。そして、学者の中には、「反発展」という適宜な言葉を用いる人もいる。この深刻な問題を考えて、カトリック教会は、学習する機会をもっと与える、少なくとも基礎を作り出すために、財産のもっと平等な配分を主張する。必ずしも学習する能力がないからではなく、学費を払えないことが、学校を中退したり、あるいは、全然学校へ行かない理由であることが多い。

6. 回勅 “Populorum Progressio”

ローマ教皇レオ13世以来、教会の社会教義のおもな問題は、所有にみられる差異と、その影響についてであった。しかし、ローマ教皇ピオ12世までは、カトリック教会は、西ヨーロッパの工業国に主として関係していた。世界的規模で社会問題を最初に取り上げたのは、ローマ教皇ヨハネ23世であった²⁵⁾。この路線は、“Gaudium et Spes”で継続され、そしてローマ教皇パウロ6世の回勅 “Populorum Progressio”の中で再び強く世界に提

24) J. W. Botkin et al., *No Limits to Learning-A Report to the Club of Rome* (London: Pergamon Press, 1979), p. 64, p. 76.

25) “Mater et Magistra”

示された。「飢えに苦しむ人びとは、豊かさの中に生活している人びとに、しきりに、温かく援助を求める。教会は、この恐怖の叫びにおののき、すべての人に、同胞の思いやりを求める叫びに答えるよう要請する」²⁶⁾。

回勅は、進歩を単に経済的發展としてのみとらえていないことを強調しなければならない。進歩は、正当な生活条件の形成と、すべての人の幅広い人間的成長として考えられている。すなわち、各個人が、自分の能力を十分に発揮し、自分の個性を完全に進展させることができるような状況として考えられている。しかしながら、最小限の生活水準と、人間の尊厳を守る生活条件を与えることは、すべての人間の能力を進展させるのに必要な条件である。これらの必要条件が保証されていないところに住む人間はたくさんいるので、連帯性の原理は、金持の個人や、豊かな先進国に、貧しい人びとを助けるよう求める。この援助は、宗教的義務、そして平和の条件であると考えられている。平和は、武器の沈黙以上のものである。平和は、人間の尊厳と権利を認める“完全な人道主義”の秩序であり、世の中をもっと人間らしいものにすることができる。

この回勅の中では、実際に、問題の経済的側面に力点がおかれている²⁷⁾。パウロ6世は、彼の先輩たちが以前に工業国における自由資本主義の活動を批判したのと同じきびしさで、発展途上国における社会的不公平を批判した。パウロ6世は「物の所得についてばかりでなく、その使い方に関しての著しい不公平についての憤慨」について述べる。「ある国ぐにでは、少数の人びとが文明のすべての利益を享受し、他の人びとは貧しく、住む所もなく、自分自身の意志で、あるいは責任で行動する可能性もほとんどない。これらの人びとは、人間の尊厳を無視した生活や労働条件を体験していることが多い」²⁸⁾。

26) “*Populorum Progressio*” No. 3。

27) Fr. Klüber, *Katholische Gesellschaftslehre Geschichte und System* (Osnabrück : A. Fromm, 1968), pp. 573-590。

28) “*Populorum Progressio*” No. 9。

人間の尊厳を守ることが、この回勅の重要な目的の一つであった。従って、所有問題が、ここでは広く論じられる。まず第一に、パウロ6世は、すでに“*Gaudium et Spes*”で論じられた財産の使い方と財産の配分についての基本法と呼ばれるものについて新たに述べる。すなわち、地球の資源は、すべての人間に、彼の存在と、肉体的・精神的成長をはかるのに必要な手段を与えるためのものである。従って、すべての人は、生活の維持と、自分の存在の発展のために必要とするものを受ける権利を有するのである。そして、財産の配分は、個人の権利が守られるように行われなければならない。

この回勅の中では、私有権が基本的には望ましいことにはもはや触れていない。しかし、所有権と物の自由な交換は、共用の基本法則に従わなければならないと、明確に指摘している。パウロ6世は、聖アンブロシウスの「地球は全人類のためのものであり、金持だけのものではない」という言葉を引用して、地球の資源の社会的目的を強調している²⁹⁾。そしてパウロ6世は、他の人びとが必要さえ手に入らない時に、自分だけが豊かである権利は誰も持たないと明確に述べている。財産は、共通善の侵害に決して使われるべきではない。もし個人が合法的に獲得した権利と、地域社会が基本的に必要とするものの間に衝突が生じたら、関係する個人や団体を積極的に参加させて国家は解決の道を探らなければならない。

実際にはそれは、私有権は、すべての物を共用することに役に立つ限りにおいて、妥当であると考えられることを意味している。もしこれが保証されないならば、物やサービスのもっと良い配分形態と取って代えるべきである。たとえば民間企業の共有、法人の所有あるいは、初期のキリスト教の共同体で、まだ今日でも修道院で行われているような共有はこのような形態である。この回勅の中で教皇が、現存の私有権の制度をきびしく批

29) *Ibid.*, No. 23.

判していることは明白である。前の諸教皇の著作には普通加えられていた、私有権の制度を正当化する、あるいは保護する言葉はない。

パウロ6世は、全世界のことを考えている。この立場から、私有権が、他の配分形態よりも好ましいと明確に言うことはできなかった。たとえ私有権は、生まれながらの権利であると西欧社会の大部分で呼べたとしても、東ヨーロッパで同じことは言えないし、ましてアジア・アフリカ諸国でも言えない。回勅は、他の財産所有形式よりも私有財産制度の方が好ましいことは基本的にはないと、教父、スコラ哲学、そして後期スコラ哲学の議論を用いて、我々に再び保証している。それは、私有財産形態にせよ、共産主義的形態にせよ、資源の実際の使い方の形式を、歴史的具體化から、きっぱりと排除することは決してできないことを意味するであろう。各形態は、共通善の要求に支持されなければならない。従って、その形態が妥当であるか否かは、歴史的状況に依る。

そこで、財産についてのカトリック思想は私有財産制度は個性の発展や自由な社会秩序を形成するのに絶対必要な前提であるという陳述には、簡単に同意しえない。私有財産が、人間の自由と尊厳を守らなかった例が、歴史上には多くある。この理由で、ローマ教皇パウロ6世は、特に個性の発展に関して、私有財産制に疑念を抱いていた教父たちの教えに、ことさら言及する。彼らは、愛の共産主義による財産の配分を、むしろ好んでいる³⁰⁾。

さて、こうしたカトリック教会の公式な立場に鑑みて、財産の正当性を再考しなければならない富裕なカトリック信徒がたくさんいる。彼らは、自分たちに課せられている義務を、はっきり認識しなければならない。すべて合法的に獲得した財産は、個人が全く自由に処分して良いと、カトリック教会は教えていない。共通善に従って、財産が処分されているかどうか

30) Fr. Klüber, *op. cit.*, p. 580.

か自問しなければならない。もし共通善が、私有財産処分の一般的基礎でないならば、他の財産所有形態—共産主義に対してさえも—反対する議論はこの回勅にはないだろう。

物は本当は、共通の福祉に役立つためのものであるから、土地や他の財産の国有化が必要であるかもしれないと、ローマ教皇パウロ6世は、遠慮することなく述べている。というのは、有用な手段は、個人の勝手な処分や、利己的投機に任せられてはならないからである。そして、高額所得者が、自国の同胞に及ぼす損害をかえりみず、ただ自分の幸運を拡張するためだけに、自国の富の大部分を外国へ移すことを、決して許してはならない³¹⁾。国有化の場合には、適当な補償が考慮されなければならない。しかしその価値は、国有化された物と同じである必要はない。

財産について論述したあと、回勅では、自由資本主義について熟考している。この資本主義形態では、労働者の多数が悲惨な生活をしている一方で、工業と経済が、それ自体絶対的目標、あるいは、少数のために富と権力を蓄積する手段であると考えられている。この種の経済思想は、19世紀の工業化の中で、最も強かった。今日では、大部分の近代国家では、社会政策によって幾分弱められている。しかし、経済活動のしかたや、経済新聞雑誌には、いまだに根強く残っている。そして、その悪影響は、発展途上国において、また発展途上国と経済先進国との経済関係に主として現われている。

ローマ教皇パウロ6世は、自由資本主義に強く反対する。自由資本主義は、次の三つの点から成る。1) 利益が進歩の本当の原動力である、2) 競争が経済における最高の法則である、3) 生産手段の所有は、全く無制限の権利であり、社会的義務は伴わない³²⁾。パウロ6世は、これらの規則の下に動いている経済体系は、暴虐であると呼び、それに反対するカトリ

31) "Populorum Progressio" No. 24.

32) *Ibid.*, No. 26.

ック教会の要求を明確に提示している。すなわち、経済活動は、人びとのために役立つものでなければならず、人びとを圧制するものであってはならない。

パウロ 6 世は、このような暴政が実際に行われているところが世界の中にあることを知っている。教皇は、主として南アメリカを念頭においている。そして教皇は、「もし全人口が日常必需品に事欠くのであれば……それは人間の尊厳を傷めることであるので、力によってこのような不公平を取り除こうとの誘惑は大きい」³³⁾。ここで教皇は、積極的に抵抗する場合に順守しなければならないカトリック教会の原理を付け加えておられる。力によるものであっても、積極的な抵抗は、専制君主的な政府が、長期間にわたって、明らかに基本的人権を侵害している場合に許される。しかし、この力の行使によって生じる損害が、戦う悪よりも大きくないかどうか考慮しなければならない³⁴⁾。

結 論

回勅は普通、カトリック教義一般についての簡単な声明文である。従って、短い原稿の意味を明確にするために、以前の資料から引用するのが望ましい。実際我々が見たように、ローマ教皇パウロ 6 世の教義と議論は、カトリック教会の古い伝統を基礎としていた。従って、教皇が我々に、私有権が財産所有の理想ではないという、財産についての教えを残している。私有権の制度は歴史的事実であり、その破壊的傾向から社会秩序を守るために、強い倫理的、政治的力によって統制されなければならない。

(筆者は上智大学社会正義研究所員、文学部社会福祉学科講師)

33) *Ibid.*, No. 30.

34) Fr. Klüber, *op. cit.*, p. 580.

新回勅「労働」に基づく経営理念

山 田 経 三

目 次

序	Ⅲ 労働者の連帯
Ⅰ 労働問題の歴史的考察	Ⅳ 労働の価値
(1) 「経済主義」「物質主義」の批判	Ⅴ 人間尊重の経営理念
(2) 資本主義、社会主義の批判	(1) 組織理論の根本問題
Ⅱ 現代社会の分析	(2) 海外進出企業の諸問題
(1) 新回勅による分析と展望	(3) 日本企業の経営理念の変革
(2) 新回勅による展望と逆の現実	Ⅵ 日本企業経営の課題

序

教皇ヨハネ・パウロ2世の新回勅「労働について」は、教皇レオ13世の歴史的回勅「労働者の境遇」の90周年を記念して1981年9月15日に発布されたものである。

あらゆる生活の場で経済第一主義、物質主義の風潮にある現代、人間の労働が現代社会においてもつ意味について、改めてカトリック教会の考え方を明らかにしたものとして重要な回勅である。

世界は平和を希求し、人間尊重を志向すると言われながらも、現実にはそれに反して、核兵器、軍事的緊張の拡大、東西問題、南北問題の拡大、人権の抑圧、社会的不正の増大、政治・社会・経済倫理の退廃などを生み出し、社会は病んでいる。こうした状況にあって、日本が国際社会に貢献できるのは、決して軍事大国の再現でもなければ、経済大国の拡大でもな

い。

ところがアジア、世界における日本は輸出入において「物」の国際性は誇りながらも、精神面においては閉鎖的なままで、「心」の非国際性は旧態依然たるものである。

現代の組織社会の要請にこたえ、日本的経営のもつ短所は是正し、すぐれた内容は国際的視点から再構築し、人間性が志向される経営のありかたを国際社会に提示すること、そして世界の平和に貢献することが現代世界における日本の役割であろう。

新回勅発布の機会に、その内容をふまえた経営理念を構築することが小論のねらいである。「企業経営者が利潤追求に払った創意と不屈の努力によって数多くの科学的、技術的夢が現実のもの、それもごくありふれたものとなった。こうした手腕を企業の人間的側面に向けるならば、人間尊重に基づく『良き社会』に一步近づけることは、今や火を見るより明らか」¹⁾だからである。

I 労働問題の歴史的考察

(1) 「経済主義」「物質主義」の批判

90年前の回勅「労働者の境遇」から50年前の回勅「社会秩序の再建」(教皇ピオ11世)まで、カトリック教会の教導職はおもに各国内の「労働問題」の解決に焦点をしばってきた。それ以降は世界全体にその地平が広がった。先進諸国と他の諸国との貧富の格差は広がるばかりである。過去には「階級」の問題が強調されたが、現在では「世界」の問題が強調されている。不平等と不正の問題は階級の次元だけでなく、世界の次元で取り上げられるようになった。その結果、現代世界において正義の達成をめざす取り組みは階級だけでなく、世界の次元のことになっている。

1) ダグラス・マグラージャー著、高橋達男訳『リーダーシップ』産業能率大学短期大学出版部、1967年、p. 25。

工業化の初期から現代にいたるまで教会は物質、経済優先の思想に反対し続けてきた。それは急速な展開を示した一方的な物質文明の発展段階において、労働の主体である人間が生産手段の一歯車として扱われ、無視され続けてきたからである。「人間の労働の尊厳が無視されるという資本主義初期の誤りがくり返されてはならない」と回勅は訴えている²⁾。

現代における労働と資本の対立について、回勅は次のように述べている。「労働者は企業家の望みのままに働かされ、最低コストで最大利潤という原則に沿って、労働者には最低の賃金が支払われる事実で労資の対立は端を発している。……社会・経済的階級闘争として解釈されるこの対立は、資本主義イデオロギーとして理解される自由主義と、科学的社会主義・共産主義として理解されるマルクス主義の間のイデオロギー的対立と表現される。労資間の対立はイデオロギー次元だけでなく、むしろ政治次元で扱われる体制的な階級闘争に変えられた。

歴史的にみれば、教会が教え続けてきた原則『労働は資本に優先する』とは逆のことが現実には行われている。労働と生産両生産要素は二つの非人格的力として、経済学的展望のもとに並置されている。これを、人間の労働を単に経済目的だけに基づいて考える『経済主義』『物質主義』の誤りと呼ぶことができる。つまり経済主義は物質的なものを最優先し、精神的、人格的なものを物質的な現実に従属させる根拠を提示する。これは物質主義理論から導き出された前提ではなく、物質の魅力に魅せられて物質を高く評価するという前提に立つ実践的物質主義である。労資間の対立は、18世紀の哲学や経済理論でなく、当時の経済、社会的実践に始まった。

人格が物質に、人間の労働が資本に優先するという確信に基づいた変革が、理論的にも実践的にもなされるとき、はじめてこの誤りは根本的に克

2) 教皇ヨハネ・パウロ2世回勅『労働について』Ⅱ-7。

服される」³⁾。

(2) 資本主義・社会主義の批判

諸回勅は私的所有の権利を主張している。現在も教会の教説となっているこの原則は、自由主義とその思想に鼓舞された政治体制によって実践されている資本主義とは、所有の権利についての理解で異なる。教説は所有権を絶対的なものとはしていない。富はすべての人のためのものであるから、私的所有の権利は共同の使用の権利に従属するものである。生産手段を労働に反して所有することも、所有のための所有も許されない。所有は労働に奉仕する限り正当化される。労働に奉仕することによってはじめて、富の共同使用の権利という本質的な原則が守られるからである。

この原則はマルクス主義によって宣言され、種々の国で実践されている共産主義のプログラムとは根本的に異なる。

「資本を私的所有者の手から奪いとり、生産手段の私的所有を除外するだけで、労資対立の問題は解決されない。それによって資本が特定の集団による所有や別の社会化された集団の管理と支配のもとに移されただけのことである。国家全体ないし地方単位で社会の実権を握る者が資本を管理する場合、生産手段を持たないにしても、それはやはり特定集団の所有である。この集団は労働の優先の視点から、権威を正しく遂行するかもしれない。その権威を乱用し、資本の管理の独占を主張し、基本的人権を侵害するかもしれない。このように生産手段を共産主義による国家所有に変えるだけでは、所有の社会化にすぎず何の解決にもなっていない。

労働の場において各労働者が自らを他の労働者と共に働いている仕事場の一所有者とみなしうる権利を完全に持っている場合にのみ、はじめて真の意味の『社会化』と呼ぶことができる」⁴⁾。

3) 前掲書 III-11, 13。

4) 同 上 III-14。

Ⅱ 現代社会の分析

(1) 新回勅による分析と展望

この90年間、先進諸国における政治、経済、社会情勢の大きな変化、とくに技術の飛躍的進歩がもたらした「情報化、管理化社会」という状況の中で人間の労働がどのような問題に直面しているか、回勅は次のように述べている。「……この新しい状況は前世紀の産業革命に劣らず、労働と生産の世界に影響をもたらす。それには次のような諸要因がある。オートメーションの広汎な導入。エネルギーと資源の価格の高騰。天然の遺産の限界と自然環境を破壊する公害汚染の進行とそれに対する意識化・反対運動。幾世紀も抑圧されてきた低開発諸国民の国際政治舞台への登場。これらの諸要因は現代の経済と労働の配分をめぐる経済、社会構造の再編成と調整を求める。その結果、幾百万の熟練労働者の一時的失業や再訓練の必要をもたらすだろう。先進国によっては生産の物質的向上の減退をもたらすだろう。しかし不当な貧困のうちに今日生きている幾百万もの人びとには苦難の緩和と希望をもたらすことになるだろう。こうした激変の社会にあって、働く人びとの尊厳と権利を擁護し、それらの侵害に対しては抗議し、上述の社会変化が人間と社会にとって真の進歩となるよう保証することを助けることがカトリック教会の役割である」⁵⁾。

(2) 新回勅による展望と逆の現実

社会の変化に対する回勅のこうした積極的なとらえ方とは裏腹に、現実の世界情勢はいっそう悪化の道をたどっている。欧米諸国は数次の石油ショックを契機に慢性的インフレ、失業者の急激な増大、ストライキの多発などに悩んでいる。石油危機を巧みに克服し、エレクトロニクス革命の先頭をきっているわが国では、文化の貧困と社会、政治倫理の低下が目立ち、

5) 前掲書 I-1。

青少年の非行化、家庭内・校内暴力の異常な多発といった物質主義の行きつく果てを思わせる現象が発生している。

先進諸国内部だけでなく、発展途上諸国内の軍事化による人権抑圧、「開発」に伴う貧富の格差の増大、先進国への従属の拡大など「南北問題」はいっそう激しさを増している。回勅はそれを次のように述べている。

「世界を通じて全人類家族を見るとき、一方ではおびただしい天然資源が使われなくて残っており、他方では無数の人びとが失業し、飢えて苦しんでいる。これは国内、国際各レベルで労働と雇用の組織化において、まさに最も重大な点において間違っていることを示している」⁶⁾。

農民は苛酷な肉体労働に疲れはて、社会の理解のなさに極度の疎外感を味わわれ、結果的には多くの農民が農村を離れ、都市に集中し、さらに非人間的な生活の苦汁を味わうという悲劇が起こっている。発展途上諸国では幾百万もの人びとが小作人として他人の土地を耕やすことを強要され、一筆の土地さえも自分のものとする希望もないままに、大地主から搾取されている。老齢、病気、失業などの場合にそなえた農民自身と家族のための法的保護は全くない。苛酷な肉体労働に対する報酬は全く悲惨なものである。巨大な耕作可能地が地主によって放置されている。「先進諸国でさえも農民は自らの働きについて決定に参加することが拒否され、社会・文化・経済的發展を求めて自由に組織化する権利も拒否され、農民の働く権利は著しく侵害されている」⁷⁾。

「よりよい生活条件と仕事を求めて国外に移住する人びとが搾取、差別されてはならない。労働の価値は国籍、宗教、人種の違いに関係なく、同じ基準ではかれなければならない」⁸⁾。

6) 前掲書 IV-18。

7) 同 上 IV-21。

8) 同 上 IV-23。

「心身障害者はあらゆる権利を持った主体として、社会生活に参加できるよう助けられなければならない。もし社会と労働の生活に、完璧な機能をそなえた者だけを受け入れるなら、それは最も非人間的なことで、私たちの共通の人間性を否定するものである。そのようなことは健康な強者の、病気の弱者に対する極めて重大な差別である。こうした状況においても、労働はその主体である人間の尊厳に従属すべきであって、決して経済的利益に従属してはならない」⁹⁾。

Ⅲ 労働者の連帯

資本主義体制は労働者の権利を十分に配慮せず、人間の労働を単なる生産手段とみなし、資本を生産の目的とみなして重視し続けてきた。こうした状況にあって、労働の主体としての人間がますます隷属化され、賃金、労働条件など前代未聞の搾取に対して抵抗するものが労働者の連帯にほかならない。

政治体制のいかんを問わず、労働者の権利を抑圧するこうした状況を批判し、是正するために、「国内・国家間・世界の各次元で社会正義を推進するために労働者同士の連帯そして労働者との連帯が重要である。労働の主体が社会的に奴隷化し、労働者の搾取が増大し、貧困と飢餓が拡大するときには、つねに労働者の連帯がなければならない。

カトリック教会はこの連帯にすべてをかける。これこそ教会の使命、奉仕、キリストへの忠誠の証しだからである。この教会と労働者との連帯によって教会は真に『貧しい人の教会』となりうる」¹⁰⁾。

しかし、現実の社会状況は新回勅がかかげるものとは逆であることはすでに述べた通りであり、新回勅自体も認めている。

資本主義体制において、社会正義を実現するための教会と労働者との連

9) 前掲書 IV-22。

10) 同上 II-8。

帯とは、具体的にはどのようにして実現されるのか。上述のようなキリスト教社会教説に基づく社会、資本主義、社会主義をこえた社会の未来像についてはまだ積極的に提示されてはいない。

教会は現代社会と共に生き、労働者との連帯にすべてをかけると言いながら、実際にはまだ現代社会の一步外に位置し、労働者からは遠い存在であるのが現状である。教会は今こそ現代社会の真只中におり立ち、非人間化、管理化、軍事化からの解放をめざす労働者の苦闘の戦列に参加しなければならない。

ポーランドのカトリック教会と労働者が今、社会主義体制の中で示している「連帯」の試練と闘いが、資本主義体制の中でも求められている時である¹¹⁾。

Ⅳ 労働の価値

そこでまず、新回勅で示されている「労働」の価値についての内容と、労働の主体である人間の尊厳の擁護と促進についての論述を見たのち、それに基づく経営理念についてバーナードの『経営者の役割』を基盤に試論を提示してみたい。

労働には人間性特有のしるしがついている。それは人間の共同体の中で活動する人格のしるしであり、このしるしが労働の内面的特徴を決定づけ、労働の本性を構成している。人間は宇宙の中で、神の似姿として造られ、地を治めるようにとそこにおかれている。人間だけが働くことができ、働くことで自分の存在を満す。労働は人間にとって根本的なものであり、労働こそすべての社会問題の鍵である。人間は自らのことを決定し、自己実現を果たしていく。人間は人格として労働の主体であり、労働の技術面とは独立して主体的に労働に関わる。労働は人間性についての認識を深め、

11) 酒井新二「論壇」(『カトリック新聞』1981年11月15日付) 参照。

自己実現を果たしていくことに仕える。労働の価値を決めるものは労働の種類ではなく、労働している人格そのものである。人間が労働のためにあるのではなく、労働が人間のためにある。労働を通して人間は成長する。ここに労働の人格的価値がある。

労働はまた家庭生活の基盤でもある。労働を通して獲得しうる生存の条件を家庭は必要とするからである。労働はまた国家の基礎でもある。労働を通して人間は、社会の一員であるという連帯意識を強め、他の人びとと共に共通善を築きあげ、発展させていこうという貢献意欲を強める。労働は人間が全人類の遺産に参加し、貢献するように奉仕する¹²⁾。

ところが現代では、人間の労働によって生産される技術的手段が主役を演じている。教会が教え続けてきた原則「労働は資本に優先する」さらに人間の歴史の経験から導き出される真理「生産過程において労働が本質的であり、生産手段の総体である資本は単なる手段にすぎない」という原則が確認されねばならない。

あらゆる生産手段は人間が経験と知性を動員して発展させてきたものである。労働のために供されるすべてのものは、それ自体がどれほどすぐれた生産手段であっても、人間の労働に従属すべき単なる手段にすぎない。

人間が生産手段を使って労働するとき、その成果が自分と他の人びとに使われることを望む。その労働過程の中で責任と創造性を分かち合う者としての主体的な役割を演ずることを望む。労働の正当な報酬だけでなく、生産過程において自分のために働いているという実感を得たいと望む。このことから労働の義務と同時に、労働者の権利が生じる¹³⁾。

社会主義体制下ではこの権利をかえって侵害してしまうものだと批判して、回勅は次のように述べている。

「ところが極端なまでに官僚制的中央集権体制のもとでは、この自覚は

12) ヨハネ・パウロ 2 世 前掲書 I-1～II-9 参照。

13) 同上 III-12, 15 参照。

消されてしまう。こうした体制は労働者をただ上層部から動かされる巨大な機械の一歯車にすぎないと感じさせる。また労働者が自らの発意で働く労働の主体であることを味わうよりも、単なる生産手段にすぎないと感じさせる。

人間の労働が経済だけでなく、とくに人格の価値に関わるものであることが十分に認識され、人格的価値が十分に尊敬されるときはじめて、経済制度自体も生産過程も価値があることを、教会はつねに力説している」¹⁴⁾。

V 人間尊重の経営理念

(1) 組織理論の根本問題

C・I・バーナードは上述の個人主義と全体主義について次のように述べている。「相互に闘争するのみでなく、認識されていない限界に対しても戦う、全くかけはなれた二つの信念がある。その一つは個人の自由に焦点を合わせ、個人を社会的宇宙の中心とするものである。……極端な自由、理想的な個人主義、自己決定を無批判的に説くから、この無制限な独断論によれば……公式的協働はすべて阻害されるだろう。いまひとつの信念に立つ人は広範な集団編成、際限のない従属、完全な調整を無批判的に擁護するので、かれらの無制限な独断論では……個人の発展はすべて抑えられるのである」¹⁵⁾。

「……マルクス主義の論争などのなかにではなく、協働における人間行動、組織の社会的制約、および管理者の本質的任務のなかに論点を見出した」¹⁶⁾ バーナードは、社会・経済体制、国、組織の相違を超えて人類にとって普遍的財産とも言うべき経営組織論をまとめた。「……協働の拡大と

14) 前掲書 Ⅲ-15。

15) C・I・バーナード著、田杉競、山本安次郎、飯野春樹訳『経営者の役割』ダイヤモンド社、1956年、pp.307-308。

16) 前掲書 p.308。

個人の発展は相互依存的な現実であり、それらの間の適切なバランスが人類の福祉を向上する必要条件であると信じる」¹⁷⁾ という信念の上に、さらにこれを発展させていく必要がある。

(2) 海外進出企業の諸問題

量的にはますます増大するわが国海外進出企業の質的な面はどうであろうか。現代は世界平和と民生安定を求めて、自由競争裏における新しい理念「共存共栄」の確立とその実現が求められる時代である。とくにアジアの中の日本を考えると、日本企業の国際社会におよぼす影響の大きさを見逃すわけにはいかない。広い視野と長期的視点に立ってみる場合、発展途上国に進出する企業にとって、相手国の発展と国民福祉の向上に寄与するか否かが、根本的な存続理由となる。

ところがわが国の企業は、進出に際し金融面での制約を受けるのが限度で、あとは野放しというのが現状である。こうした状況にあって、はたして海外進出企業の進出先における実態はどのようなものであろうか。その経済活動を受けている現地の人びとの反応は、どのようなものであろうか。

1973年以来、上記の問題についてタイで調査し、1975年から今日にいたるまで継続している調査結果をふまえて、日本企業の経営問題について考察してみたい。

アジア諸国をはじめとする国際的舞台は、日本企業の体質そのものを、ありのままに映し出す鏡と言えよう。仮りに企業側に、鏡自体がこわれていると決めつけたり、鏡の向きを変えたり、鏡に覆いをしたり、破壊したりすることがあってはならない。

受入国側の要請、批判を総合するならば、次の諸点にまとめることができる。現地産業の発展・育成の推進、現地合弁企業の促進、現地社会との

17) 前掲書 p.309。

協調、現地への再投資、現地人の雇用・登用教育の推進、現地文化・伝統・習慣の尊重である。要するに「現地化」促進に尽きる。これらはいずれも経済5団体による「発展途上国に対する投資行動の指針」の内容にみられるものである¹⁸⁾。

この指針はアジア諸国の日本企業への批判、要請や増大する摩擦に対する解決策として打ち出されたものである。とくに発展途上国に対する海外投資は受入国に長期的に受け入れられ、その国の開発と国民福祉の向上に資するものとして進めなければならない。すなわち、進出企業は受入国国民の立場に立って、その国の企業活動をめぐる諸条件、慣習等を尊重すると同時に、投資にあたっては社会的責任に基づく経営理念の育成、定着に努めることが肝要である¹⁹⁾。

どのようにすれば海外不適應を克服できるか。海外進出企業の国際的責任を果たすべき指針や憲章自体は、それが効果的に実現されない限り価値はない。それらが単に「修身の教科書」²⁰⁾として終わらないためには、日本企業にどのような変革が要求されるのか。

この考察に入る前に、日本企業の海外進出動機を検討する必要がある。受入国の増大する不満の原因に、日本企業の進出動機が直接に関係するからである。紙面の関係上、詳細な説明は割愛し、項目的にあげるならば、企業が東南アジアへ進出する動機はおもに市場の確保、低賃金労働力の確保、公害対策、政治的安定、受入国側が提供する恩恵である²¹⁾。

18) 指針の内容については割愛する。おもな指針としては国際商業会議所による「国際投資に対する指針」、太平洋経済委員会による「国際投資に関する太平洋地域憲章」、日本、東京商工会議所による「国際投資憲章について」、日本貿易会による「海外投資行動基準」などがある。(海外技術者研修協会発行『研修』1973年8月参照)

19) 経済5団体による「発展途上国に対する投資行動の指針」1973年6月1日参照。

20) 『日本経済新聞』1973年6月5日付参照。

21) 日本シオス協会監修『日本企業の海外進出』東洋経済新報社、1973年参照。

ここで根本的な疑問が生じてくる。前述の「現地化促進」の指針とこういった進出動機とが、どのようにして両立するのかという問題である。現地で要求される企業態度、経営理念を反映した「指針」と各企業の本音である進出動機との間にはジレンマがある。両者間に必然的に横たわるこの葛藤がどのようにして解決されるのかという問題である。指針の内容が企業にとって根本的な進出動機の変革に迫るものならば、指針の実現は不可能である。他方、企業の進出動機の変革に迫らない程度の指針であるならば、受入国の不満を根本的に解消することは不可能である。指針の核心をなす「企業の発展と受入国の発展とが両立する方向」とはいったい何か、というのが根本的な疑問である。換言すれば、受入国の発展と進出企業の発展とは、どのようにすれば両立しうるのか、という問題である。これがまさにどうすれば海外不適応、貿易摩擦を克服できるか、という具体的問題である。

この問題をいまずこし掘り下げる必要があろう。もしも対応策の内容が進出企業の現地での行動を自粛したり、出向社員の研修だけにとどまるならば、進出先の要求との間におこる摩擦を解消することはできない。日本企業の本社の体質そのものの変革なしには、長期的視点に立った真の解決はありえない。

経済5団体による指針の基本的姿勢を押し進めるならば、「現地化促進」とは現地の日系企業が、本社との関係を完全に切断することである。ところで、海外進出企業にとっては、現地での剰余価値を本社で自由に処分できてはじめて、その進出動機は満たされるのである²²⁾。それならば、本社にとって犠牲損失となることを知りながら、利潤追求、効率・合理性第一の企業、過当競争の渦中にある企業が「現地化促進」をはたして自主的に遂行するであろうか。

22) 宮崎義一「現代の日本企業を考える」(『朝日ジャーナル』1973年10月16日号)参照。

指針と関連して、いまひとつの疑問が残る。アジア諸国にとっては、その国家発展の必須条件として経済的自主独立、自立更生があるのは当然である。すなわち国の福祉、発展は究極的には自国によってなされるもので、外国の援助に依存するものではない。それでは指針の骨子をなしている理念、すなわち日本からの海外援助、いわゆる「開発援助・経済協力」によって、相手国の福祉向上に資することが、どのような方法で可能なのだろうか。換言すれば、発展途上国の福祉向上と日本の海外企業活動、援助投資がどのようにして両立しうるのか、という問題である。

日本からのいわゆる「開発援助・経済協力」の実態はどうであるのか。その真相は？ 受入国の福祉向上に真に寄与しているのか。あるいは逆に、受入国側国民に、いっそうの犠牲を強いることになっているのではないのか。紙面の関係上、その詳細な内容については割愛せざるをえないが、前に述べた調査（1975年以来現在にいたる）の結果は、この疑問に対する解答として、後者であるという結論が出ている²³⁾。

(3) 日本企業の経営理念の変革

それでは、どのようにすればわが国進出企業の海外での摩擦を解決し、海外不適応を克服できるだろうか。

企業は世論の圧力など外圧によってしか、克服の道を見出せないのではなく、自律的、自主的に価値転換ができると信じたい。その意味で、結びとして、経営理念変革の内容を提示したい。

まず企業経営の戦略基礎にあるべき経営理念そのものを、徹底的につくり直すことである。企業が公益に反さない利益を追求し、公益をも促進す

23) 拙稿「わが国企業の国際的責任」（『上智経済論集』1974年3月号）
同上「“結びの海”をめざして」（『世界』1976年5月号）
同上「日本企業の進出とアジアの民衆」（『朝日ジャーナル』1978年5月12日号）
同上「企業行動と住民運動の組織論的展開」（『上智経済論集』1979年5月号）
など参照。

る利益を追求することである。企業が、利益と公益とが一致する行動を自律的にとるために、そのような企業行動の精神的原動力となる経営理念を確立し、それを実現するための、管理および組織を開発することである²⁴⁾。

いまや、企業をめぐる環境変動要因には、種々の新たな動きがある。産業公害をめぐる住民運動、食品公害をめぐる消費者運動等々と無視しえない動きを、企業がどのような姿勢で受けとめるかが、国内的にも、国際的にも問われている。

それらをただ、できれば避けて通りたいという、マイナス要因として受けとめるか、あるいは環境変化の本質的なものとして、積極的に受けとめるかが問われている。企業が、もしそこから新しい要請を先取りして、経営理念変革のための新しい素材を取り出し、積極的に適応していくならば、企業は自律的に海外不適応を克服し、進出相手国との間の摩擦を解決する道を見出すであろう。

現代ではもはや、企業を単に経済的私的利益の次元のみに限って考えることは許されない。企業の社会的責任とは、企業を社会のいくつかのシステムの中のひとつのサブシステムとして位置づけ、ほかのシステムとの調和を図っていくものとしてとらえることである。

とくに海外進出企業の場合には、国内における従来どおりの閉鎖体系のまま、その延長線上で、進出先の諸問題に対処するだけでは、進出先国民との間の摩擦はいっそう増大していく。国際的な環境変動要因を積極的に取り入れて、抜本的に問題解決にあたらなければならない。

VI 日本企業経営の課題

海外進出企業をめぐる今までの考察は、「資本に対する労働の優位」という新回勅の根本原則に基づいたものである。すなわち、「ひと」（人格）

24) 小林順治「企業の社会的責任の概念規定と本質的条件」(『上智経済論集』1977年11月号, p. 27)。

が“もの”(物質、財、資本)に優先する」という人格主義の哲学にてらして「労働は資本に優先する」という原則を解釈してきた。この原則からの結論は、労働をその主体である人格から切離して、商品とみなしてはならない。労働はあくまでも人格の主體的な営みであり、それだからこそ、どれほどすぐれた超近代的な生産手段、設備、プラントであろうとも、その集成としての資本に労働は優越するということである。

しかも、労働が資本に優るといふこの原則は、社会道德の要請にほかならないとまで、回勅は断言している。そして資本が労働に奉仕すべきであって、労働が資本に従属するようなことがあってはならないと主張している。すなわち、どこまでも人間の尊厳が実現されるような仕方、資本と労働の対立を克服すべきであると回勅は説いている。

この小論においては、回勅が説いている「労働と資本」の間の原則を、資本が発展途上国に移転すること、つまり日本企業がアジア諸国に進出することによって、甚大な影響、弊害をこうむっている進出先の国民と日本企業の資本との間の関係に適用したのである。

それは、「かつて90年前の回勅『レールム・ノパールム(労働者の境遇)』以後の労働・社会回勅の歴史において認められる顕著な変化」という回勅の指摘に基づくものである。すなわち、当初「階級」問題に置かれていた比重がしだいに「世界」問題へと移行してきた、ということである。経済的不正や社会的不平等は、単に階級という立場においてだけでなく、広く世界という場において問題となっている。

この回勅は明らかに社会・労働問題を世界的視野でとらえることに力を注いでいる。すなわち、現代世界において各国家の経済は相互に密接に結びつき、相互依存関係を深めていることを回勅は指摘すると同時に、先進国と発展途上国との間の格差の増大が深刻な危機的状况をつくりだしていることを警告している²⁵⁾。

25) 稲垣良典『『労働』回勅発表の意義』(『カトリック新聞』1981年12月20日付)。

小論で今まで論じてきた内容は、いわゆる「開発援助、経済協力」という大義名分のもとでなされる日本企業の海外進出が、先進国と発展途上国の間の格差、発展途上国内の貧富の格差、さらには先進国日本と発展途上国アジア隣国との間の支配従属関係をいっそう増大させているという問題の指摘である。

こうした国際環境、つまり日本とアジア諸国との間に横たわる深刻な南北問題の渦中であって、いま進出企業の経営者に要求されることは、企業を開放体系として、進出先の地域社会の中に位置させ、「人間尊重」に基づくさまざまな声、意見、批判、カウンタベリング・パワー、チェック機能を積極的に受けとめ、種々の努力、均衡力の実質化した参加のもとに、長期展望と広い視野をもって、経営理念を確立することである²⁶⁾。今こそ、冒頭に述べた通り、日本的経営のもつ長短所を、国際的視点から見直し、再構築し、人間尊重に基づく経営のありかたを国際社会に提示し、とくに発展途上国の真の発展に貢献すべきときである。

このように、人権の確立と擁護、社会正義の推進が世界平和の実現のための第一条件であるという新回勅の教えと、国際環境の正しい理解のもとに、経営理念の変革と、それを実現するための管理者および管理組織の開発が成されるならば、「労働（人格）は資本（物）に優る」という新回勅の実現も可能となるであろう。

（筆者は上智大学社会正義研究所員、経済学部経営学科助教授）

26) 教皇パウロ 6 世は回勅で次のように述べている。

「現代、科学・技術分野でのいっそうの進歩のために、多数の技術者が要求されている。しかしそれ以上に、いっそう多くの深い思索を行なう英知ある人びと、人間の本質をきわめる理念・哲学に立脚した人びとが、そのリーダー的立場において必要とされる。現代人に愛と友情、祈りと協働の喜び、優れた価値を悟らせ、その能力と個性を存分に開発させるような新しいヒューマニズムを探求する人びとの台頭が期待されてやまない」。

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

Patricia Mische

At this point in word history there is no more important area for exploration and growth than global spirituality. For we are entering a new phase of humanity's development. We have new powers never even imagined, much less experienced by our ancestors. We can create new life forms in test tubes. We can alter the DNA-the delicate genetic coding that has developed through millions of years of natural selection. We can change the earth's climactic conditions and temperature through over-consumption of fossil fuels,¹⁾ deforestation, nuclear testing or weather tampering. We can choose the extinction or continued existence of over 600,000 plant and animal species whose survival is now threatened by human activities.²⁾ We can destroy all life on earth through our weapons of mass destruction.³⁾

1) For more information on the carbon dioxide threat, see *Global 2000: Report to the President of the U. S.* (Pergamon Press, 1980). The over-consumption of fossil fuels produces excessive amounts of carbon dioxide. If this continues and we continue [deforestation trends so that the carbon dioxide is not held in balance through the production of sufficient oxygen, we can expect a global greenhouse effect. The earth's temperature would increase and produce a melting of polar ice caps and climactic changes.

2) *Ibid.*

3) Excellent documentation on the dangers from the nuclear arms race can be found in the following sources :

We have become as gods with the power to create and destroy life. But we have not developed the inner wisdom to manage these new powers in life-preserving ways. There has been a dangerous lag in our development—a lag that is both spiritual and systemic.

We are entering a new and dangerous phase in human history and in the earth's evolution. We can consciously shape the future evolution of the planet. A new maturity is demanded of us. We must become wiser than we've ever been before, for the world is far more complex than our old visions, analyses and structures can accommodate. We must become more conscious and more holistically spiritual than ever before. Our awareness and our spirituality must be attuned to the sacred presence in all life—to the inner workings of the Spirit in the earth's processes—lest we destroy our own lifeline out of arrogance.

We must be spiritually strong and mature enough to go through psychic death-dying to old structures and worldviews and divisions that can no longer meet the new imperatives of survival and humanization. And we must be spiritually young and creative enough to dream new dreams, conceive new myths, birth new social systems and nurture new unities and cooperation.

Spirituality as the term is used here does not mean pious practices and rituals. It is not the surface facade of religiosity. It

Center for Defense Information, Washington, D. C.
Physicians for Social Responsibility
Atomic Bomb Casualty Commission
Ruth Suvad, *World Military and Social Expenditures*

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

does not mean genuflecting, bowing, sitting in the lotus position, lighting vigil lights or visiting shrines, (although such practices may have symbolic value.) Authentic spirituality is awakening awareness and conscious attunement to the sacred source of life. At the deepest part of every and all being is the sacred. Spirituality is the process of ordering our life in intimate communion with this sacred center and source.

Spirituality is not static. It is not a finished state we ever finally achieve and then hold onto. It is a process. It is a sacred journey.

It is a sacred journey we each are called to make. In a certain sense we each make this journey alone. No one else can make it for us. But in another sense we make this journey together, in communion with others. The whole planet with all its life forms and billions of people—indeed the whole cosmos is on a collective journey. This is true in a physical sense as we hurl through space. This is also true in a spiritual sense. There is a sacred source at our collective center from which all our separate journeys originate and in which we all find life and direction.

There is a flow between this collective earth journey and our personal journeys. They cannot be separated. We are all part of an ongoing cosmogenesis. The whole cosmos is in a process of Becoming. The earth is in a process of Becoming. So are all its inhabitants—the trees, water, flowers, crickets, humming birds, humans. We are all Becoming. We are all developing worlds that are part of the larger developing world community in a developing universe.

A Global Age

True spirituality-the authentic religious journey-can never be an escape from life's problems. God, the sacred center at the source of all authentic spiritual journeys, must be met in the midst of life, not in escape from life. Today we live in a *global* age-an age of planetary exploration and communications and new global interdependencies. Our spiritual journey-our search for life in God-must be worked out now in a global context, in the midst global crises and global community. Our spirituality must be a global spirituality.

The failure to find an adequate, creative response to the critical global issues before us as we approach the year 2000 is not due primarily to a lack of knowledge that we have critical problems. Most people-even 10-year olds in primary school-know the world is in trouble and can name the most critical issues. Of the young people I have interviewed with open-ended questions about their views on the future, over 80 percent believe a nuclear war is inevitable before the year 2000. Most believe worldwide hunger, pollution, unemployment, inflation and economic problems will be worse. They feel powerless before the complexity and global scale of these problems. They feel there are no solutions and they despair. Many question whether there is going to be a world future. And in light of that ultimate doubt about species survival, they question whether their personal lives have any meaning.⁴⁾ This despair

4) Elsewhere I have written more on the despair syndrome among young people. See : Patricia Mische, "Young People and SALT II," *America* (Dec.

about the world future is not just prevalent among young people. Adults are experiencing it also.⁵⁾

Strength/Stress Equation

What seems to be missing for many people is not the knowledge that the world has problems, but the inner, spiritual and psychic strength to cope with the severity, complexity and global scale of these problems. Also missing is the strength of a compelling image of positive alternatives to provide hope and initiative. There is a strength/stress equation related to finding an adequate response to crises.⁶⁾ The stress on the human system (whether inner psychic system or social systems) must not exceed the capacity of corresponding strengths to respond. Put conversely, we need to develop strengths (both inner, psychic and spiritual strengths and external institutional strengths) equal to the strain imposed by the problems and dangers of our new, interdependent world.

A Spiritual Vacuum in Modern Development

Lacking an adequate inner or spiritual strength to cope or

1979) and Patricia Mische, "The Nuclear Threat and Young People," *The Parents Guide to Teenagers*, ed. by Leonard H. Gross, (New York : Mac-Millan, 1981).

5) For example, see the study by Charles E. Sherman and Jeanne B. Morris, "Twenty-Year Countdown : Attitudes of Teachers about the Future." (Report of Study done of public school teachers in the State of Illinois in 1979).

6) In his book *Stable Peace*, Kenneth Boulding discusses the need for a strength/stress equation to maintain a stable peace. I am applying the equation here to the personal, psycho-spiritual realm.

respond creatively to critical world problems, people easily become burned out, their energy and vitality consumed by modern pressures and by a fragmentation and multiplicity of concerns. Cut off from the spiritual roots of past traditional societies and not having grown new spiritual roots in the new global age we have entered, many experience a tremendous spiritual void.

This may be one reason why in a recent poll millions of Japanese identified the number one problem of Japan not as environment pollution but as *spiritual aridity*. It may be also why over 500 new religions have been started in Japan since World War II.

It may also explain why so many people in North America and Europe have been seeking enlightenment from Eastern gurus, joining charismatic communities, fundamentalist groups or new religions or para-religions. Having found that material success and progress do not bring fulfillment or answer all of life's critical questions, some pursue the latest religious group looking for some kind of enlightenment and fulfillment. Others, seeking absolute answers in a period of uncertainty and vulnerability, surrender their analytical, judgment and decision-making powers to religious cults or fundamentalist groups in exchange for moral certitude and promises of one brand or another of salvation.

This spiritual hunger is symptomatic of all areas of the world where modern, scientific and industrial development has grown without a commensurate spiritual growth. The modern age that emanated from the West and spread worldwide developed in a spiritual vacuum. Western Christianity over the last 500 years since the Protestant Reformation was so divided against itself and so

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

taken up in factional wars and competition for control of people's minds, hearts and souls, (and several centuries before that in external pieties and corruption), that it offered little real moral or spiritual guidance for the application of new scientific, industrial and technological developments. Without a spiritual corrective, the new discoveries and technology were used to advance an unprecedented assault on the planet and its peoples. The slave system, war system and other forms of human exploitation, and the will to dominance were escalated to new heights of destructiveness in the West. The whole world-and with it whole cultures and civilizations-was carved up on European drawing boards and portions claimed as the possession of one or another European sovereignty.

But the roots of the Western will to dominance and control go deeper than the spiritual lag of the modern era and the brokenness of Christendom. This will to dominance is rooted in the founding myths and religious worldview of the West-in the way it views the earth and nature as something apart from God-the sacred source of life-and as something apart from humans. Rather than seeing nature and the earth as something that human beings are part of, they have seen nature as an object for human domination and control.

Jean Huston describes this fatal flaw in the Western worldview thus :

The origins of the problem of technological growth and psychological change lie deep in the western psyche, and specifically, in its religious roots. In the first chapter of Genesis, God is not consonant with His Creation. It is a "handiwork" which He declares "Good." In many other myths and scriptures of the beginning times, the god is implicit in the

creation, is often indistinguishable from it. He or She is the Sky or the Earth, the Primal Waters or a Shooting Star. In the Judeo-Christian story there is an immediate distancing between Creator and creation, an I-it objectification of reality. The world and all that lies within is manufactured from without and so is "other." And the being created in the image of God, man, is similarly authorized to be dominant and removed from the subhuman world.⁷⁾

The will to dominance *over the earth* leads to a will to dominance *over other humans*, other races, other cultures, other religions. It leads not only to violations against the environment but also to violations of human rights. "Other" humans are seen as separate from self or "us" rather than as sharing one life flow.

A worldview in which one is *over* the earth also leads to existential loneliness and spiritual deprivation. When we cut ourselves off from a relationship with nature and the earth processes, we cut ourselves off from the physical and spiritual sources of our own potential fulfillment. When we destroy or deny any part of the earth, we deny and destroy part of our own essence. We are from the earth and of the earth. What we do to the earth we do to ourselves.

Technology and Nationalism as False Gods

With a lack of spiritual grounding and right relationship to the earth, faith was placed in science, machines and material progress to solve all problems and create a new heaven on earth. Nation-

7) Jean Houston, "Prometheus Rebound: An Inquiry Into Technological Growth and Psychological Change," in *Technological Forecasting and Social Change*, 9, 241-258 (1976).

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

alism, too, became a new religion and people worshipped their national sovereignty and identity in delusions of power-supremacy and separateness. the external forms of Western Christianity and other traditional religions failed to offer people the in-depth spiritual strengths and vision to manage the resulting crises.

Marxism

For some, for a while, Marxism and atheistic communism seemed more responsive and more relevant to modern crises than any of the traditional religions. But the materialist dialectic and class analysis have proved too limited for understanding the human psyche and spirit or to be an adequate guide to the future. The human prson is far too complex to be reduced to *Homo economicus*. Likewise the earth (of which humans are a part) cannot be reduced to a "means of production." While Marxism provides a useful tool for some aspects of social analysis, it suffers from the same limitations as the Western paradigm of dominance over the earth. In fact it grew out of and subsists in that Western paradigm. While it has challenged domination of one class by another, it has never challenged the paradigm of human dominance over the earth, from which class dominance feeds. Nor has it provided deep enough spiritual and philosophic foundations to support the new, global age we are entering.

A New Global Order

This is an age of tremendous problems and tremendous promise.

We are at a critical point when future human survival is not guaranteed, but must be consciously sought. Old orders and systems are dying ; they are inadequate to cope with the new dangers and problems of this period. A new world order has not yet been born. We are the midwives who must help give birth to this new global order.

A new world order needs to be born *within* us first, in a transformed consciousness ; in a right ordering of our spirit, mind, heart and will. Real changes, the real transformations in history, have begun with inner spiritual changes. The great transforming agents, the formers of new culture, have been spiritual leaders : Buddha, Lao-tse, Abraham, Moses, Mohammed, Jesus, Paul.....

This new order must also be born in the outer order of the *world community* in the form of new systems of greater justice and peace ; in a right ordering of our international relationships and structures. A new ordering of the soul requires and seeks a new outer order in the world at large, an order rooted in wisdom and compassion.

A Global Spiritual Journey

In this new age the new web of global interdependencies that binds us together, and the tremendous stresses and complex moral choices before us require a far deeper and more far reaching spirituality than at any time in previous history. We do not need a return to the external facades of religiosity. But we do need to resume the spiritual journey with a more penetrating vision, purpose and sense of direction and within new, global parameters.

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

There is much that could be said about global spirituality and still much for all of us to discover. But in the short remaining space here, I will limit myself to three important dimensions of the global spiritual journey: the journey inward, the journey outward and journey forward.

A spiritual journey is not made on a straight road that goes only in one direction—from the individual to God or the Buddha nature or nirvana or personal fulfillment. It is not a horizontal road. Neither is it a vertical “Jacob’s ladder” which the human climbs in search of a transcendent God or life source or personal realization. Matthew Fox suggests that the image of Jacob’s ladder be replaced with the image of “Sarah’s circle” as the appropriate context for spiritual discovery because the circle connotes human community and horizontal rather than hierarchical relationships.⁸⁾

But Sarah’s circle is not the whole picture either. There *are* transcendental realities that the circle may not accommodate. And a circle can also become a closed circle, excle, excluding some. A circle can also become fixed in its space and time parameters and fail to respond to new historical needs or to lead the community forward.

The Spiral

Sr. Donald Corcoran suggests that the proper image for the spiritual journey today is the *spiral*, for the spiral travels inward,

8) Matthew Fox, *A Spirituality Named Compassion and the Healing of the Global Village, Humpty Dumpty and Us*. (Minneapolis, MN : Winston Press, 1979).

outward and forward.⁹⁾ These are not opposing directions, but part of a flow ; a flow that develops in *inner* relationship to transcendental reality ; in *outward* relationships in the human community and the whole earth community ; and in *forward* motion that consciously participates in creating future history ; in ongoing genesis.

Keeping in mind the inseparability of the individual spiritual journey and the larger earth journey, let us briefly consider each of these directions.

I. The Inward Journey : Discovering the Sacred Source

The inward journey is a journey to the sacred source at the center of every being and all being. It is to enter into the deepest truth of our existence ; to separate ourselves from immediate sensory experience and surrounding circumstances and enter the deeper source of our life ; of inner integrity.

The inward journey is a journey through our deep past-all that has formed us. It cuts through the many layers of tradition, belief, culture, history, symbols that are part of our personal and collective experience. We travel inward through all the individual and collective sufferings, joys, struggles, discoveries, changes that have brought us to this present time ; through all the history and all the choices that have separated us and divided us and broken us, and all the choices that have bound us together, healed us, made us one. We journey back to a common source, back through all the ages of history ; back through the birth of human consciousness

9) Sr. Donald Corcoran, in a lecture given at the Global Education Associates Institute, Stony Point, New York, August, 1981.

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

and the birth of the human : back through the birth of life and the birth of the planet ; back to the origins of the universe to the startling moment when the universe was charged to Become ; back to the eye of God ; back to divine love.

The inward journey is a journey of death and rebirth. It requires us to die to ego attachments. It confronts us with our personal and collective sin history as well as our grace history. We are confronted with our responsibility for the state of our soul and the state of our world. We are forced to travel through the hell we have created within and around us. We are the oppressors and the oppressed. We are the one who has destroyed, crippled or straitjacketed our own creative capacities ; our potential to become more fully human. We are the one who has broken the community ; the one who has refused food to the hungry and drink to the thirsty. We are the one who has violated the earth and violated our neighbor. We are the one who has delivered holocausts and genocides, torture and death. We are the one who has cut ourselves off from love.

It is a journey that if pursued humbly and honestly to the deepest part of our being brings us to the dark tomb of self-knowledge and death which is also the dark womb of spiritual re-birth. It is the place where having confessed participation in the world's sin history, we discover our participation in grace history ; in the Buddha nature ; the Christ nature ; the Tao. Where we discover our existence in divine love ; where we are re-conceived in the knowledge that we are called to love, to divine compassion, to fulfillment, to life ; where we discover that all we need for our

personal journey and our whole earth journey has already been given to us. That from the beginning we have been blessed. We are sacred beings.

II. Outward Journey : Discovering the Sacred in the World ; The Great Compassion

Paradoxically, the more deeply inward we go and the more we live in deep awareness of our own sacred center and source, the more universal we become; the more we grow in awareness of our deep unity with all peoples. and sufferings of the world's peoples are my joys and sufferings. I am part of one humanity. The struggles and hopes of the world's people are my struggles and hopes. Their loss is my loss. Their discovery and growth is my discovery and growth.

The more we grow in awareness of our own sacred source, the more we discover that our own sacred source is the sacred source of each person and all that is in the universe. In God, all are sacred. All 4.5 billion persons on the planet are sacred. All are loved by God, including those we consider our enemies. (Thus Christ said, "Love your enemies. Do good to those who hate you.")

A truly global spirituality recognizes that God's love and sacred presence is manifested in diverse and wonderful ways everywhere around the planet, in all cultures, nations beliefs. A global spirituality respects diversity. It seeks to discover truth, beauty and goodness in many different cultural manifestations. It recognizes the sacred in the wisdom and experience of all the world's cultures and traditions : Hinduism, Buddhism, Islam, Judaism, Christianity, tribal religions.

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

A new world order will be nurtured in the universal extensions of love, compassion, justice and peace. All of the world's great saints manifested this universal compassion. Gandhi, Mother Teresa, Dorothy Day, Martin Luther King are contemporary examples. Christ was a model of universal compassion. He stood with the sinners, the crippled, the lepers, the "foreigners," the poor, the hungry, the women, the humble fisherfolk. All these were in one way or another the "untouchables" of society, those living on the underside of dominance. And he witnessed that all were important, all were sacred. Were not all one Father ; all branches of one Vine ; members of one Body, sharing life in One Spirit ?

Christ's universal compassion emerged from a profound awareness and life in the Spirit. It involved being and doing ; contemplation and action. This compassionate love was defined in words and deeds : in the Beatitudes ; in the command to feed the hungry and give drink to the thirsty ; in the command to forgive the enemy ; in the parable of the Samaritan and the encounter with the Samaritan woman-where cultural and national divisions are transcended in awareness of shared humanness ; in the imagery of the banquet to which all are invited ; in the central image of one loving, forgiving Father ; in the vision of the Kingdom of God which is to be realized within ourselves and in our relationships with others. And in taking on the human condition with full compassion ; giving his life so that the world would learn how to love and how to recognize the sacredness of life.

Forgiveness

The first step in the outward spiritual journey, in the healing of the planetary community and creation of a new world order, may be learning to forgive and to seek forgiveness. Universal love, compassion, justice and peace, are not possible without a recognition of our mutual responsibility for the brokenness of the world community and our capacity to heal that brokenness. We each have hurt and have been hurt by others; we have broken trust with one another. We can each help heal the past.

This is true of nations as well as individuals. Perhaps the arms race is escalating to dangerous heights because as nations we are too proud to say we are sorry. It may be that as a first step to world peace, the people of the U. S. should ask forgiveness of the Japanese for dropping atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki ; and to learn to forgive the Japanese for the bombing of Pearl Harbor. It may be that the people of Japan need to ask forgiveness from the Koreans and Chinese for their past invasions and brutal occupation ; that the Germans need to ask forgiveness for the genocide of six million Jews and their invasions in Europe ; that the Soviets need to seek forgiveness for their transgressions in Afghanistan and Eastern Europe. Each nation has a history which needs to be healed before we can build a healthy world community together. Learning to seek and grant forgiveness between national societies is an important part of the outward spiritual journey ; a part of national ego transcendence needed for a more *human* world order.

A Spirituality of the Earth

Any spirituality deep and large enough for this new global age also needs to include a profound sense of our common dependency on the earth. We are not *over* the earth. We are *part of* the earth processes. We will live and die as the earth lives and dies.¹⁰⁾ And any authentic global spirituality will also have a profound sense of the divine consciousness that informs every species and every atom of the earth and universe. When a whole plant or animal species is destroyed, a part of God, a part of ourselves, a part of the Buddha nature, a part of the universe is silenced and lost forever. Even God cannot bring it back.

Everything that is on earth comprises our human nature. If we lose any part of the earth, we lose part of our nature. This is true in the physical/material sense. Our bodies are made up of the earth elements in the same proportion as they exist in the earth. It is also true in a spiritual sense. To lose a rainbow, to lose the flowers, to lose a plant or animal species is to lose an important part of our experience. If we lived on a desolate place like the moon, human nature would also be desolate.¹¹⁾

A *world* order is more than just a *human* order. It is an order in which humans learn to bring their lives into communion with the earth processes-material, plant, animal-of which we are an interdependent part. A global spirituality rejects the dualism

10) Thomas Berry, "The Ecological Age," *The Whole Earth Papers*, No. 12 (1979), Global Education Associates.

11) Thomas Berry, in a presentation made at Seton Hall University, October, 1981.

between spirit and matter, between soul and body, between human and non-human. An authentic global spirituality recognizes what the Native Americans recognized when they spoke of a *united planet of nations* in which *human* nation needs to live in right relationship with the *tree* nation, the *water* nation, the *bird* nation, the *buffalo* nation, etc.¹²⁾

Our Shinto and Buddhist and Hindu and Taoist and tribal African and Native American ancestors intuitively understood the divine presence in the earth processes and our spiritual kinship with all life forms. Thus when Chief Seattle, leader of the Native American Suquamish tribe was asked to sell tribal lands to the U. S. government in 1854, he responded :

How can you buy or sell the sky, the warmth of the land ? The idea is strange to us.

If we do not own the freshness of the air and the sparkle of the water, how can you buy them ?

Every part of this earth is sacred to my people. Every shining pine needle, every sandy shore, every mist in the dark woods, every clearing and humming insect is holy in the memory and experience of my people.....

We are part of the earth and it is part of us. The perfumed flowers are our sisters ; the deer, the horse, the great eagle, these are our brothers. The rocky crests, the juices in the meadows, the body heat of the pony, and man-all belong to the same family.

If we sell you our land.....teach your children what we have taught our children. that the earth is our mother. Whatever befalls the earth, befalls the sons of the earth. If men spit upon the ground they spit upon themselves.

This we know. The earth does not belong to man : man belongs to

12) *Ibid.*

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

the earth. This we know. All things are connected like the blood which unites one family. All things are connected.

Whatever befalls the earth befalls the sons of the earth. Man did not weave the web of life ; he is merely a strand in it. Whatever he does to the web, he does to himself.¹³⁾

Thus, too, these lessons from *Zen Buddhism* :

Once when Joshu was still with Nansen, Nansen took an ox into the Monk's Hall, and led him around. The head monk whacked the ox on the back three times, and Nansen took a sheaf of grass and put it in front of the head monk, who said nothing.

Has an ox the Buddha Nature ?

Had the head monk the ox nature?¹⁴⁾

Rain, hail, snow and ice
are divided from one another ;

But after they fall,
They are the same water
of the stream in the valley.¹⁵⁾

Thus also in *Taoism* :

"The universe came into being
with us together ; with us, all
things are one."¹⁶⁾

We need to relocate the deep awareness our tribal ancestors had of the sacredness of the earth and all its living parts ; their sense of oneness and interdependence with the earth and each other.

This does not mean going back to the past. We cannot go back.

13) The full text of Chief Seattle's speech is painted in a number of sources, one of which is *Power to the People : Active Nonviolence in the U. S.* (Culver City, CA : Peace Press, 1977).

14) From *Zen and Zen Classics : Selections from R. H. Blyth*, compiled and with drawings by Frederick Franck, (New York : Vintage Press 1978), p. 63.

15) *Ibid.*, p. 141.

16) As quoted in Alan Watts, *Tao : The Watercourse Way*, (New York : Pantheon Books 1975).

The world of today is far too complex for that. But we must bring the best insights of the world's spiritual traditions forward into our new global context and add to these a new spiritual inquiry appropriate to our times. Even in this more complex, modern world we must come to see how we are bound together; and what we do to the earth and to each other we do to ourselves. We live and die as the earth lives and dies. We live and die as our brothers and sisters live and die.

Unity of Life

The world has long been divided by the external differences between religious belief systems. Bitter and bloody wars have been fought over these differences. But in the inner or mystical vision of all the authentic religions has been the universal discovery that all are bound together in one life force. In fact the English word *religion* is derived from the Latin *religiare*, meaning "to bind together; to make whole; harmony." In Sanskrit one of the original meanings of dharma (external religion) is the same: "to bind together as one the whole universe."

The discovery and affirmation of the unity of all in one Spirit, one sacred source and divine consciousness, is a recurrent theme not only in tribal spirituality and the Eastern religions, but also in the mystical streams of Judaism, Christianity and Islam. It is central in Sufi and Baha'i spirituality which grew out of Islam. It is the essence of Christ's teachings:

- "That all may be one as I and the Father are One."
- "Love one another as I have loved you."

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

- "I am the vine, and you are the branches."

The old separations were only separations of the mind. The deeper reality is our oneness in one God, one earth, one life, one nature. To understand this is to understand the basic message of authentic religion but it is also to understand (stand in) the basic truth of the universe. It is to *stand in* the deepest truth of existence—that we are all part of one life on one planet that is itself part of one cosmic creational event. What happens to the earth and to the "other" happens to ourselves.

To *stand in* this awareness is the deepest mode of knowing because it is knowing in the sense of seeing/doing.

It demands that one's life be lived in accord with the knowledge of one's essential unity with all life.

Science and Spirituality

If traditional religions and Marxism have lost sight of this basic spiritual truth, it is now science that is helping us rediscover it. This is ironic because in its commitment to empirical discovery and verification of truths about the world, scientists have often *dismissed* the more intuitive knowledge and insights *from* earlier religious inquiry.

Nevertheless, and despite its near exclusive focus on physical reality and the exclusion of religious questions, *it is* now scientific inquiry *that* is verifying the seminal insights of spiritual inquiry. Scientists are exploring the smallest particles of matter and the far reaches of space and beginning to discover empirically what spiritual visionaries have known intuitively. The universe is one.

All is interrelated and bound together. The universe is charged with a marvellous intelligence and inner cosmic laws that guide its intimate workings on micro and macro levels, from the smallest cells with electrons, neutrons and protons functioning in patterns of dynamic communion to the solar systems and galaxies moving in cosmic communion and interdependence.

Our astronauts go into space as technicians. Some come back as mystics. From the darkness of space they have seen the earth in a new way. This new vision of the earth as a subsystem of one minor solar system in a remote galaxy of a vast cosmos brings with it a new humility. We are not so powerful after all. We did not create the Earth. We are not the masters. We are not *over* the earth but are part of this single cell we call Earth. "We will live or die as this cell lives or dies."¹⁷⁾

There is an existential loneliness that comes from our sojourn in space. We do not know whether there is life as we know it on any other planet. Our planet may be a singular life-supporting cell among the billions of planets and solar systems in the galaxies. This loneliness is *awe-filling*. We are filled with dread at the possible emptiness and silence of the universe and also filled with awe at the possible, yet unknown, fullness we may discover.

Through our scientists we have gone into the remote and silent space where the gods were once thought to dwell with the expectation of claiming it for our own. For some, in that dark stillness a powerful, ultimate presence is felt that is beyond knowing. We

17) Thomas Berry, "Ecological Age," op. cit.

have returned to Earth with the new but old knowledge of the indwelling presence of the sacred. And we are discovering that the God of the Cosmos is also still immanent on earth, having never really left. It was only we who could no longer see or hear or know that presence because of our aberrations. But we are coming to know again, as our tribal ancestors knew, that this is the planet of the indwelling God, a sacred place where the Spirit of Life is working a new creation, a new genesis.

III. New Genesis : The Forward Journey

The vision and story of the cosmos that has emerged from scientific inquiry is, in Thomas Berry's view, the most profoundly revelatory experience of humankind since the emergence of the great religions. In its corrected, integrated version, "this story constitutes the basic hope for a viable future for the human community and for the planet earth." Once this cosmological myth is given its integral expression as a "numinous/spiritual as well as a mechanistic/physical" process, then the human community has a foundation on which to proceed in creating a new human order :

World order is a product of the world process. In its human phase world order is a continuation of the cosmic/earth process. The "order" involved is not the order of an abiding image of eternity such as that presented by Plato.....but the order of a universe and a human community that is coming into being. This sense that the human order is a continuation and participation in an emerging world process is primary in our discussion. There is not, and never has been, an *established* world order. There is only the world genesis : a cosmogenesis, biogenesis, anthropogenesis.¹⁸⁾

18) Thomas Berry, "Contemplation and World Order," in *Christian Voices*, a special edition of *The Whole Earth Papers*, No. 10 (1978), Global Education Associates.

The forward journey begins with the recognition that the present order, however dark, however dangerous, however polarized, is not the last word. Human genesis, like the cosmogenesis of which it is a part is still in process. We have not finished our journey. We are unfinished humans and unfinished communities. There are no developed nations. We are all developing nations, Part of a developing world community. We are called to grow, to become more.

Struggle, Pain, Hope: The Becoming Human

The forward spiritual journey is the struggle toward the not yet but the possible human and the possible human community. It is the journey of the becoming human and the becoming human community. It is conscious participation in ongoing genesis.

The outward journey; the authentic recognition of God's love for the world; real compassion, leads to engagement in the world, to struggle, to action to suffering, to vulnerability to growth. Without vulnerability and struggle we cannot grow; we cannot create; we cannot go forward.

A truly new human order will be created in the meeting ground between contemplation and struggle; reflection and action. The personal spiritual journey takes on meaning and purpose when we struggle to find an adequate response to the real life and death questions which life puts before us. As Victor Frankl noted in *Man's Search for Meaning*, we find meaning or fulfillment not when we seek our own spiritual realization, but when we transcend ourselves in response to the larger questions which history con-

stantly puts before us.

He made the following observations about the brutal experience he and others suffered in a Nazi concentration camp, when many were tempted to surrender their will to life :

What was really needed was a fundamental change in our attitude toward life. We had to learn that ourselves and furthermore, we had to teach despairing men that it did not really matter what we expected from life, but rather what life expected from us. We needed to stop asking about the meaning of life, and instead to think of ourselves as those who were being questioned by life daily and hourly. Our answer must consist, not in talk and meditation, but in right action and in right conduct. Life ultimately means taking the responsibility to find the right answers to its problems and to fulfill the tasks which it constantly sets for each individual.....

He also wrote :

By declaring that man is a responsible creature and must actualize the potential meaning of his life, I wish to stress that the true meaning of life is to be found in the world rather than within man or his own psyche, as though it were a closed system. By the same token, the real aim of human existence cannot be found in what is called self-actualization. Human existence is essentially self-transcendence rather than self-actualization. Self-actualization is not a possible aim at all, for the simple reason that the more a man would strive for it, the more he would miss it. For only to the extent to which man commits himself to the fulfillment of his life's meaning, to this extent he also actualizes himself. In other words, self-actualization cannot be attained if it is made an end in itself, but only as a side effect of self-transcendence.

What a desparate collection of men recognized and asked of themselves in the shadows of the gas chambers and mass extermination, we who live today in the shadow of nuclear genocide need to ask ourselves : "What is life asking of us?"

Today life is putting before us some very critical questions. They are life and death questions. They are not being adequately addressed in any national or international political forum. But they remain to haunt us all the same, crying out for some form of adequate response.

Around the earth, young people are picking up the call and feeling anguish about their uncertain future. We have already referred to the despair felt by those who feel powerless in the face of the enormity and complexity of the issues today. We stand here at this time and space, at a place in history where we are personally and collectively being asked to respond to life and death questions about the future of humanity; when we are faced with anti-creational or creational choices; when we are being asked to consciously participate in ongoing creating a new human order, a new genesis. And we look at ourselves and ask, "Who are we? Are we capable of the psychological, spiritual, mythic growth required for the next stage of our journey? Are we capable of becoming and living as *world* community?

While some scientists have been exploring outer space, others have been exploring the inner space of the human psyche and soul, the inner reaches of human nature. They have also been doing brain and mind research, understanding the different functions of right and left brain hemispheres and the human capacity for both intuitive and rational modes of knowing. They have been discovering that we have vast untapped potential; that we haven't begun to reach the limits of our mental, psychic, spiritual capacities; that we may still be in an early stage of our evolution. We

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

are still in a process of *becoming human*. And we are still in the process of becoming human *community*.

The work of psychologist, Abraham Maslow¹⁹⁾ is especially relevant to the image of *The Becoming Human*. It is an image which, in Maslow's vision, is inseparable from an image of *The Becoming World Community*.

Maslow describes human potentialities in terms of inherent human needs and capacities that include not only Basic needs (food, shelter, security, belonging, affection, esteem) but also meta or *Being needs*. The Being needs/values include a long list of about 40 attributes such as Justice, Peace, Love, Unity, Beauty, Truth, Goodness, Simplicity, Joy, Playfulness. These are not abstract ideals remote from human possibility. They are part of the inherent ground of our being without which we feel incomplete, deprived, not fully human.

These Being needs are also the words which, through centuries of spiritual search, people in different cultures have come to use to describe God, the Buddha nature, the Christ nature, Atman, the divine. In its essence, seeking human completeness, the search to become fully human, is the search for the indwelling God in us, for becoming more God-like. The Being needs/and values pull us forward in search of their realization, even as a tree struggles upward in search of light. From the beginning we have been coded to seek our realization in this way; the realization of our

19) Abraham Maslow, *The Farther Reaches of Human Nature*, (Harper and Brothers 1954, revised ed., 1970), and Maslow, *Toward a Psychology of Being*, (Van Norstrand 1962).

personal potential and also our collective human potential. Our potential being, our potential humanity pulls us forward toward its realization.

Justice, peace, world community are not easily achievable, but they are not something apart from our nature. They are part of our calling in history the not yet which struggles to Become; the working ground for and through which we are called to shape our personal and planetary future.

Maslow says that the instinct to become fully human is not strong in us. We human being do not automatically realize our potential. We are much more vulnerable than animals. The great tragedy of human existence is that so many finish their lives without realizing their full potential. He felt that the "actualization of the highest human potentials is possible-on a mass basis basis-only under 'good' conditions; that we need a good a good society in which to grow." By "good society" he said "one species, one world."

Like Frankl, Maslow concluded that self-realization is not attainable as an end in itself. Only through self-transcendence, through responding to issues larger than self do we become fully human. In a sense we can look at the issues history is putting before us and say with Christopher Fry, "Thank God we live in times when problems are soul sized," when so much is demanded of us, when we are challenged to stretch ourselves and become more.

Maslow saw the long range goal as world peace through one world, one law.²⁰⁾ For him the development of the fully human

20) Abraham Maslow, "Politics 3," *Journal of Humanistic Psychology*.

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

person and the development of world order were inseparable from each other. He put it this way :

There is a kind of feedback between the Good Society and the Good Person. They need each other *sine qua non* to each other. I wave aside the problem of which comes first. It is quite clear that they develop simultaneously and in tandem. It would in any case be impossible to achieve either one without the other. By Good Society I mean ultimately one species, one world.²¹⁾

A more just and peaceful world order can be viewed as a necessary *pre-condition* for the full flowering of the human person and the full flowering of an authentic, lived spirituality. It can also be viewed as the natural *outcome* of the human search for completion and fulfillment, of an authentic spirituality.

For Maslow the far goal was world peace through world law. For Sri Aurobindo, the Indian mystic and philosopher who was a spiritual force in India's struggle for independence, a world political order or world government was a necessary step in the larger spiritual journey of the human community. The far goal he saw was spiritual union; a spiritual order. But he saw political unification as an essential middle step that could not be separated from or skipped over in the longer spiritual journey.²²⁾

21) Abraham Maslow, *The Farther Reaches of Human Nature*, op. cit., p. 19.

22) Sri Aurobindo, *The Future Evolution of Man*, (Wheaton, IL : Theosophical Publishing House, 1974), and *Human Cycle, Ideal of Human Unity*, (New York : International Publishers Service 1971). See also, A. B. Patel, *Toward a New World Order*, (Pondicherry, India : World Union International, 1974). Mr. Patel builds on the thought of Sri Aurobindo and looks at both the spiritual and global political implications for world order of Aurobindo's thought.

What Kind of World Order ?

Whether we consider the far goal as spiritual union or as full human realization in a context of world peace through world law, we who live now are faced with some immediate problems, that challenge human survival and the future of our children and grandchildren. We are still en route. We still have a long way to go to a world order of Maslow's or Sri Aurobindo's vision. Meanwhile, a new order is already developing. This new order could be a dangerous order. It could also be a positive forward.

The question is not *whether* there will be a new human order. It is rather, *what kind* of order ? What values and worldviews will it be built on ? Will it be a world order based on power and domination over the earth and each other ? Will it serve a few at the expense of the many ? Will its successive stages lead to increasing hunger, war, deprivation and dehumanization ? Will it be an order where increasing wealth flows into the hands of a few ? Or will we decide to journey on a path toward a world order that serves all humanity as a whole ? Will it be a liberating and humanizing world order ? Will it help us become more fully human and more fully human community ?

The answer to these questions will depend upon the quality and values of people on the journey and on the quality of their spirituality. Who will be involved in the formulation and decision-making process for a new world order ? Will they include men and women rooted in a global and creational spirituality ? In a spirituality that is conscious, courageous, humble and bold enough to

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

guide and support us in becoming co-creational with the Spirit of History in the work of building the earth?

We live in a certain fullness of time. All of the great spiritual visionaries of the past have the oneness of life—a dynamic world order—beneath the surface evidence of brokenness. But never before in history has the vision “that all may be one” been a practical possibility in the human *social* order. Now, for the first time in history, we have the global transportation, communications, and economic infrastructure that make human community on the global scale a practical possibility. Now, for the first time in history, we know how many we are on the planet, what our languages are, how we are alike and different. Now we know through our explorations in space, our explorations of the earth’s biosphere, our explorations of the limits and possibilities of our one planetary homeland, how mutually dependent we are on the earth and on each other for our future survival.

It is a time in history, therefore, when the call to world justice, peace and unity take on special significance. We who live in this time are given a special mission to forward a more human world order. We are challenged to do this within ourselves in deepened consciousness of our mutual dependence and in deepened consciousness of the earth. And we are challenged also to forward our mutual survival and well being through the development of a world social political order of greater justice and peace.

An Interdependent God

But there is no guarantee that a more human, just and peaceful

world community will be developed. We live in an interdependent world. The God of this world is an *Interdependent God*; a God who acts through us; who depends on us; who depends on our willingness to help create the future; our willingness to take on the critical questions of history and to be conscious participants in the ongoing world genesis.

We live at a critical crossroads in history. All of history has been leading to the present moment of decision. All of our separate past histories now converge in one shared future history. There always has been a world order from the beginning of the creational journey. Only we in our blindness didn't recognize it. We set up divisions and boundaries. We lost sight of the sacredness of ourselves and all creation. Now we are being called to die to our old divisions, to heal our brokenness, to build the planet of God as a sacred planet where God's love is more fully manifest.

To do this requires a deep spirituality. A deep relationship with God. Otherwise we will give up hope. The deeply spiritual person sees the suffering in the world and takes on that suffering as Christ took it on. This is possible only when we live in hope. Otherwise the suffering could not be endured. It would lead to cynicism and despair. It would kill the spirit and the capacity to create.

Deeply spiritual persons experience the suffering in the world as their own suffering. The world is not something apart from them. Their skin is not a dividing membrane that separates them from the world but a connecting membrane, a permeable membrane, through which events of the world and events of their inner life

flow into one another.

They suffer with the world. But they do not become obsessed by their suffering and the world's suffering. They do not let it overtake them and destroy their spirit, their ability to choose life. To live deeply in the Spirit is to be able to see beyond the immediate evidence of brokenness and suffering. It is to be able to imagine alternatives. It is to seek the not yet, but possible future. To live deeply in the Spirit is to find the courage to create in the midst of darkness; the faith to plant seeds in the dark ground of our times so that new life can flourish in the future.

Rubem Alves, the Brazilian author of *Tomorrow's Child*, has this to say about hope and suffering and the creative act :

What is hope ? It is the presentiment that imagination is more real and reality less real than it looks. It is the hunch that the overwhelming brutality of facts that oppress and repress is not the last word. It is the suspicion that Reality is more complex than realism wants us to believe ; that the frontiers of the possible are not determined by the limits of the actual, and that in a miraculous and unexpected way, life is preparing the creative events which will open the way to freedom and resurrection
.....

The two, suffering and hope, live from each other. Suffering without hope, produces resentment and despair. Hope without suffering creates illusions, naivete and drunkenness.....

Let us plant dates, even though those who plant them will never eat them..... We must live by the love of what we will never see. This is the secret discipline. It is a refusal to let the creative act be dissolved away in immediate sense experience, and a stubborn commitment to the future of our grandchildren. Such disciplined love is what has given prophets, revolutionaries and saints the courage to die for the future they envisaged. They make their own bodies the seed of their highest

hope.²³⁾

We must be far-sighted enough to plant seeds now toward a new Genesis so that our descendents will look back at us as ancestors who brought honor and life to them and the planetary community. We must be willing to bring whatever talents, skills, insights we have toward a new genesis in the human community; one along the direction Robert Muller, Secretary of the U. N. ECOSOC, points to in the epilogue to his forthcoming book, *Global Spirituality*:

NEW GENESIS

by Robert Muller

And God saw that all nations of the Earth, black and white, poor and rich, from North and South, from East and West, and of all creeds were sending their emissaries to a tall glass house on the shores of the River of the Rising Sun, on the island of Manhattan, to study together, to think together and to care together for the world and all its people. And God said : That is good. And it was the first day of the New Age of the Earth.

And God saw that soldiers of peace were separating the combatants of quarrelling nations, that differences were being resolved by negotiation and reason instead of arms, and that the leaders of nations were seeing each other, talking to each other and joining their hearts, minds, souls and strength for the benefits of humanity. And God said : That is good. And it was the second day of the Planet of Peace.

And God saw that humans were loving the whole creation, the stars and the sun, the day and the night, the air and the oceans, the earth and the waters, the fishes and the fowl, the flowers and the herbs, and all their human brethren and sisters. And God said : That is good. And

23) Rubem Alves, *Tomorrow's Child*, (New York : Harper and Row, 1972).

TOWARD A GLOBAL SPIRITUALITY

it was the third day of the Happy Planet.

And God saw that humans were suppressing hunger, disease, ignorance and suffering all over the globe, providing each human person with a decent, conscious and happy life and reducing the greed, the power and the wealth of the few. And God said : That is good. And it was the fourth day of the Planet of Justice.

And God saw that humans were living in harmony and in peace with one another, wisely managing their resources, avoiding waste, curbing excesses, replacing hatred with love, greed with contentment, arrogance with humility, division with cooperation, and mistrust with understanding. And God said : That is good. And it was the fifth day of the Golden Planet.

And God saw that people were destroying their arms, bombs, missiles, warships and warplanes, dismantling their bases and disbanding their armies, keeping only policing of peace to protect the good from the bad and the normal from the mad. And God said : That is good. And it was the sixth day of the Planet of Reason.

And God saw humans restore God and the human person as the Alpha and Omega, reducing institutions, beliefs, politics, governments and all man-made entities to mere servants of God and the people. And God saw them adopt as their supreme law :

"You shall love the Lord your God with all your heart, all your soul, all your mind and all your strength. You shall love your neighbor as yourself. There is no greater commandment than these." And God said : That is good. And it was the seventh day of the Planet of God.²⁴⁾

(This essay was presented by the author at the International Symposium on Education and Human Dignity for Global Interdependence held at Sophia University on November 1, 1981, and a partial revision was further made by the author.)

24) Robeat Muller, from the Epilogue to *Global Spirituality* (forthcoming Doubleday, 1982).

〈論文要旨〉

Social Teaching of John Paul II

Anselmo Mataix

I try in this article a systematic outline of the social teaching of the present Pope. After giving a short account of his activities, I develop his own ideas about the mission of the Church towards social problems. Concentrating in the human dignity as the fundament and criterion of his teaching, I examine his ideas about justice and peace, right of property and labour, armaments, violence and conscientization. As a conclusion I show some concrete points as a new life style.

Catholic Thought on Property

Burghard Weghaus

The question of property as a socially regulated right to use material and non-material goods is a central question in social problems. The traditional teaching of the Church goes more into the direction of saying that all goods of the earth are common. Since the early medieval, the teaching of the Church began to stress private property right as desirable, because people would pay more attention to their possession, responsibilities were clearer separated, and peace would be better guaranteed. These three reasons were

worked out by Thomas Aquinas, but he never insisted that private property right were a natural law.

Later times explained private property as a natural law, but it was never an absolute right, the social duty of property was never doubted. With the industrialization of Western countries reasons as : care for the future, security for the family, and protection of freedom were added as a basis for the necessity of property right. Pope Leo XIII published in the encyclical 'Rerum Novarum' (1892) the official position of the Church in social questions. He laid very much importance on the right towards private property. His words are very often misinterpreted as if he had made the property right an absolute right and backed the rich to amass more riches. He actually had much more small ownership in mind, to protect the workers' family against capitalism as well as against socialism.

This is the teaching up to date. The following Popes developed it, Pope Paul VI made it quite explicit in his encyclical "Populorum Progressio" (1967). He does not leave any doubt that private property is no absolute right, it has to function on the basis of equality and justice. And to make it function better the quest for co-determination of workers is growing stronger.

The Management Philosophy based on the new Encyclical 'Laborem Exercens'

Keizo Yamada

The Pope John Paul II publicized the Encyclical "Laborem Exercens" on 15 Sept. 1981 describing at the last page, "I prepared this document for

publication on 15 May last, on the ninetieth anniversary of the Encyclical 'Rerum Novarum', but it is only after my stay in hospital that I have been able to revise it definitely."

He stressed the principle of the priority of labour over capital, saying ".....in every social situation, there is a confusion or even a reversal of the order laid down from the beginning by the words of the Book of Genesis : man is treated as an instrument of production....."

He also explained that the "class" question was especially highlighted as the center of the social questions, in more recent times it is the "world" question that is emphasized. Thus, not only the sphere of class is taken into consideration but also the world sphere of inequality and injustice, and as a consequence, not only the class dimension but also the world dimension of the tasks involved in the path towards the achievement of justice in the modern world. (cf. I-2)

According to the line of this Encyclical, I presented the problems of the invasion of Japanese transnational corporations towards Asian neighboring countries, which raise the serious problems to the people of these developing countries, which gears the so-called "North-South" problems, that is, the wide gap between Japan and other Asian countries, as well as the power structures which continually increase this gap. And I tried to seed the possible way of solution building up the Management Philosophy based on the principle of the Encyclical.

The main process of the Articles is as follows :

I . The Historical Background of the Labour Questions

- (1) The Criticism against the Economism and Materialism
- (2) The Criticism against the Capitalism and Socialism

II . The Social Analysis of the Modern World

- (1) The Analysis and Vision according to the Encyclical
- (2) The Vision according to the Encyclical and the Opposite Reality

Ⅲ. Worker Solidarity

Ⅳ. Work Value

V. The Management Philosophy Based on the Human Dignity

- (1) The Essential Problems of the Management Organization Theory
- (2) The Problems of the Transnational Corporations
- (3) The Renovation of the Management Principle of Japanese Big Enterprises

Ⅵ. The Challenge and Response of Japanese Business Management

地球的精神性をめざして

パトリシア・ミッシー

世界史の今時点において、地球的精神性の探究と育成ほど重要な分野はない。人間の発展の歴史において、今や深刻な危機的状况に我々は突入しているのである。

我々人間は、祖先がかつて経験どころか想像だにできなかったような新しい大きな力を持つに至った。新しい生命体を試験管内でつくり出すこと、何百万年を経て発達してきた複雑でデリケートなDNA（遺伝物質）の遺伝子を組み換え操作すること、化石燃料の大量消費や森林伐採、核実験や気象実験によって地球上の気候状況に異変を与えること、そして60万種以上とも数えられる動植物の存亡が、大量破壊兵器の出現によって我々の意のままに出来ることなど、我々人間は、今や神のごとき存在になっている。

その反面、我々は生命を維持するための知恵、しかもこうした新たな力を管理する知恵を持っていないのである。精神的倫理的遅れが問題である。今、世界は古い構造や世界観や分析方法によっては到底対応出来ないまでに複雑化している。新たな生存のために、そして人間化への要請に対処出来ないでいる一種の心理的死の

状態を克服するために、より一層成熟な態度と英知ある決断—精神的強靱さが、我々には必要な時代である。

すべての生命体は、その深淵なところで神聖である。本来の精神性とは、必ずしも敬虔な祈りや儀式を意味するものではなく、我々が生命の聖なる根源に意識を促すことであり、調和させることを意味する。我々が人生において、この聖なる中心的根源に霊的に密接に交わり、そして秩序づけられていくのである。従って、これはまた宗教的旅といえる。このプロセスは静的なものではなく、動的なものである。我々一人ひとりのこの宗教的旅は、人生の諸問題からの逃避でなく、人生の真只中に聖なる中心としての神との出会いを求めるものである。地球時代の文脈において、精神的旅とは地球共同体の中で、また、その危機の真只中に我々一人ひとりが、内なる心を祈りをとおしてみつめると同時に、外の世界に向かって働きかけるものでなければならない。我々のめざす精神性は、地球的精神性でなければならない。

発展の中の精神的な不毛状況

今日、世界のあらゆるところで、精神的空虚さ、あるいは精神的な不毛の状況がある。これは近代的、科学的、産業的発展が人間の精神性の成長と不均衡にもたらされた結果みられる症状といえる。最近の日本の世論調査によると、多数の日本人は、日本が直面している第一の問題は、公害というより精神的な不毛状況であるととらえている。戦後日本で500もの新興宗教が起った背景もそうした時代の精神状況を示すものであろう。西欧に端を発し、世界に広まった近代は、新しい科学や産業および技術の発展の応用面に、真に霊的にも、道徳的にも指針を与える宗教を見いださなかった。そのために、新しい発見や技術は、地球と人間に対して未曾有の攻撃をなすものに用いられたのである。例えば、奴隷制度、戦争体系、その他人間搾取形態、ついには西欧の新たな破壊の極へとエスカレートしたのである。全世界とその文明と文化は西欧人の支配欲のもとに分割され、所有権が主張され、求められていった。この西欧の支配への意志は、西欧の素地をなす多くの神話や宗教的世界観に深く起因するものである。地球と自然を人生の聖なる源の神から区別して置き、ま

た、人間からも切り離れた考えのものであった。このように自然と人間は対峙せられ自然を征服することのみならず他の人間をも操作、支配し征服する考え方が、近代の考え方であったわけである。地球を支配しようとする意志は、他の人間、人種、文化、宗教をも支配することに導かれていく。すなわち、環境の破壊、人権の侵害ということになる。

人間が地球の上位にたつものとする世界観は、実存的孤独さと精神的な奪取状況をもたらすのである。我々は自然や地球の一部を破壊したり、否定的にみることによって我々が自然と地球との内的関係をたち切るならば、それは、我々の本質なる部分を否定し、こわすことになる。我々は自然や地球に対して上位にたつものではなく、その一部であると今日においては考える。我々は西欧の支配のパラダイムにみる考え方に長く従っていた。

精神的基盤や地球との正しい関係が見いだされない状況下に、マルクス主義や無神論的共産主義は、ある者たちには、現代の危機に対していかなる伝統的宗教よりも対応力を持ち適切であると一時的に受け入れられていたようであった。ナショナリズムもまた、人々が国家主権と国家への同一性を幻想的に信奉することによって新しい宗教にもなった。しかし、唯物論的弁証法や階級的分析は、人間の内面心理や精神の理解、また未来のための適切な指針にはおのずと限界があることが判明する。人間はあまりにもその複雑さ故に、ホモ・エコノミックス（経済人）にまで上げられてしまうものではない。地球もまた、「生産の手段」にまではさげることが出来ない。人間の地球支配という西欧パラダイムと同様、マルクス主義は新しい地球化時代を支えるに十分な深い精神的哲学的基盤を持つには限界があったといえる。

地球の精神性をめざす旅

もし、伝統的諸宗教やマルクス主義が新しい地球時代に深い精神的真理を与えることが出来ないとすれば、どこからその深い精神性なるものがもたらされるのであろうか。皮肉にも、宗教的問いかけからのより直観的智識や洞察をしりぞけ、経験的な発見や真理の検証にかかわってきた科学が、今や、我々にとって深い精神性を求める上で役に立つ。精神的問いかけのもつ発展的な洞察力を検証していくのは科

学的問いかけである。科学者たちは、最も小さい物質からはるか宇宙のかたに至るまで探究しており精神的宗教的夢想家たちがかつて直感的に洞察して知りえたことを今、彼らは経験的に発見しつつある。宇宙飛行士は、技術者として宇宙を飛び暗い宇宙から地球を新しい視点でとらえ、神秘主義者として戻ってくる。宇宙から地球をみれば一つの細胞であり、我々はこの細胞の生死とともに生き、かつ死ぬのである。

現代はとてつもないほど多くの問題群（将来の人類生存が必ずしも保証されない深刻な危機）と未来への約束（新しい地球的秩序をつくりだす）をもつ時代である。旧秩序やシステムがすでに死につつあるこの時代において、我々は意識的に新しい地球的秩序を生みだす手助けをする助産婦である。

新しい世界秩序は、第一に、我々の精神と心と意志を正しく秩序づけていく全体的意識の変革が我々自身の中に生まれることから始まる。世界史における新しい文化の形成や偉大な変革の担い手は、仏陀、老子、アブラハム、モーゼ、マホメット、キリストやパウロ等の精神的靈的指導者たちである。真の歴史上の変革や変質は、人間の内的精神の変化からまず、はじまったのであることを彼らは示している。

地球的精神性への旅には三つの重要な次元がある。それは、我々の内面に向かう旅、外に向かう旅、そして前方に向かう旅である。ドナルド・コーコランは、今日の精神的旅をひとつのらせん状の流れとしてのイメージでとらえている。この流れは、超越的現実との関連において、内面に向かい、人間共同社会や地球社会全体において、外に向かい発展し、そして未来の歴史をつくろうと意識を促し参画することによって、前方に向かう流れである。

(1) 内面に向かう旅は、個々の生命体および生命体全体の中心に位置する聖なる根源を見いだす旅である。この旅は、我々が個として、また全体として体験してきた苦しみ、喜び、闘争、発見、変革など我々を形成した全てを通して内面に旅し、さらに究極的には、宇宙の生成の驚く時点にまでさかのぼり、神のみもとに、神の愛まで立ち返るのである。この旅は、謙虚な態度で行われれば、我々のエゴへの愛着、自己中心性に終焉をもたらし、同時に、我々は精神的に再生するのである。

(2) 外に向かう旅は、世界において聖なるもの、いつくしみ深きものを見いだす旅である。より深く内面に向かって進めば進むほど、また内なる聖の中心と根源を

より深く意識すればするほど逆説的ではあるが、我々はより普遍的になり、全ての人々と深く一体である意識を高める。世界中の人々の喜びや苦しみ、闘争と希望、損失、発見と成長は、すなわち、私自身の喜びや苦しみである。いいかえれば、自分は人類の一部分をなしているのである。自分自身の内にある聖なる根源を意識すればするほどその聖なる根源は、この宇宙の全ての人々の聖なる根源であることを認識する。真の地球的精神性とは、地球上のあらゆる文化や伝統を育んだヒンズー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教や部族の諸宗教のもつ知恵と経験の多様性の中に聖なるもの、真・善・美を探究し、認識するのである。

新しい世界秩序は、愛、あわれみ、正義、平和を普遍化していく過程で培われよう。この世の全ての偉大なる聖者たち、ガンジー、マザー・テレサ、ドロシー・デイ、マーチン・ルーサー・キングは、このような普遍的あわれみを示した現代の実例である。イエス・キリストは、何らかのかたちで社会的に“不可触民”扱いを受け優勢なる者たちのかけで、社会の底辺層に生活する罪人、身障の者、ハンセン氏病の者、“異邦人”、貧しき者、飢える者、女たちや漁民ら、民衆とともにおられた。イエスは、全ての者は神聖であり、大切であることを証された方で普遍的あわれみの模範であった。

外に向かった旅の第一歩は、悔い改める心、ゆるすこと、ゆるしを請い願うことを学ぶことである。我々は、他の人々の心を傷つけ、また傷つけられして、お互いの信頼は破れた。個々人のレベルにおいてと同様、諸国家においても、そのことは言える。アメリカ国民は、広島・長崎に原爆を投下した過去の行為のゆるしを日本国民に求めるべきであるし、日本人の真珠湾攻撃の過去の行為をゆるすように努めなければならない。日本国民は過去の幾度もの侵略や、残忍な占領行為のゆるしを韓国や中国の人々に求める必要があろう。600万人ものユダヤ人の大虐殺やヨーロッパでの繰り返された侵略の過去の行為について、ドイツの人々もゆるしを請うことが必要である。ソ連の人々も同様に、アフガニスタンや東ヨーロッパ地域への侵攻、侵犯のゆるしを請うことが必要である。より人間的な世界秩序のために諸国家間でのお互いのゆるしあいによる国家的エゴの超越が、外に向かう精神的旅のひとつの重要なポイントである。

(3) 前方に向かう精神的旅は、今存在していないが、やがてくる可能的な人間と

可能的な人間共同体をめざしての闘いである。人間らしさと人間的共同体に生成することへの旅である。真の新しい人間的秩序は、瞑想と闘い、反省と行動とが会合うなかに形成されてくるのである。

ヴィクトール・フランクルは、その著 *Man's Search for Meaning* (人間の意味を求めて) において、「人間は、責任ある存在であり、人生の目的の潜在的意味を実現しなければならない。しかし、それはあたかも人間が閉ざされたシステムであるかのように自己充足的な精神的自己実現化に真の人生の意味や生きがいがあるのではなく、人生の意味は、外の世界の中に見いだされることによって実現する。……歴史が絶えず我々の前に提起する一層大きな諸問題に对应していく過程で、自己を超越することによって求められるのである」と指摘している。

心理学者であるアブラハム・マズローによれば、「我々人類は、自動的に、自らの潜在力を実現することはない。人間は、他の動物に比べてずっと脆弱である。人間の生における大きな悲劇は、余りにも多くの者は自らの潜在力を実現しないままに生を終えてしまうことである。……人間の潜在力を最高度にまで実現することは、集団というかたちで“よい条件（よい社会）下”でのみ可能である」と述べ、ひとつの種、ひとつの世界のもとで、人間の十全なる発展が、平和への世界秩序の発展と互いに密接不可分であるとしている。

どんな種類の世界秩序か

さて、我々がめざす世界秩序とは、究極的にどのようなもので、それはどのような価値や世界観によって構築されるものであろうか。

新しい秩序への摸索はすでに進んできてはいるが、これは、ともすれば危険な秩序にでもなりうるし、また、肯定的意味あいをもって前進しうるものにもなりうる。果して、我々は、地球や人間の支配という力の論理に基づいて、多数の犠牲とひきかえに、少数の者のために奉仕することで、結局のところ、飢餓、戦争、収奪や非人間化の増大をもたらす世界秩序に向けて旅するのであろうか、それとも全ての人間共同体全体に奉仕できる解放的で人間らしいそれに向かったの道を旅する決意なのであろうか。歴史上、我々は重大なる選択の十字路にある。この時期にあっ

て、我々にはより人間的な世界秩序を築きあげるよう特別な使命が与えられている。これを為すためには、神との深いつながりによる精神性が、やはり、必要である。さもなければ、我々は創造への希望、精神と能力をなくしてしまうであろう。深く精神的な人間は、世界の苦悩を自分自身のそれとして体験する。世界とともに苦しみなながらも、その苦悶の中から創造への勇気を見だし、我々の時代の暗い大地に、新しい創世記をめざして種をまき、未来に新しい生命力を開花させることを信じて求め合うことである。*Tomorrow's Child* (明日の子)の著者であるブラジルのルーベム・アルヴェスは希望と苦しみと創造的行為について、「人生は創造的な出来事を準備し、それによって自由と復活への道が開かれるであろう。苦しみと希望の二つは表裏一体である。希望なき苦しみは、憤りと絶望を、苦しみなき希望は、幻想と単純さと酔いを生む……」と言っている。

我々は、人間共同体の新しい起源、新しい創世記をめざし長期的視点に立って我々の持ついかなる才能、技術、洞察力をよろこんでさし出さなければならない。国連経済社会理事会事務局長ロバート・ミューラーは、近刊著書 *Global Spirituality* (地球的精神性)の中でその方向性を指摘している。彼は聖書になぞらえて、新創世記を以下のごとく描いている。

民が共に学び、考え、そして助け合う地球の新時代。第一日目である。

平和の兵士により、戦闘は終り、人類の利益のために諸国の民が結ばれる平和な地球。第二日目である。

民が全ての生きる物、自然界の星、太陽、大地、水、花や草、そして全ての同胞を愛する幸福な地球。第三日目である。

民が飢えや病い無知や苦しみを鎮定し、幸福な人生が分け与えられ、少数の者の欲と権力が縮小される正義の地球。第四日目である。

民が互いに調和と平和のうちに資源を賢く管理し、浪費を抑え、憎しみを愛に、分裂を協調に置きかえる黄金の地球。第五日目である。

民が武器、爆弾やミサイル等軍備を廃絶して、軍を解散し、善人を悪人、狂人から守る平和のための警察のみ維持する理性の地球。第六日目である。

民が神と人間をアルファとオメガとして復興させ、そして人間のつくった全ての諸制度、政治、信念は、ただ神と人間にのみ奉仕するものとし、それを最高の法として採用する。神は「汝の主たる神を全ての魂と力をもって愛しなさい。汝は汝の隣人を自らそうするように愛しなさい。これらにまさる戒はありえない」とおおせられた。それは神の地球の第七日目であった。

(保岡孝顕 抄訳)

上智大学社会正義研究所活動報告

I 概 要

II 研究活動

1. 所員研究
2. 学内共同研究「正義」
3. 海外調査研究「現代社会における開発教育・平和教育の再構成」

III 教育活動

1. 講演会
2. シンポジウム

IV 実践活動

1. 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会
2. ワレサ委員長をはげます会
3. 第二回国連軍縮特別総会（SSDⅡ）に核兵器完全禁止と軍縮の実現を要請する署名活動

V 出版活動

VI 社会正義研究所所員・事務局

I 概 要

上智大学社会正義研究所 (Institute for the Study of Social Justice) は、上智大学の経営母体であるイエズス会の第32回総会における「信仰の奉仕と正義の促進」の総会決定方針に沿って、1981年4月に学長直属の大学附置研究所として設立された。本研究所は、上智大学の建学精神であるキリスト教精神に基づいて、変動する世界における社会正義の諸問題を学際的に研究し、またその成果を教育と実践活動の用に供することを目的とする。

本研究所は上記の目的を達成するため、次の活動を行うものである。

- (1) 社会正義の諸側面の多角的調査研究。
- (2) 目的を同じくする内外主要研究所との連絡、交流。

(3) 研究会、講演会等の開催、その他の調査研究成果の発表。

Ⅱ 研 究 活 動

1. 所員研究（所員の専門分野からの個別研究）

社会正義に関する諸問題を、人間学、法学、経済学、新聞学、社会福祉、国際関係などの多方面から学際的に研究している。初年度の研究成果として、「ヨハネ・パウロ2世の社会教説」、「新回勅『労働』に基づく経営理念」、「所有についてのカトリック思想」、「人間の顔をもつ国際秩序」、「マス・メディアと社会正義」を本書『社会正義』紀要1にとりまとめた。

2. 学内共同研究「正義」

この共同研究は、本研究所設立以前の昭和54年度に発足し、研究所設立後は研究所の下部的な研究組織として活動を続けている。共同研究者として、法学部（国際関係法学科）、文学部（人間学研究室、哲学科、新聞学科）、神学部、外国語学部（国際関係論専攻）の教員・大学院生（計10名）が参加し、研究会には学部学生の積極的な参加がみられている。

54年度、55年度の主な研究テーマは「思想史のなかに見る正義」、「フィリピン問題」、「在日韓国・朝鮮人問題」、「開発教育」等である。56年度は年間研究テーマとして「差別」を取りあげ、前期は主としてその理論的側面、後期は個別研究として今なお国内に根強く残る「部落差別」問題を取りあげた。1982年1月13日には工藤英一教授（明治学院大学）を招いて研究を重ねた。3か年にわたった学内共同研究「正義」の研究成果は各年度ごとに報告書としてまとめた。また、同研究に対する上智大学学内共同研究、研究助成金額は以下のとおりである。

研究経費：総額2,360,000円(内訳、昭和54年度600,000円、昭和55年度1,000,000円、昭和56年度760,000円)

さらに57年度には本研究所が中心となって、新たに「平和研究—人間的世界秩序にむけての平和教育・開発教育のあり方」〔研究代表者：川田侃（外国語学部教授・国際関係専攻）〕、「食糧問題—発展途上国の食糧と飢餓」〔研究代表者：緒田原消一本研究所所員〕の2つの学内共同研究を実施する。

3. 海外調査研究「現代社会における開発教育・平和教育の再構成」

特に「開発教育」について、共同研究者〔A・マタイス（代表）、武市英雄（国際交流基金派遣）、保岡孝顕、渡辺学、渡辺頼純、以上5名〕は、短期・長期各2チームがフィリピン、インドでの“民衆レベル”の開発教育と人間的社會教育をテーマに海外実施調査研究を行い、一部は論文として発表した。1981年7月から同年10月までの期間にわたり「開発教育」と「平和教育」の再構築を旨としての新しい人間的世帯秩序のあるべき姿を展望する作業にとりかかり、国内外の専門家の研究論文・資料を整理、収集し、国際シンポジウム「国際相互時代における人間尊重」に向けて準備を行った。

本研究調査は昭和55年度日本証券奨学財団研究助成（総額500,000円）を受け、1981年11月30日研究経過報告を同財団に提出した。

Ⅲ 教育活動

本研究所は、学内外のすぐれた専門家、研究者を招き、懇談、研究交流を促進している。その機会に教育活動の一環として講演会・シンポジウムを開催した。

1. 講演会

1981年4月18日。「難民調査団報告会」

（本学3号館521教室）

研究所設立に先立ってインドシナ難民およびアフリカ難民の視察をしたA・マタイス本研究所所長らが、難民の窮状をスライドを通して報告した。（詳細はⅣ実践活動、を参照のこと）。

1981年4月26日。「マザー・テレサを囲む集い」

（本学体育館）

マザー・テレサは“The Most Beautiful Thing in the World”と題して講演し、1,600名に及ぶ参加者に深い感銘を与えた。

1981年5月16日。「ワレサ氏を囲む集い」

（本学7号館特別会議室）

ポーランドの自主管理労組「連帯」委員長、レフ・ワレサ氏を招き、500名を超

す本学学生、教職員を交えて対話集会を催した。

1981年6月10日。「開発教育講演会」

(本学上智会館第5会議室)

オランダの開発教育組織であるオランダ国際協力団体(1959年発足 NOVIB)事務局長のチュニス氏(Sjef Theunis)が、“第3世界に対する我々の意識変革”と題して講演。同氏は日本人の精神性と開発教育の可能性について述べ、さらにNOVIBが民間の機関として、同国の政府援助に対して率直な批判と提言を行っていること、また「食卓にもうひとりのお客さんを！」の運動を通じた家庭内での開発教育を紹介した。

1981年10月15日。「飢餓と食糧の適正配分」

(本学3号館521教室)

FAO・「世界食糧デー」キャンペーンに呼応して、本学文学部人間学研究室、アジア・ウィーク実行委員会(学生団体)と共催で開かれた。パネラーは、紙谷貢・農林水産省農業総合研究所海外部長、武者小路公秀・国連大学副学長、バルビア氏(H.A.B. Parpia)国連大学飢餓問題プログラム諮問委員、A・マタイス本研究所長。司会は武市英雄同所員。

1981年12月9日。「聖書における正義」

(本学7号館特別会議室)

ローマ教皇庁立聖書研究所教授で、国際旧約聖書学会会長のシェッケル博士(Luis Alonso-Schökel)が講演。本学文学部哲学科と共催。教授は、正義=šedaqaが旧約聖書の中で時として恋の歌の中で語られたように(イザヤ5, 1-7)、本来、愛=agapeに基づくもので(ヨハネ15, 1-15)、貧しい人の立場に立つことを意味したことを示して(エレミヤ22, 13-15, 詩篇72)、聖書が正義という語の持つ豊かな現代的意味を知る上で意義深いことをあらためて認識させた。

1981年12月10日。「作法的飢餓と我々の責任」

(本学7号館特別会議室)

難民問題で活発な評論活動を続けている犬養道子女史は、ジュネーブの国際機関での調査に基づき、“作られた”飢餓の実態を明らかにすると共に、日本人の責

任と役割, 特に女性の関心を喚起した。

1982年1月12日。「ポーランド軍政下に苦悩するワレサ委員長を応援する緊急アピールの集い」

(本学3号館227教室)

軍政下のポーランドの現状分析と、我々にできる具体的行動を提起した。講師にポーランド人カトリック司祭(ドミニコ会), ユリアン・ルジェツキ師, 工藤幸雄・多摩美術大学教授, 本学昭和36年度卒業生で在ポーランド4年の山崎友宏氏を招き, 最後に声明文を発表し, 同時に義援金を呼びかけた。(Ⅲ 実践活動, を参照のこと)。

2. シンポジウム

1981年10月30日～11月1日「国際相互依存時代における人間尊重」

(本学7号館特別会議室)

共 催 GLOBAL EDUCATION ASSOCIATES (アメリカ), 国際基督教大学, 日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウス

——プログラム——

第1日(10月30日)

○あいさつ 柳瀬睦男(上智大学長)

オリエンテーション A・マタイス(上智大学社会正義研究所長)

(1:30p.m.～2:00p.m.)

○講演 “A Period of Global Transformation” Patricia Mische (Global Education Associates),
“The National Security State” Gerald Mische (Global Education Associates)

(2:00p.m.～3:00p.m.)

○パネル・ディスカッション「日本の安全保障」

(3:30p.m.～6:00p.m.)

パネリスト 平野健一郎(東京大学助教授), 石本泰雄(上智大学教授), 小林直樹(東京大学教授), 司会 荒井俊次(日本クリスチャン・アカ

デミー総主事)

○レセプション

(6:30p.m.～8:00p.m.)

第2日(10月31日)

○講演 “World Order Alternatives and Strategies” G. Mische, P. Mische

(9:30a.m.～10:30a.m.)

○講演「世界秩序の推進に対する大学の役割」中川秀恭(国際基督教大学長)

(11:00a.m.～12:00a.m.)

○パネル・ディスカッション「東アジアの現状と展望」

(1:30p.m.～4:00p.m.)

パネリスト ルーベン・アビト(上智大学講師), 山田経三(本研究所所員),

鶴見良行(評論家), 司会 武市英雄(本研究所所員)

○パネル・ディスカッション「地球社会化教育」

(4:30p.m.～6:30p.m.)

パネリスト 室 靖(東和大学国際教育研究所教授), 関屋綾子(日本YW

CA前会長), 浮田久子(国際平和研究学会平和教育部会前理事),

司会 A・マタイス

第3日(11月1日)

○講演 “National, Regional and Global Strategies for World Order” G. Mische

(9:30a.m.～10:00a.m.)

○パネル・ディスカッション「国際秩序のあるべき姿」

(10:00a.m.～12:30p.m.)

パネリスト 嶋 武彦(早稲田大学教授), 川田 侃(上智大学教授), 高野雄

一(本研究所所員), 司会 ウィリアム・スティール(国際基督

教大学助教授)

○講演 “Global Spirituality” P. Mische

シンポジウムの内容の一部は、本紀要において P. Mische 女史および高野雄一
本研究所所員の論文を掲載した。また、同様のシンポジウム「アジアにおける開発
と正義」(仮題)を1982年秋に開催予定である。

Ⅳ 実 践 活 動

1. 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

上智大学は1979年12月上旬からインドシナ難民救援のため、募金活動（街頭・新宿駅前）を開始し、さらに1980年2月から同年10月まで、タイの難民キャンプに延べ152名の本学教職員・学生によるボランティアを派遣してきた。また、1981年3月22日から同年4月7日まで、A・マタイスを団長とする4名の難民キャンプ調査団が、タイ、インド、パキスタン、ケニア、ソマリアを訪れ、現地で救援活動を行っている関係者と援助協力の可能性を検討した調査団は帰国後、学内における報告会の開催、報告書「難民調査の旅」を作成し、1981年5月に「世界の貧しい人々に愛の手を」の会が発足した。

本会は、これまで本学の外事部が主管してきた難民救援活動を引き継ぎ、本研究所の実践活動のひとつとして位置づけられている。また従来の難民救援活動の全学的とりくみの精神を生かすため、本会は本学の教職員・学生ボランティアによって構成されている。なお、評論家の犬養道子女史には会のアドバイザー（1982年1月より）として協力を得ている。

本会は、難民キャンプ調査団の実態調査報告に基づき、緊急の資金援助を必要とする以下の団体に、全国の募金協力者（約200名）から寄せられている援助金（総額13,412,641円、1982年3月末現在）から常時送っている。

① カリタス・パキスタン（パキスタン）

ベシャワルのアフガン難民のために、テント、医療品、食糧、教材の援助を行っている。送金額は us\$ 10,000。

② カリタス・ソマリア（ソマリア）

コルヨーレのエチオピア難民のために、食糧援助、また、難民とソマリアの貧しい人々のための総合病院建設を計画している。送金額は us\$ 12,000。

③ カトリック救済事業団—C.R.S.（ケニア）

カクマの難民キャンプで、医療品、食糧、学校、灌漑設備の援助にあたっている。送金額は us\$ 12,000。

本会は、上智大学が1979年12月以来行ってきた「インドシナ難民に愛を」の募金活動の協力者に設立を通知し、学内においても以下のように募金活動を行った。

1981年10月13日～16日。「世界食糧デー」の催しの中で、学生諸団体の協力を得て、特にソマリアへの募金を呼びかけた。

1981年12月5日～10日。犬養道子女史の講演会の情宣と同時に、学内でアフリカの難民のための募金を呼びかけた。

1981年12月19日～23日。飢えに苦しむアフリカの難民が、共に楽しいクリスマスを迎えることができるようにと、多くの学生、教職員の協力を得て「クリスマス募金」を行った。また、来日した難民救済事業担当者とも懇談の機会を持った。

1981年7月10日。真杉道子女史（カトリック救済事業団）と懇談。

1982年2月16日。トリアライ・ナッセリ氏（医師、アフガン難民救済連合）と懇談。

募金の受付は———

口座名義「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

郵便振替口座 東京8—86078

銀行普通預金口座 太陽神戸銀行麩町支店 3090766

第一勧業銀行四谷支店 1310474

2. ワレサ委員長をはげます会

本会は1982年1月12日、「ポーランド軍政下に苦悩するワレサ委員長を応援する緊急アピールの集い」を開催し発足した。会は、上智大学創立以前の1909年にポーランドの貧しいカトリック信者たちから上智大学の建物のための最初の煉瓦（当時2,000フラン）が寄付されたことを思い起こし、また多忙の中で本学に來校されたワレサ委員長に対して、その感謝の意と物質的支援を表すことを目的としている。

多くの人々から寄せられた義援金はバチカンを通してポーランド国民に送ることとした。1982年2月28日にはA・マタイス所長がバチカンを訪れ、義援金us\$1,713を手渡した。また、現在もひきつづき義援金活動を行っている。

義援金の受付は———

第一勧業銀行四谷支店

口座名義 ワレサ委員長をはげます会 口座番号 1154006

なお、本会は『ポーランド「連帯」を支援する知識人の会』（事務局長：新田俊三・東洋大学教授）の会員として研究活動に参加している。また、本研究所所員有志一同による声明文を以下の通り発表した。

ポーランド軍政下に苦悩するワレサ委員長を応援する緊急アピール

1981年12月13日、東欧の社会主義国ポーランドにおいて、「国家非常事態」宣言が布告され、ポーランド全土は軍事政権下に置かれた。非常措置として「救国軍事評議会」が設置されるにいたり、言論、集会の禁止、報道の「検閲」等が導入された。1980年夏以来1年数か月間にわたって、自主管理労組「連帯」ワレサ委員長指導下の約1千万人のポーランド労働者が党・政府と緊迫のうちにわたりあって獲得してきた社会民主化・自由化のポーランド型「草の根」運動・オドノバ（再生）は、軍政強圧措置のもと壊滅的な危機状況に突き落とされた。

このような状況の報道に接し、私たち上智大学社会正義研究所所員一同は、このポーランド情勢の急変に深く憂いている。

現代社会においては、もはや偏狭な特定のイデオロギーだけでは「人間の尊厳」の回復の問題解決に何ら役に立ちえない、と私たちは考える。すなわち現代は、イデオロギー終焉の時代であるといえよう。

その意味において、自主管理労組「連帯」の社会民主化・自由化の基本的諸権利の要求闘争は、イデオロギーを離れ、抑圧からの解放、パンを犠牲にしてまでも「自由」を求める変革への労働運動であった、と理解する。それは、階級エゴイズムに転化されることなく、彼等のポーランド祖国社会全体の共通善という観点から、政治・経済的に崩壊寸前にまで落ち込んだ社会体制の欠陥を是正する社会正義実現のための諸運動である、と考える。

しかるに、今回の軍を背景にした国家支配体制側の強権発動措置は、ポーランド経済の主力なる生産の担い手である1千数百万にもおよぶ労働者の「人間の尊厳」に対する重大な侵犯であるといえよう。

私たちは、ポーランド国民と労働者が軍政の抑圧下にあるという最近の報道に接して、「良心と宗教的自由を踏みにじる行為が、いかに恐るべき損害を人間に与えるか」という実例をこれほど如実に物語るものはない、と考える。

私たちは、いま「平和、正義、自由に満ちたポーランドのよき未来への道」の選択のために、すみやかに戒厳令が解除され、言論、集会、報道の自由と信教の自由が一日もはやく回復し、かつ保証されるようにつよく希望する。

さて私たちは、昨年5月16日に「連帯」のワレサ委員長をここ上智大学にお招きすることが出来た。学生諸君との対話の中でも、ワレサ委員長が、イデオロギーを越えて人間の回復をめざす「人間」のための闘いに一身をかけている姿を私たちは目のあたりに見て大いなる感動を覚えた。このことを思い起こす時、祖国ポーランドの危機のまっただ中に軟禁状態下にあると伝えられるワレサ委員長をはじめとする苦難のポーランド国民に対して、上智大学につどう教職員と学生が、何を実行できるかを真剣に考えていきたい。

キリスト教精神に基づいて一粒の麦である上智大学が、この地日本に落ちて以来、60余年を経た今日、多くの実を結びつつある。それに付け、創立以前の1909年に、ポーランドの貧しいカトリック信者たちから本大学の建物のための最初の煉瓦（当時2,000フラン）が、寄附されたことをいま私たちは、思い起こさなければならぬであろう。

私たちはいま、苦難にあるワレサ委員長をはじめとするポーランド国民にその感謝の意と精神的、物質的応援を「人間仲間」の意識に基づいて表すものである。

このために上智大学はもとより一人でも多くの日本国民から義援金をよせられることを切望する。この義援金は、上智大学社会正義研究所付「ワレサ委員長を抬げます会」からバチカンを経由してポーランド国民へ送ることとする。

私たちは、彼等との連帯の意を表するとともに、学内外の一人でも多くの人びとの理解と協力をここにつよくアピールするものである。

1982年1月12日

上智大学社会正義研究所所員一同

（代表）A・マタイス所長

3. 第二回国連軍縮特別総会（SSDⅡ）に核兵器完全禁止と軍縮の実現を要請する署名活動

本研究所所員有志は、日本カトリック司教団の上記の署名の訴えに賛同し、人類

の滅亡を防ぎ、核兵器と戦争のない平和な世界を作るため、軍縮、核兵器完全禁止により、全世界で軍備のために費やされる費用を、世界の飢餓の克服と全人間的開発の実現のために出来る限り用いることを特に訴え、本学内において教職員の署名協力（1982年3月1日～3月25日）を呼びかけ400名もの署名協力と5万円あまりのカンパを得た。

V 出版活動

本研究所における1981年～1982年の研究活動の成果および資料その他の出版物は、下記のとおりである。

1. 『社会正義』紀要1(本書), 上智大学社会正義研究所, 1982年3月。〔研究活動の成果, 年1回発行〕
2. 『国際相互依存時代における人間尊重』上智大学社会正義研究所編(1982年3月末出版予定)〔国際シンポジウム(1981年10月30日～11月1日)の成果〕
3. 『マザー・テレサを囲んで—Dialogue With Mother Teresa』上智大学社会正義研究所, 1981年10月。〔講演会のとりまとめ〕
4. 『ソリダリノチ〔連帯〕のワレサ委員長を囲んで』上智大学社会正義研究所, 1981年10月。〔同上〕
5. 『学内共同研究「正義」報告書—昭和54年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1980年4月, 〔上智大学学内共同研究の成果〕
6. 『学内共同研究「正義」報告書—昭和55年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1981年11月。〔同上〕
7. 『学内共同研究「正義」報告書—昭和56年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1982年4月発行予定。〔同上〕
8. 資料
 - 1) 『国際相互依存時代における人間尊重』(英文邦訳資料) 上智大学社会正義研究所, 1981年10月。
 - 2) 「難民調査の旅」上智大学難民調査団(A・マタイス, 渡部清, 渡辺学, 植竹久美子), 1981年4月。

3) スライド「難民調査の旅」上智大学難民調査団, 1981年10月。(貸出可)

4) パネル

ケニアのトルカナ地方の難民の実情を伝えるもの。(貸出可)

9. その他の出版物

研究所の組織・活動内容等を紹介するもの。

1) パンフレット『社会正義研究所』上智大学社会正義研究所, 1981年10月。

2) ニュース・レター『世界の貧しい人々に愛の手を』創刊号, 1981年夏期, 第2号, 1981年冬期(本研究所気付, 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会発行, 年2回)

3) 「ポーランド軍政下に苦悩するワレサ委員長を応援する緊急アピール」(本研究所気付, ワレサ委員長をはげます会)

VI. 社会正義研究所所員・事務局

所 長	アンセルモ・マタイス	文学部教授(人間学・倫理学)
所 員	ハビエル・ガラルダ	文学部教授(人間学・倫理学)
	粕谷友介	法学部助教授(憲法学)
	松本栄二	文学部助教授(社会福祉論)
	緒田原 涓一	経済学部教授(国際経済学)
	坂本康實	経済学部教授(国際経済学)
	高野雄一	法学部教授(国際法学)
	武市英雄	文学部教授(新聞学)
	ブルクハルト・ヴェクハウス	文学部講師(社会福祉論・倫理学)
	山田経三	経済学部助教授(組織・リーダー シップ論)

客員研究員 エドワルド・ホルヘ・アンソレーナ(1982年4月1日より)

事務局 保岡孝顕, 大竹 靖



社 会 正 義 紀 要 1

1982年3月25日 印刷
1982年3月31日 発行

編 集 者	武 市 英 雄 大 竹 靖
発 行 者	上智大学社会正義研究所
所 長	アンセルモ・マタイス 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1 電 話 03-238-3023 3695
印 刷 所	聖 パウロ 修 学 院

SOCIAL JUSTICE

No. 1 (1982)

Contents

Toward Achieving Peace and Justice	<i>Mutsuo Yanase</i> 2
Social Teaching of John Paul II	<i>Anselmo Mataix</i> 3
The International Order with a Human Face	<i>Yuichi Takano</i>27
Mass Media and Social Justice —in the case of the Philippines	<i>Hideo Takeichi</i>43
Catholic Thought on Property	<i>Burghard Weghaus</i>55
The Management Philosophy based on the new Encyclical 'Laborem Exercens'	<i>Keizo Yamada</i>77
Global Spirituality	<i>Patricia Mische</i>95
Résumés of Main Articles	... 131
Reports on Activities of 1981-82	... 141

Institute for the Study of Social Justice
Sophia University